
人魚姫異伝

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫異伝

【Nコード】

N8517K

【作者名】

月姫

【あらすじ】

人魚姫をベースにしたパラレル。海に臨む城を持つ国の世継と海の王の娘との、昔々の恋物語。平和・コ（新）蘭です。童話風の文体にしていますので、苦手な方はご注意下さい。2部構成全43話。第1部には所々に軽いお笑い要素が含まれています。

第1部／第1話『出会い』（前書き）

過去作ですので既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、
ご容赦下さい。

第1部／第1話『出会い』

遠い遠い、人間たちの住む国から遙か彼方の、どんな青よりも澄み切った青い青い海の底に、人魚たちの住む国がありました。

珊瑚の壁と琥珀の窓で造られた見事なお城に住む王様には、6人のお姫様がいました。

6人の姫君は皆とても美しい方たちでしたが、中でも末の姫は一際美しく、また王国でも一番綺麗な声を持っていました。

けれど、この末の姫は、姉姫たちに比べると、少し変わった所もありました。

「……ちょお好奇心が強いだけなのに、変わり者なんて酷いわ。それより、アタシいつの間に5人も姉がおるん？」

末の姫の和葉が、お城の広いお庭でお友達の水にぼやいていると、すぐ上の姉姫がやって来ました。

「和葉ちゃん！聞いて聞いて！」

「どうしたん、園子姉さま？」

「……和葉ちゃんに『姉さま』なんて呼ばれると変な感じだけど、しょうがないわよね」

ぼそっと呟くと、姉姫の園子はたった今仕入れて来た噂話をしはじめました。

この姉姫は、ちょっとミーハーな所がありますが、いつも楽しいお話をしてくれます。

中でも、海の上の世界の話は、末の姫の和葉にとってはとても興味深いものでした。

なぜなら、和葉はまだ年が足らなくて、海の上に行く事が出来ないからです。

けれど、それもあと数日の辛抱です。

「海の上の世界もいいけど、やっぱり海の底が一番綺麗よ」

姉姫たちは口々にそう言いましたが、和葉は海の上に行ける日を心待ちにしておりました。

日が過ぎて、末の姫の和葉にもやっと父王から海の上に行くお許しが出ました。

浮き立つ心そのままに、和葉がふわりと海の上に顔を出した時、丁度お日様が沈んで宵の明星が美しく輝き始めていました。

和葉が暫く美しい夜空を眺めていると、遠くから楽しげな音楽が聞こえてきました。

どこからだろうと辺りを見回すと、波の向こうに大きな船が見えましました。

興味を引かれた和葉は、波に乗ってこっそりと船の中を覗いてみました。

そこには、美しく着飾った人間たちが大勢いました。

中でも、褐色の肌をした若い王子に、和葉は目を奪われました。

「人間の世界の事なん何も知らんはずなのに、何でアレが王子様やってわかるんか、我ながら不思議やわ」

そんな事を呟きつつ、和葉は飽きずに王子を見つめていました。

夜も更け、歌い踊っていた人たちが寝静まった頃、突然の嵐が船を襲いました。

激しい雨と風、高く荒れ狂う波が、船を襲います。

人魚である和葉には何て事はありませんが、人間たちにとってはそれこそ、生きた心地もしないでしょう。

やがて、大きな力に抗いきれずに、船は粉々に砕けてしまいました。

少し離れた所からその様子を見ていた和葉は、波に飲み込まれていく人たちの中に、王子の姿を見つけました。

「……人間って、海の中やと生きられんって、前にお父ちゃんが言うとったよね、確か」

ふと父王の言葉を思い出した和葉は、急いで王子の元に泳ぎ寄ると、力を失った身体を支えてゆつくりと陸へと向かいました。

どれくらい泳いだ事でしよう。

朝の光がうっすらと空を染め始めた頃、穏やかな波の寄せる砂浜に辿り着きました。

和葉は人魚ですから陸へ上がる事は出来ませんが、精一杯の力で波に浚われない所まで王子を引き上げました。

「……大丈夫なんかな？」

和葉が心配そうに王子の髪をかき上げた時、砂浜に程近い所にある白い大きな教会から、朝を告げる鐘の音が聞こえて来ました。

次いで、若い娘たちの声もします。

段々と近くなる声に、和葉は慌てて少し沖にある岩陰に隠れました。

程なく現れた娘の1人が王子に気付き、他の娘たちに人を呼びにやりました。

波の音に遮られて彼女の声は聞こえませんが、懸命に呼びかけてい

るようです。

やがて、王子がゆっくりと起き上がりました。

「よかった」

和葉は、ほっと胸を撫で下ろしました。

けれど、目覚めた王子が一度も振り向いてくれなかった事に、哀しくもなりました。

王子は、人魚の和葉に助けられた事など知る由もないのですから、仕方ないのですけれど。

王子の姿が見えなくなるまで見送って、和葉は海の底のお城へと帰って行きました。

第2話『海の魔女』

「和葉ちゃん、元気ないけど、どうしたの？」

初めて父王にお許しを貰った日から毎晩海の上に出掛けて行く末の姫の和葉が、毎日に口数が減り、寂しげにため息をつく様になったのを心配して、すぐ上の姉姫の園子が尋ねました。

和葉は何でもないと言ったが、園子にはピンと来ました。

「さては、恋煩いね？」

ぴったりと言いついて、和葉はさっと頬を染めました。

園子は、そういう事に鋭いのです。

「で、そのラッキーボーイはどこ誰？」

興味津々に身を乗り出してくる園子に、和葉は『人間の国の王子様と、そつと告げました。』

「それはちよつと強敵ね」

園子が難しい顔をします。

和葉にもそれはわかっています。

自分は海の中に住む人魚で、王子は陸の人間です。

今のままでは、遠くから見つめる事しか出来ません。

「ちよつと反則技だけど、海の魔女の志保に相談してみたら？あの人ってば研究が生甲斐で、アヤしい葉ばかり作ってるけど、いろんな事知ってるから力になってくれるかも」

園子のアドバイスに、和葉は少し考えてから頷きました。

海の魔女と呼ばれている志保の住処は、泡立つ渦の向こうにあります。

今までの和葉なら、その様子を見るだけで怯えてしまって、すぐにもお城に帰ってしまったでしょう。

けれど、恋はブラインド。

思い込んだら一直線です。

きつと渦を見据えると、和葉は思い切って飛び込みました。

何とか渦を抜けると、そこは流れも穏やかな静かな洞窟の中でした。

「あら、良く来たわね」

何やら難しそうな分厚い本を読んでいた海の魔女の志保が、懸命に息を整えている和葉に気付いて声を掛けました。

「用件はわかってるわ。人間になって、愛しい王子様の所に行きたいんでしょう？」

「……何でわかるん？」

「だって、そういうストーリーだもの」

さらっと重要な事を口にする、志保は柵から小さな壇を取り出しました。

「これ、何だかわかる？」

葉を手にくすくすと楽しげに笑う志保は、確かに海の魔女と呼ばれるのも頷けます。

和葉はちよつと腰が引けましたが、恋する乙女はそれくらいではめげませんでした。

「……何なん？」

和葉の声が少しだけ震えていましたが、志保は気にしません。

軽く壘を振って中身の具合を確かめると、ゆっくりと和葉に向き直りました。

「これはね、私が長年の研究の末に作り出した究極の薬。名づけて『人間になゝる』よ」

『人間になゝる』なんていうアヤしいネーミングに、和葉の胸に本当に大丈夫なのかなと不安がよぎりましたが、今は薬にでも縋りたい時なので、ツツコミたい気持ちをぐっと堪えました。

志保が続けます。

「この薬を飲むとね、人魚の尻尾が人間と同じ足に変わるの」

志保の言葉に、和葉の顔が輝きました。

足が出来れば、人間と同じように自由に陸を歩けるし、王子の傍にも行けるのですから。

「あなたが望むなら、譲ってあげてもいいわ。でも、ただでってわけにはいかないけれど」

「お礼なら……」

「あなたの声を頂戴」

志保の要求に、和葉は一瞬言葉を失いました。

声を失ったら、お喋りする事も歌う事も出来なくなります。

「……で、でも、声が出なくなったら、アタシ……」

「あなたには、その美しい姿や心を映し出す瞳があるでしょう？何かを得ようとするなら、それ相応の代償は必要なの。その覚悟がないなら、帰りなさい」

冷たく突き放すような言葉に、和葉の瞳が揺れました。

お喋りと歌は、和葉の一部です。

けれど、やっぱり恋心が勝ちました。

「アタシの声でええんなら……」

和葉の応えに、志保が微かに笑みを浮かべました。

「わかったわ。これは譲ってあげる。……でもね、欠点が幾つか」

志保が、少し悔しそうな顔をしました。

完璧な薬ではない事が、志保には許せないのでしょう。

「1つは、足が出来る時に酷く痛む事と、足が出来た後も歩くたびに剣で刺されるような痛みがある事。もう1つは、足が出来ると、今度は海の中では暮らせなくなる事」

「海の中で暮らせないって、お城にも帰れなくなるん？」

「そうよ。そんな事したら、死んでしまうわ」

それは、父王や姉姫たちとの別れを意味していました。

可愛がってくれた父王や、優しい姉姫たちとの別れは、和葉にとってとても寂しい事です。

けれど、その寂しさは恋する乙女の前には無力でした。

「あと1つ。これが最大の欠点だけど、足が出来たら二度と人魚には戻れないし、あなたの恋する王子様がもしあなた以外の誰かと結婚したら、あなたは次の朝には海の泡となって消えてしまうわ」

志保の瞳が強い光を帯びて、和葉の瞳を捉えます。

和葉が小さく息を吞みました。

「……死ぬかもしれないけど、飲んでみる？」

何かを振り切るかのように一度目を閉じて大きく息をつく、和葉は志保の瞳をしっかりと見ながら、首を縦に振りました。

第3話『海の魔女・2』

海の魔女の志保から薬を受け取った和葉は、代償として払った自分の声をどうするつもりなのか、疑問に思いました。

志保も、彼女に似合った魅力的な声を持っていますので、わざわざ和葉の声と交換する必要はないと思えるのです。

けれど、それを直接志保に訊いて、もし万が一にでも彼女の機嫌を損ねたら、せっかく貰った薬を取り上げられるかもしれません。

もしかしたら、他のどんな効能があるかもわからないような薬を、無理やり飲まされるハメになるかもしれません。

志保は、伊達に『海の魔女』と呼ばれてはいないのです。

自分の声の行く末に一抹の不安を感じましたが、和葉は深く考えない事にしました。

「あなたの声、気になる？」

突然の志保の言葉に、和葉は思わず薬を落としそうになって、慌てて両手で壘を持ち直しました。

その様子に、志保がくすつと笑います。

「あなたの瞳は、本当に雄弁ね」

そう言って、志保は傍らに置いていた淡く光る珠を取り上げました。

「これを元にね、一口飲むだけで誰でも流暢な関西弁を操れるようになる薬を作ろうと思って。あなたはネイティブだから、これはデーターベースとして使わせてもらおうわ」

志保が、和葉の声を封じ込めた珠を光に透かすようにしながら、薬

しそうに語ります。

果たして、声が関西弁のデータになるのかどうか疑問ですが……いえ、それ以上に『この世界で関西弁って?』と想ったりもしましたが、あっちの世界にトリップしていそうな志保を刺激するのも良くないし、そのくらいの事ならいいかなと、和葉はひっそりとその場を離れました。

『触らぬ科学者に祟りなし』です。

海の魔女の住処を取り巻く泡立つ渦は、入る時とは比べ物にならないくらいに穏やかに、和葉を外へと押し出しました。

和葉の手には、しっかりと葉が握られています。

人間の世界に行く前に、もう一度父王や姉姫たちに会ってちゃんとお別れを言いたいと思いましたが、声を失った今、それは叶いません。

せめてものお別れにと、和葉は結い上げた髪に飾っていた真珠の髪飾りを、お城に向かって投げました。

解かれた髪が、どこか寂しそうに波に揺れます。

(勝手な事して、ゴメン)

父王や姉姫や友人たちに心の中で告げて、和葉は海の上へと向かいました。

第4話『再会』

和葉が、王子の住むお城から海へと続く石段に辿り着いた時、夜はまだ明けていませんでした。

この石段は、お城の中心からは少し外れた所にあって普段からあまり人影はありませんが、すぐ上には王子の暮らす棟があります。

（こーゆう時は、王子様が見つけてくれるのがお約束やんな……）

そんな期待を胸に、和葉は海の魔女の志保に貰った薬を一息に飲み干しました。

とたんに、身体がカッと熱くなりました。

尾の部分だけではなく、全身が、まるで溶けるかのような痛みを訴えます。

声があったならきくと、お城に届くような悲鳴を上げていた事でしよう。

（……志保さん……これ、痛い……レベルちゃうや……ん……もうちょお、副……作用少ないん……欲しかった……わ……）

薬の製作者である志保に心の中で少しだけ恨み言を言って、和葉はあまりの痛み意識を失いました。

寄せては返す波の音に和葉が意識を取り戻した時、夜はすっかり明けていました。

まだ身体に鈍い痛みが残っていましたが、気になる程ではありません。ん。

ゆっくりと身体を起こして海に浸かったままの下半身を確認めると、昨夜まで自分が持っていた優美な尾の代わりに、ほっそりとした形

のいい足がありました。

（さすがは志保さん、伊達に魔女呼ばれてないわ。……せやけど、この後どうしよう？）

和葉が恐る恐る足を動かしながらそんな事を考えていたら、後ろから誰かが石段を降りてくる音がしました。

「そこで何やつとる？」

掛けられた声に振り向くと、あの夜からずっと慕い続けている王子が立っていました。

（何や、昔から知ってる気いするんやよね。あの嵐の夜に一目惚れなん、今更な感じなんやけど……）

そうは思いましたが、あまり細かい事を気にしてはいけないと思い直して、和葉はにっこりと笑いました。

ですが、王子はふいっと顔を背けてしまいました。

それも仕方の無い事ではあります。

今の和葉は、肩から胸まで流れる髪以外に、その身体を覆うものはないのですから。

「早う、服着ろや！ 恥ずかしくないんかい！」

そう言う王子の褐色の肌が、傍目にもわかるくらいに赤く染まっています。

けれど、和葉には『服を着る』という事と『恥ずかしい』という事が結びつきません。

それが、メンタリテイの違いでしょう。

海の中で暮らす人魚には服を着る習慣はありませんから、自分の姿そのままにいる事が恥ずかしいとは思いません。

けれど、人間の世界では、特に若い女性は人前で肌を出してはいけないし、それはとても恥ずかしい事とされています。

首を傾げたままの和葉に、王子は自分の着ていた長い上着を投げて寄越しました。

さすがに和葉も王子の意図がわかって、素直に袖を通しました。

「……で、オマエはここで何しとったんや？ 名前は？ 国はどこや？」

改めて問い掛ける王子に応えようとしますが、和葉の唇からは何一つ音にはなりません。

王子と同じ世界で暮らすために足を得る代償に、自分の声を支払ったのですから仕方ありませんが、もう二度と、お喋りをする事も歌う事も出来ないのだと改めて思い知らされて、和葉は唇を噛んで俯きました。

「オマエ、喋れんのか？」

王子の問いかけに、和葉は小さく頷きました。

本当なら、誰よりも美しい声で話す事が出来たのにとすると、哀しくて涙が滲んできます。

「オレの言う事はわかるんやな？」

もう一度、和葉が頷きました。

人魚の国の言葉と王子の国の言葉がすんなり通じる、それも和葉と同じ言葉を話すというのもおかしい感じがしますが、園子とは姉妹

なのに言葉が違いますし、この世の中にはまだ知らない事がたくさんあるので、細かいことは気にしない事にしました。

「そのまんまやとまともに話も出来んし、とりあえず城に来いや」

王子に促されて立ち上がろうとして、和葉は足に走った痛みにつらつきました。

そのまま倒れ込みそうになった和葉を、王子が支えてくれました。

「ドジやな」

笑いながらも、王子は和葉に手を貸してくれます。

和葉が、海に流されて疲れているのだろうと思っています。

（痛っ……）

まだ歩く事に慣れていませんし、足をつく度に鋭い痛みが走りますが、和葉は持ち前の負けん気で、何事もないように軽やかに歩いて見せました。

第5話『君の名は』

お城に着くと、王子は乳母を呼んで幾つかの指示を与えました。

和葉には馴染みのない言葉なのでよくわかりませんでしたがお風呂で身体を清めて着替えをさせるようにという事でした。

和葉は熱い水という物を知りません——いえ、海底には熱い海水もあったりしますが、そこには絶対に近づかないようにと厳しく言われていましたので、触れた事ありません——ので、初めは戸惑いましたが、これが人間の世界のしきたりなのだろうと、乳母の手を借りて身体を清めます。

初めて浸かった熱い湯——とはいえ、人間なら心地好く疲れを癒せる程度ですが——で火照った和葉の身体から、乳母が丁寧に水気を拭きとって、柔らかな風合いの下着と綺麗な刺繍のドレスを着せました。

身体を締め付けるドレスや窮屈な靴は、人魚だった和葉にとっては邪魔なものでしかありませんでしたが、これが人間の世界のルールなら仕方ありません。

『郷に入っては郷に従え』です。

乳母は最後に、背中に流れる髪を結ってくれました。

それは、和葉が海の世界で結っていた髪型と同じ、高い位置で纏めて流すというものでした。

その髪型に、よく髪を結ってくれていた姉姫たちを思い出して、和葉はほんの少し寂しくなりました。

「さっぱりしたやん」

広い居間でのんびりと本を広げていた王子が、和葉を見て言いました。

これは褒められているのかどうか和葉にはちよつとわかりかねましたが、無難に微笑んでおきました。

王子の部屋にしてはいっそシンプルすぎるような調度と、小机に積み上げられた何冊もの本は、それでも彼には良く似合っているように思えました。

開け放たれた大きな窓からは、遠く海が見渡せます。

自分はある海から来たのだと、和葉は改めて自分のいた世界との距離を感じました。

「突っ立つとらんと、座れや」

飲み物を運んで来た乳母が下がっても動こうとしない和葉に、王子は傍の椅子を指差しました。

指示されるままに、手の込んだ細工を施された椅子に座ります。

「まず、確認や」

そう言って、王子は本を小机に置くと、テーブルに両手について和葉を真っ直ぐに見据えました。

「オマエは本当に喋れんのやな？」

この質問は和葉にとって哀しいものではありませんでしたが、本当の事なので素直に頷きました。

「それで、オレの言う事は理解出来る」

これにも頷きました。

「文字は？」

その質問には、和葉は首を傾げました。

人魚の世界には『文字』という文化はありません。

その代わりに、貝や真珠や珠に記憶や記録、時には言葉を残す事が出来ます。

海の魔女の志保が読んでいた本も、人間の世界の本とは違い、大きな真珠貝に先人たちの記憶を閉じ込めたものです。

「これは読めるか？」

王子が1冊の本を差し出しました。

それは綺麗な挿絵の入った、幼い子供でも読める本です。

これが王子の言う『文字』かと思いましたが、和葉にはわかりません。

ゆっくりと首を横に振りました。

「書くのはどうや？」

これにも首を振ります。

王子は困ったように頭を掻きました。

「名前もわからんやんけ」

ぼそっと呟いて、王子はさっき開いた本を手元に寄せました。

「どこぞの物語やと『拾いっ子』や何や呼んどるようやけどな、それやとオマエも不満やろ？ かといって、適当な名前で呼ぶんも何やし……」

この言葉に、和葉は大きく頷きました。

『和葉』という名前は、父王がつけてくれた大切なものです。ですから、王子には本当の自分の名前を呼んで欲しいのです。

「話も出来んし文字もわからんからな、オレがコレ読み上げたるか、オマエの名前に繋がるモンがあつたら合図しろや」

こんな手間をかけてまで、王子は和葉の名前を探そうとしてくれます。

嬉しくなって、和葉は何度も頷きました。

それからどれくらい時間が経ったでしょうか。

試行錯誤を繰り返してやっと和葉の名前を伝えた時、乳母の用意したお茶は既に冷たくなっていました。

「『かずは』やな？」

本を閉じて、王子が確認します。

和葉は、満面の笑みを浮かべてはつきりと頷きました。

それを確認して、王子はほっとしたように大きく息をつきました。

「オマエがどこから来たんかはまだわからんけど、ここがどこかは教えたらんな。ここは大陸の西を治める『服部王国』の城や。オレは後継ぎの平次」

初めて知った王子の名前を、和葉はしっかりと心に留めました。

本当は知ってたようにも思いましたが、気のせいという事にしておきました。

「行くトコないんやったら、飽きるまでココにおればええ。無駄に

広い城やから、和葉1人くらい増えたかてどうって事ないしな。あ、生活の事は心配すんな。使用人も、仕事の方が足りんほどおるから」

和葉は海の王国では姫ですが、人間の世界では身寄りもないただの娘です。

そんな身元もわからない娘を、一国の王子がそう易々と近寄らせる事はまずありません。

けれど、この国の王子である平次は、客人としての待遇を約束してくれました。

ただの気紛れかもしれませんが、その気遣いに和葉は心の中で感謝しました。

第6話『新しい生活』

こうして、王子である平次の城での和葉の新しい生活が始まりました。

城の使用人たちは、名前しかわからない和葉にとっても親切にしてくれました。

それは、王子が連れて来た娘だという事もあるのでしょうが、ちょっと意地っ張りな所はあるものの、和葉が元来心根の優しい素直な娘だからというのもありました。

作法やマナーなど、知らなかったりどこかズレていたりしても、和葉は教えられた事はすぐにマスターするだけの賢さもありましたので、使用人たちは幼い子供を見守るような温かい気持ちで世話をしてくれました。

平次は、城に籠っているタイプの王子ではありませんでした。

供の者も連れずに、気軽に森や街へと出掛けて行きます。

その度に、痛む足を押して和葉はついていきました。

平次も、若い娘はあまり好まないだろう森の奥深くへの散策にも楽しげについてくる和葉が気に入ったようで、常に連れ歩いていました。

平次には、気位ばかり高い深窓の姫君は、話し相手としても物足りないのです。

言葉でのコミュニケーションが取れないのは、時にはもどかしくも思いましたが、和葉の瞳は言葉以上に雄弁に気持ちを映していましたので、お互いにそれほど不自由さは感じませんでした。

ただ1つ、和葉の持つ恋心だけは、平次には読み取れませんでした。

人間の世界は、見るものも聞くものも、勿論食べるものも全てが新鮮で、和葉には驚く事ばかりでした。

目を輝かせてあれこれと見て回る和葉に、平次は色々と教えてくれましたが、和葉には1つだけ不満な事がありました。

それは、出先で不意に起こる出来事についてです。

海の世界にもありましたが、人間も集まれば何かしらの衝突が起きます。

それは時折、王の定めた法に背く行為にまで発展する事があります。そんな時、何故か王子である平次が、その現場に飛んでいくのです。そのせいで、街中で長い時間待たされたり、いきなり約束を反故にされたり、酷い時には伝言すらなく待ちぼうけをくらったりします。

確かに、王子には国を治める義務がありますが、個々の事件を扱うのは官吏の職務のはずです。

「お約束はキャンセルだそうですよ」

乳母の言葉に、和葉はがっくりと肩を落しました。

何でも、町外れの果物売りのおばさんが殺されたという報告を聞いて、王子は駆け出して行ってしまったそうです。

今日は街へ出て、花売りの店に連れて行ってくれる約束でした。

けれど、この一言で、今日の予定は全て白紙です。

伝言を残してくれた事が、せめてもの救いでしょうか。

そうは言っても、これでもう連続5回目です。

（王子様が、そうホイホイ走り回ってどーゆう事なん！？普通そうゆうんはお役人の仕事やろ！？王子様の仕事とちゃうん！）

そう言いたかったのですが、和葉は声を失っています。

やり場の無いイライラをぶつけるように靴を脱ぎ捨てると、和葉は窮屈なドレスも脱いで、柔らかな素材の、夜着にもなりそうなゆつたりとした部屋着1枚で、庭へと飛び出しました。

部屋に残された乳母が、仕方が無いというように小さく息をついて、ドレスと靴を片付けます。

乳母は長年この城に仕えて来ましたが、ドレスや靴を好まない身分の高い女性など聞いた事ありません。

けれど、和葉は育ちが卑しいようにも見えませんか、以前王子が言っていたように文化の違いなのだろうと納得しているのです。

庭に出た和葉は、そのまま海へと続く石段を降りて行きました。

平次との約束は午後のお茶の時間の後でしたから、もうすぐ夕暮れ時です。

この分では、きっと晚餐までには帰って来ないでしょう。

（確かに、アタシは居候やけど……）

石段に座って、痛む足を海水に浸しながら、和葉が寂しげに俯きま

す。
冷たい海の水が、熱を持った足を心地好く冷やして痛みを薄れさせてくれますが、心の痛みまでは消してくれません。

「何、暗くなってるのよ？」

突然、海から聞きなれた声がしました。

和葉が顔を上げると、そこには姉姫の園子がいました。

（園子姉さま！）

和葉の口がそう動きましたが、声にはなりませんでした。

「本当に、声が出ないんだ……」

そう呟くと、姉姫の園子は、和葉の座る石段近くまで泳ぎ寄りました。

もし人間に見られたらと心配する和葉に、園子は悪戯っぽいウインクを投げました。

「大丈夫、ヤバくなったら逃げるから。それより、王子様との生活はどう？ 仲良くやってんの？」

園子の問いかけに、和葉は小さく笑って頷きました。

その様子に、園子はちよつと考えるような素振りを見せました。

「……楽しくやってるけど、ちよつと不満って所かしら？」

相変わらず、園子は鋭い所を突いてきます。

和葉が、びっくりしたように目を見開きました。

「和葉ちゃんって、本当わかりやすいのよね」

けらけらと笑う園子に、和葉は拗ねたように足で海水をかけました。

「ごめんごめん。でも、幸せなんでしょう？」

笑いを収めた園子が、優しく尋ねます。

和葉は、うつすらと頬を染めて頷きました。

自分が今、幸せなのは、確かなのですから。

「なら、いいわ。仲良くやんなさい」

そう言い残して、園子は海の国へと帰って行きました。

（もうちょお真剣に、文字を習おうかな？）

人間の世界では、言葉の代わりに文字で気持ちを伝える事が出来ません。

その文字を覚えれば、今以上に平次とのコミュニケーションが取れるでしょうし、そうすればもっと近づけるかもしれません。

（何も告げずに終わるなん、アタシらしくないもんな……）

幼い頃に聞いた昔話では、ヒロインは自分の気持ちを告げる事無く王子の前から消えて行きましたが、それでは悔いが残ります。

結果がどうあれ、自分が納得する答えを得なければ、この恋に生命をかけた意味がありません。

どこか思いつめたような瞳で、和葉は夜の色に染まり始めた海を見つめていました。

第7話『東国の姫君』

和葉が平次の城で暮らすようになって、もう一月が経とうとしていました。

文字を学び始めた和葉は、スパルタではありますが教える事の上手な平次の指導を受けて、簡単な読み書きなら難なくこなせるようになっていました。

まだ複雑な気持ちを現す事は出来ませんが、平次の投げ掛ける軽いからかいの言葉に、持ち前の負けん気で一言切り返すくらいの事は、出来るようになってきました。

その反応が気に入ったのか、平次は以前にも増して、和葉を連れ歩くようになりました。

それは、和葉にとっても楽しい事でした。

相変わらず約束を反故にされる事は度々ありますが、その後にもいつも和葉にだけ色々話をしてくれますので、寂しかった事も怒っていた事も忘れてしまえました。

こんな日々が続くなら、まだ自分の想いは告げなくてもいいかもしれない。

覚えたばかりの愛を紡ぐ言葉が拙い文字で書かれた紙を見て、和葉はうつすらと頬を染めました。

もう少し上手に書けるようになったら、一つ一つの文字に心を込めて愛の言葉を綴って、伝えよう。

そう心に決めて、和葉は紙を小さく折り畳むと、化粧箱の隅に隠しました。

それから暫くして、城の中が少し騒がしくなりました。

何があったのか不思議に思っ和葉が尋ねてみると、ここ数日あま

り機嫌の良くなかった平次からは一言『旅行』と答えが返りました。それがただの旅行ではなく、王子の妃候補の姫の1人との顔合わせだと言う事は、乳母から聞かされました。

王子には、王国に相応しい妃を娶って、自分の跡を継ぐ子供をもうける義務があります。

でなければ、王国は後継者を失って、崩壊してしまいます。

この服部王国の現国王夫妻は、次代の王となる平次には比較的自由にさせていますし、役人の真似事を咎めたりもしませんが、何かと理由を見つけては妃候補の姫たちとの顔合わせを避けようとする事に、痺れを切らせてしまったようでした。

和葉にも、それはよくわかりました。

海の王国の次代の女王となる一番上の姉は、和葉の年にはもう結婚していましたが、姉の次に王となるべき子供も既に生まれています。そうやって血を繋げていく事は、王家にとってはとても重要な事なのです。

けれど、いくら理屈がわかっていようと、和葉の受けた衝撃を和らげてはくれません。

平次がその姫との結婚を承諾すれば、その婚礼の日が和葉の命の終わりの時となるのですから。

かといって、今この時に、自分の心を打ち明けるわけにはいきません。

こんな慌しい、しかも平次の機嫌の良くない時では、和葉の心の半分も伝わらないでしょうから。

「行き先は東の『毛利王国』や。船旅やけど、オマエも行くか？」

平次の言葉に、和葉は戸惑いながらも頷きました。

「海が怖いんやったら、留守番しとり」

その言葉には、和葉ははっきりと首を横に振りました。

和葉にとって、海は故郷であって、恐れるものではありません。

ただ、この旅の先にあるものが何なのか、それを知るのが怖いのです。

それでも、ただ待っているのは和葉の性に合いません。

初めて自分の心を綴った紙を隠してある化粧箱を支えに、和葉は東へと向かう船に乗りました。

船は順調に航海を続けます。

どこからか噂を聞いて心配したのでしよう。

姉姫の園子が、そっと船の後を追っていました。

第8話『小さな騎士』

『毛利王国』に到着したのは、3日目の午後の事でした。

国王夫妻との型通りの挨拶の後、案内された部屋で寛いでいると、姫からの使者が銀の盆に白いカードを載せて訪ねてきました。

カードには、この国の紋章が緋色で刻印されていて、確かに姫からのメッセージとわかりました。

姫からのメッセージは、午後のお茶へのお誘いでした。

さっとカードに目を通すと、平次は返事を待っている使者に一言『喜んでお伺いします』と答えました。

平次としては、今夜予定されている歓迎の宴で顔を合わせるまではゆっくりしていたかったのですが、姫の方からお茶のお誘いがあったのに断るわけにはいきません。

使者が部屋を去るのを確認すると、平次は隣の控えの間にいる乳母を呼んで、和葉のドレスを整えるように命じました。

毛利王国には、和葉は服部王国の客人で、今回は見聞を広げるために同行していると事前に説明してありますから、平次と姫のお茶の席に同席しても不自然ではありません。

和葉にはまだ、平次のお妃候補である姫に直接会えるような心の余裕はありませんでしたが、その一方で、平次が姫に会うのならその傍を離れたくないという気持ちもありました。

複雑な心を抱えたまま、和葉は平次の後に従いました。

姫に招待されたのは、中庭の噴水に程近い東屋でした。

東屋の周りには、よく手入れされた花々が競うように咲き乱れていました。が、毛利王国の姫は『蘭』という名に相応しく、今を盛りと咲き誇る花すら霞むほどに美しく可憐な方でした。

蘭の傍らには、まだ幼い少年が控えています。

平次が、驚いたように目をみはりました。

蘭も、平次の姿を認めると、びっくりしたように何度も瞬きをします。

その時、蘭の傍らに控えている少年が一瞬、不機嫌そうに眉を寄せましたが、それは幸いにも誰にも気付かれる事はありませんでした。優雅な仕草で席を勧めた蘭は、お茶の仕度が整うと、傍仕えの侍女たちを下がらせました。

「何や、『毛利王国の姫』って、姉ちゃんやったんか」

侍女たちが下がると、おもむろに平次が口を開きました。

いきなりの碎けた口調に気分を害した様子も無く、蘭がころころと笑いました。

「あたしも『服部王国』の王子があなただとは思わなかったわ」

そう返すと、蘭は傍らの少年に笑顔を向けました。

「ほら、前に話したでしょう？ 海岸で人を助けた話。その時の人が、この方よ」

その言葉で、和葉はあの日平次に呼び掛けていた少女がこの姫だと気付きました。

それなら、先ほどの驚いたような表情も、合点がいきます。

和葉は、誰にも気付かれないようにそっと、ため息を零しました。国を出る時にはあれほど面倒そうにしていた平次が、蘭と楽しげに話しているのです。

その様子から、彼が蘭に好意を持っている事がわかりました。いきなり世界から彩りが失われたような気がして、和葉は2度目のため息をお茶と共に飲み込みました。

「そうだ！コナンくん、彼女にお庭を案内してくれないかな？」

海岸近くの教会での思い出話が一段落すると、蘭が少年に和葉の相手を頼みました。

「え？」

「せっかく来てくれたんだもの、自慢のお庭を見てもらいたいわ。ね？お願い」

『コナン』と呼ばれた少年が問い返しますが、蘭は繰り返して頼みます。

平次も口を添えました。

「ああ言うてくれとるんやし、ありがたく散歩してき」

それは、暗に2人で話したい事があるから外してくれと言っているのだと気付いて、和葉が席を立ちました。

蘭が最初に給仕の侍女まで下がらせたのは、毛利王国の王女として、服部王国の王子である平次と部外者のいない所で話したい事があったからでしょう。

和葉としては、話に加われなくてもずっと平次の傍にいたいと思いましたが、この場で我侭を通す事は出来ません。

コナンも、しぶしぶながらテーブルを離れます。

「じゃあ、あそこの噴水の周りを案内するね」

コナンが、東屋に程近い薔薇に囲まれた噴水を指差しました。

あそこなら、姿は確認出来ますが話し声は届きません。

初めての訪問先で、自国で預かっている客人を訪問先の国の人間、それも子供に託す事に平次が不安と不信を抱かないようにとの配慮

でしょう。

幼い姿に不似合いな思慮深い言動をするコナンに、平次がほんの少し訝しげな視線を投げました。

それに気付いたのか、コナンは殊更に明るく笑って見せました。

「こっちだよ」

コナンが、一人前の騎士がレディにするように和葉の手を取りました。

幼い子供には不似合いなはずのその仕草が、なぜかコナンには馴染んでいます。

「けったいなガキやな」

平次の低い呟きは、誰の耳にも届く事無く消えていきました。

第9話『小さな騎士・2』

噴水の周りの薔薇は今は盛りで、辺りは甘い香りで包まれていました。

「あれが一番香りのいい花。あの花から作られる香料はね、他の国でもすごく人気があるんだって。お姫様の国にもあるんじゃないかな？それから、これが王女様がお生まれになった記念に作られた薔薇。一番綺麗でしょ？」

コナンが、1つ1つ指差しながら和葉に説明してくれます。それに頷きながらも、和葉の心はここにはありませんでした。

「疲れちゃった？少しお休みする？」

顔色の良くない和葉を気遣って、コナンが木陰のベンチへと和葉を誘いました。

相変わらず歩く度に和葉の足は痛みますが、我慢する事にも随分と慣れてきていましたし、疲れるというほど歩いたわけでもありません。

けれど、やはり心の疲れは身体をも疲れさせます。

コナンに勧められるまま、和葉は精緻な彫刻の施されたベンチに腰掛けました。

噴水では、3体の女性像が掲げる壺から尽きることなく水が流れ、涼やかな風を生み出しています。

和葉は、ほっと息をつきました。

「冷たいお茶運んでもらおうか？ミントのお茶なら、気分もすっきりするよ？」

コナンの心遣いに『ありがとう』の気持ちを込めて笑みを返した和葉は、大丈夫だからと首を振って、東屋の方を見やりました。

「何のお話してるんだろうね？」

並んで座ったコナンが、和葉の気持ちを察したかのように呟きました。

東屋では、平次と蘭が真剣な面持ちで何かを話しています。特に色めかしい雰囲気は感じられませんが、この短い時間で急速に親密になったようでした。

その様子に、コナンが心の内で『あのヤロー、本気で蘭を口説きやがったら、コンクリ抱かせて海に沈めてやる！！』などと、実行したら外交問題どころか即戦争、いえ、その前に人としてどうよ、というかコンクリって何？という危険な思考を巡らせていましたが、それは偽りの子供の表情に上手く隠されていましたので、表立っての問題にはならず済みました。

「お姫様も、夜の宴に出るんでしょう？」

コナンの問いに、和葉は小さく頷きました。

今夜は、国賓である平次のための歓迎の宴が催される事になっています。

歓迎と銘打ってはいても、その実『毛利王国の王女』と『服部王国の王子』との実質的な顔合わせの席である事は、招待された誰もが承知していました。

本来、格式ばった堅苦しい事の嫌いな平次ですが、必要な時には王族に相応しい振る舞いをする術も心得ていますので、宴の席ではきつと、出席した人たちの目に似合いの2人と映る事でしよう。

そんな2人の姿を見るのは、和葉にとっては身を切られるように辛い事でしたが、欠席するわけにもいきません。

「王女様、本当に西国にお嫁入りするつもりなのかな……？」

コナンが、どこか不安そうにぽつりと呟きました。

深刻な話は終わったのか、東屋では蘭が優しい笑みを見せています。

「王女様ってね、すごく綺麗で優しいけど、ちょっとおてんばでアクティブな人なんだ。王子様にバレたら、嫌われちゃうんじゃないかな？」

心配しているのか、それとも破談を願っているのか、東屋に目をやったままのコナンが続けます。

（それって、平次の好みど真ん中やん……）

身分的に釣り合いの取れた、その上容姿も性格も申し分ない王女が存在に、和葉は深いため息を零しました。

第10話『宴の夜』

日が沈み燭台に灯りが点されると、広間は昼と見紛うばかりの眩い光で溢れました。

華やかに着飾った貴婦人たちや毛利王国の重鎮たちが揃った宴は王の言葉と共に始まり、慣例に従って毛利王国の王女が国賓である王子にその手を預けました。

2人が中央に進むのを見計らったように、宮廷お抱えの楽師たちが緩やかな舞曲を奏でます。

蘭は言わずもがなですが、普段『ダンスなん、面倒でやっとなんわ』などと言って出来うる限り逃げている平次も、本番に強いタイプなのか、蘭のドレスの裾を踏む事もなく完璧なステップを披露しました。

周囲から、ほうっと感嘆のため息が零れます。

そんな中、国王夫妻の傍らで蘭と平次の様子を見ていたコナンは『俺ならもっと上手く華麗にリード出来るのによ』などと内心毒づいていましたが、子供ではどうにも格好がつかみませんので、こっそり思うだけに留めておきました。

曲が終わり、平次が蘭をエスコートして国王夫妻の元に戻ると、宴は賑やかな社交の場となりました。

会話を楽しむ者、ダンスに興じる者、様々ですが、外国の王族を迎えての宴は、ある意味高度な外交の場でもあります。

国王夫妻や王女の蘭、そして重鎮たちに囲まれてにこやかに談笑している平次を遠くに見ながら、和葉は扇の陰で小さくため息を零しました。

平次が一国の王子だという事はよくわかっていましたが、こんな場面を見せ付けられると、立場の違いを嫌でも感じずにはいられません。

和葉も海の国では王女ですが、今は身寄りもないただの娘にすぎないのです。

何人もの若い騎士や身分の高い貴族の子息たちがダンスに誘いましたが、とてもそんな気分にはなれなくて、和葉はそっと広間を抜け出しました。

（潮の香りがする……）

広間から中庭に出ると、風に乗ってどこからか潮の香りがしてきました。

その香りを追うように中庭を抜けると、柔らかな芝が敷き詰められた小さな庭に出ました。

庭には運河を思わせる水路があり、王族や身分の高い貴族たちが水遊びに使うのだろう豪華なつくりの小船が何艘か浮かんでいました。どうやらその先が海へと続いているようです。

（この先に海があるんや……）

そう思うと、急に寂しさが襲ってきました。

（お父ちゃんや姉さまたち、どうしてるかな？）

初めて恋を知って、その恋を追いかけるために国や親しい人たちを捨ててまで人間になった事を後悔はしていませんが、寂しさはどうしようもありません。

僅かに滲んだ涙を指先でそっと拭いて、和葉は小船が繋がれている栈橋へと降りました。

「和葉ちゃん」

窮屈な靴を脱いで、痛む足を冷たい水で癒していると、すぐ近くから聞き慣れた声が和葉を呼びました。

伏せていた顔を上げると、小船の影に隠れるようにして手を振る園子の姿がありました。

（園子姉さま！）

和葉は思わず周囲を見回しました。

ここは人間の城の中ですから、いつ誰に見つかるかわかりません。

「大丈夫よ。ここって結構深いから、見つかりそうになったら潜ったまま逃げるわ」

そう言って笑うと、園子はすいっと和葉の傍に泳ぎよりました。

「それより、王子様の縁談が決まったって本当？」

心配そうに訪ねる園子に、和葉は曖昧に笑って見せました。

平次と蘭との縁談はまだ決まったわけではありませんが、国同士としても本人同士としても特に不満のある話ではありませんから、遅かれ早かれ話が進められるだろう事は間違いありません。

「そっか……」

ふっと息をついて、園子は尻尾でぱちゃんと水面を叩きました。

「お喋りな海鳥たちが話してるのを聞いてね、ちょっと心配になって顔を見に来ただけ、和葉ちゃんはどうしたいの？」

『どうしたいのか』と訊かれても、和葉には答えられません。

自分が選ぶ事の出来る選択肢など、殆どないのですから。

「海の魔女の志保に聞いたんだけど、薬で人間と同じ足を作る事は出来ても、それだけじゃ本当の人間にはなれないんだってね」

園子の言葉に、和葉は小さく頷きました。

人魚と人間では、基本的な魂のつくりが違います。

人魚は300年という長い命を持っていますが、死んでしまうとその魂も海に溶け込んで消えてしまいます。

その一方で、人間は100年と生きられませんが、かわりに魂は神の元で永遠に生きています。

その大きな違いを埋めて、人魚が人間と同じ魂を得て生きていくためには、自分が恋をした人間に神様の前で永遠を誓ってもらわなくてはいいけません。

もし、自分が恋をした人間が他の誰かと永遠を誓ってしまったら、人間になれないのは勿論の事ですが、人魚に戻る事も出来ませんので、泡となって死ぬしかないのです。

それは、海の魔女の志保から薬を貰った時、彼女に何度も念を押された事ですから、和葉にもよくわかっています。

「……和葉ちゃん、これあげる」

園子が、ずっと水の中に隠していた右手を和葉の方に差し出しました。

その手には、柄に真珠をあしらった、月の光よりも白く輝く短剣が握られています。

「海の魔女の志保に相談したらね、これをくれたの。ただってワケにはいかなかったけどね」

そう言って、園子は自分の髪を一房引っ張りました。いつもは顎のあたりで綺麗に切り揃えられている髪が、水の中で長く広がっています。

「『ベリーショートからでも1日で超ロングヘアに出来る』って薬のモニターさせられたの。まだ半日しか経ってないのに、もうすぐ腰より長くなりそうよ」

ちょっと笑って、園子は改めて和葉の手に短剣を握らせました。

「人魚に戻る方法はね、1つだけあるの」

園子の真剣な眼差しに、和葉は渡された短剣を両手で握り締めました。

「この短剣はね、一番冷たい海の一番深い所で、長い長い時間をかけて育った特別な真珠から作られてて、強い魔力を持ってるんだって。この短剣で王子様の心臓を刺して、その血を足に浴びれば、もう一度人魚として海の中で暮らせるようになるって、志保が言ってたわ。血なら何でもいいワケじゃないのよ？ 命の源である心臓の血が必要なの」

その言葉に、短剣を持った和葉の手が震えました。

人間である平次に恋をした事も、その恋に命をかけた事も、悔いてはいません。

けれど、恋が叶わないのなら、父王や姉姪たちのいる海の国でまた暮らしたいという気持ちがある事も本当です。

もう一度人魚に戻るのなら、新たな代償を払ってもいいとも思っています。

けれど、その代償が『平次の命』しかないのでは、素直に喜ぶ事など出来ません。

「和葉ちゃんに王子様が殺せるとは思わないけど、わたしもアネキたちもパパも、和葉ちゃんには生きてて欲しいの。だから、この短剣をもらってきたわ。使うかどうかは和葉ちゃんに任せるけど、もう一度わたしたちと一緒に暮らすって選択肢もあるんだって、忘れないでね？」

和葉の両手を包み込むように握ると、園子は名残惜しげに何度も振り返りながら、海へと帰って行きました。

第11話『密約』

「こんな所におったんかい」

背後から突然掛けられた声に、和葉はとっさに手に持っていた短剣を袖の中に隠しました。

肘の辺りからふわりと広がった袖には幾重にもレースがあしらわれて、手の甲までを覆っています。

短剣を握ったままの手を隠していても不自然には見えない事に、和葉はひっそりと感謝しました。

「よその国の城、勝手にウロつくなや。コッチは招かれとる身やし、ヘタに怪しまれて痛くも無いハラ探られたらかなわんわ」

平次に促されて、和葉は棧橋から庭へと上がりました。

服部王国と毛利王国は交流こそありますが、同盟を結ぶ程の親密な付き合いがあるわけではありませんから、些細な事でも争いの種になりかねません。

海の王国では国同士の諍いと言う物がありませんでしたので、和葉にはその辺の事はあまりよくわかりませんが、平次の住む城では城内の散策は自由に許されていても、他国ではそれは歓迎されない事なのだとわかりました。

「広間に戻るで」

そう言って歩き出した平次の後を追いながら、和葉はほんの少しだけ俯いて小さく笑みを浮かべました。

自分が広間からいなくなった事に気付いて、平次が自ら探しに来てくれた事が嬉しいのです。

けれど、その嬉しさもほんの僅かな間だけでした。

「お姫さんがオマエに会いたい言うってな。オレも今のうちに言うときたい事あるし、宴の間の方が目立たんやろうと思って探しとったんや」

その言葉に和葉の顔から笑みが消えました。

今夜の宴がどんな意味を持ったものかわかっていながら、ただ雑談がしたいがために蘭が和葉を呼んでいるとは思えません。

服部王国の客人と紹介されていますが、どこの国のどんな身分の娘ともわからない女が、近い将来夫となるかもしれない人の傍近くにいる事は、蘭にとってはあまり快くない事でしょう。

国を継ぐ者としての教育を受けている蘭の事ですから、自分の目で和葉の人となり確かめようとしているのだと思われました。

ほうっと息をついて、和葉は短剣を握った左手に力を込めました。

剥き出しの冷たい刃が腕にあたり、そのひやりとした感触に思わず身体が震えます。

和葉の小さな手に丁度いい大きさの華奢な短剣ではありますが、決して飾り物ではなく、確実に人間の命を奪う事が出来るものなのです。

それは、和葉に、この恋が本当に自分の命と引き換えても悔いの無いものなのか、それとも恋に恋しただけで、本当はそこまでの想いではなく、相手より自分を優先させたいのか、問い掛けていました。

「お姫さんとの話の前に、確認しときたい事がある」

広間に続く中庭に入った所で、平次がふと足を止めました。

「オマエ、秘密は守れるか？」

突然の質問に、和葉は首を傾げました。

蘭との縁談についてなら、和葉は部外者ですから秘密になるような事はないはずです。

「オマエに協力して貰いたい事があって、お姫さんと相談して全部話す事にしたんやけどな、これからお姫さんと話す事は、絶対に秘密にせなならん事なんや。せやから、誰にも、オレの親父やオカンや乳母にも、絶対に話さんと約束出来るか？」

声が出ないんだから話すのは元から無理というツツコミは取り合えず置いといて、和葉はしっかりと頷きました。

内容はどうあれ、平次が和葉を信頼してくれている事は確かなのですから、自分の命がある間は、その気持ちに精一杯応えたいと思ったのです。

和葉が頷いたのを確認して、平次は中庭を横切って、広間に程近いテラスへと向かいました。

テラスでは、蘭とコナンが夜空を見ながら何か話していました。

「待たせたな」

「ううん、あたしこそ無理言っでごめんね」

にっこりと笑った蘭が、平次の後ろにいる和葉に椅子を勧めました。それを見計らっていたように、蘭の傍仕えの侍女が飲み物のグラスをテーブルに並べ、深く礼をして広間へと戻って行きました。

「大丈夫、誰もいないよ」

いつの間に席を立ったのか、コナンが少し乱れた髪を撫で付けながらテラスに戻ってきました。

服に幾つもの木の葉がついている所を見ると、テラスに近い茂みの中まで確認してきたようです。

秘密の話なら部屋の中の方がいいように思いますが、時によっては人の目に触れる場所の方がいい事もあります。

今はまさに、そんな時でした。

「こんな事お願いするのは、本当に心苦しいんだけど……」

そう前置きして、蘭がふと平次に視線を投げました。

「オレは納得しとるからええで？」

その言葉に安心したのか、気持ちを落ち着けるように1つ息をついて、蘭は改めて口を開きました。

「お願いって言うのはね……」

蘭の瞳に、縋るような真剣な光が浮かびました。

毛利王国は隣接する工藤王国と長年の友好関係があり、王妃同士が親しい間柄の上、同時期に子供を、それも王子と王女を授かったので、ゆくゆくは同盟を、場合によっては国を統一しようとの話が出ていました。

当の子供たちは親同士の計画など知る由もありませんでしたが、幸いな事にお互いを憎からず思うようになっていました。

けれど、工藤王国の王子が14になった時、事件が起きました。工藤王国では、王族の習わしとして、王子は14歳の誕生日を迎え

ると社会勉強を兼ねて外国へ遊学する事になっています。

工藤王国の王子は、その習わしに従って海の向こうの南の国へと渡って行ったのですが、それ以来3年間、何の連絡も無く、また工藤王国からも両国の縁談の話は一切聞かれなくなってしまいました。風の噂によると、王子の乗った船は嵐に合い、乗組員共々海に沈んでしまったのではないかという事です。

「1年で戻るからって言うておきながら、もう3年も手紙1つ寄越さないのよ？この時代、王女で17なんて、嫁き遅れ街道まっしぐらじゃない！」

少し興奮気味にそう言った蘭は、大きく息をつくと寂しげに目を伏せました。

「お父さんの言う事はわかるし、王女としての義務だって理解してる。だけど、あと1年……せめて18の誕生日までは、待っていたいの。だから……」

「それまで、この縁談は破談にならん程度に進んどる事にしときたいんや」

口ごもる蘭に代わって、平次が話を引き継ぎました。

「それって、王女様が18歳になるまでに工藤王国の王子様が帰って来なかったら、服部王国にお嫁入りするって事？王女様はそれでいいの？王子様にも失礼じゃない？」

コナンの疑問はもつともでした。

王族の結婚では、世継ぎさえ生まれてしまえばそれで責任は果たしたと、お互いに愛人を持って、公式行事以外では顔も合わせないと言う事もありますが、コナンは、蘭はそんな器用な事の出来る姫で

はないと知っています。

蘭が、コナンに優しい笑みを向けました。

「新一が帰ってきてても帰ってこなくても、18の誕生日がきたら、この縁談は毛利側に非があったと発表して辞退するわ。それが、1年間もこんな茶番に付き合わせるお詫びのつもり」

「そんな詫びなん、いらんのやけどな」

「そうはいかないわ。だって、明日にでもお妃にしたいと思う姫と出会うかもしれないのに、あたしの我儘に付き合ってもらうんだもの」

拳を握り締めるようにして、蘭が力説しました。

その様子に軽く笑った平次が、和葉に向き直りました。

「オマエに頼みたいんは、このお姫さんからオレへの連絡役や。お姫さんがオレに直接連絡取ると、どうしても目立ってまうから、偽りの縁談が本格的に動きかねんやろ？」

「コナンくんにはね、服部君との連絡役をお願いしたいの。毛利と直接関係しない人なら、服部王国の王子とお付き合いがあっても、誰も何も言わないと思うのよ？」

蘭も、コナンに向かって両手を合わせて申し訳なさそうな笑みを見せました。

コナンは嬉しそうに頷いていましたが、和葉は話がよく飲み込めなくて、困惑してしまいました。

辛うじて理解出来たのは、平次も蘭も、この縁談を承諾するつもりがないという事だけです。

「お願い出来ないかな？」

不安そうに瞳を揺らす蘭に、和葉は無意識のうちに頷いていました。

「よかった」

ほっとしたのか、蘭が花がほころぶような笑みを見せました。

「この事は、くれぐれも他言無用やで？」

念を押す平次に、和葉とコナンはもう一度頷きました。

3人が和やかに会話するのを聞きながら、和葉は短剣を持った左手を右手でそっと撫でました。

平次が蘭との縁談を承諾するつもりがないのは、和葉にとって嬉しい事でしたが、国同士の話を当事者の思惑だけで破談にするなどという事が本当に可能なのかわかりませんので、不安は拭えません。

もし計画通りに破談に出来たとしても、王子である平次には、またすぐに別の縁談が持ち上がるでしょう。

いえ、その前に平次自身が、妃にしたいと思う姫を見つけるかもしれません。

それでも、自分の恋にもまだ希望が残されている事に、和葉は泣きたいくらいの幸福を感じました。

翌日の昼過ぎ、服部王国の船は毛利王国を発ちました。

姉姫の園子に貰った短剣は、絹のハンカチに丁寧に包まれて、恋文と共に和葉の化粧箱の隅に隠すようにしまわれています。

この恋が成就するかどうか今はまだわかりませんが、もし叶わなかったとしても短剣の事など思い出さなくらいに悔いの無い恋にしたい。

そう心の中で誓って、和葉は髪を結っていたリボンを解いて、海の王国を離れた時のように遠く深く続く海に投げました。

海の色を映したようなコバルトブルーのリボンは、暫く風と戯れたあと、海の底へと消えて行きました。

人魚の優雅な尾ひれがリボンを追うように波間にひらめいたのに気付いたのは、和葉だけでした。

第2部／第1話『東国からの便り』

毛利王国での姫君との顔合わせから、早くも半年が過ぎようとしていました。

服部と毛利の両国の間で、この縁談がどんな風に扱われているのか和葉は直接知る事は出来ませんが、どうやら蘭や平次が望んだ通りに進んでいるようでした。

それは、度々送られてくる蘭からの手紙でも感じ取れました。

「姫様、毛利王国の姫君からお手紙が届いております」

淡いクリーム色のお仕着せを纏った侍女が、銀の盆を捧げ持つようにして和葉の元へと参りました。

その侍女にありがとうの気持ちを込めた笑みを返して、和葉は盆に載せられた封書を手に取りました。

侍女が一礼して、下がります。

それを見送って、和葉は手紙の封を切りました。

和葉がこの城で暮らす事になった時、平次はまず自分の乳母を世話係として彼女に付けました。

どこか自分たちとは常識のズレた所のある和葉には、人生経験も豊富で、なおかつこの城についてよく知っている人物が一番相応しいと判断したからです。

そして、乳母が選んだ10人の侍女たちが、彼女の監督の元で和葉付きとして仕える事になりました。

『姫』と呼ばれる女性に仕える侍女が10人というのはあまりにも少ないものでしたが、これにはわけがありました。

和葉の身元は相変わらずわからないままでしたが、口がきけない事を除けば大国の姫と言ってもおかしくない風情を持っておりまして、初めてこの城に迎え入れた女性でもありましたので、乳母としては傍仕え以外にも王女なみの陣営を整えたいと平次に進言しましたが、それは和葉本人に謝絶されてしまったため、妥協に妥協を重ねて10人という少数の、けれど乳母のお眼鏡に叶った優秀な侍女を揃えて傍付きとする事になったのです。

和葉は大海を統べる王の娘として、海の王国ではそれこそ大勢の者に傳かれておりましたからそのような扱いをされる事に戸惑いなどありませんでしたが、そのために平次の傍近くにいらなくなるだろう事の方が不安だったので、乳母の心遣いはいりたいと思いましたが、断るしかなかったのです。

実のところ、和葉は多くの深窓の姫君にありがちな奢った所などなく、ドレスやアクセサリーを過剰に欲しがったり贅沢な遊びに夢中になるような事ありませんし、何が気に入ったのか身の回りのあれこれに関しても大抵の事は楽しそうに自分でしようとしていますので、今の人数で充分に仕事をこなす事が出来ています。

唯一と言える我侭は、それがどこであろうと平次に着いて行きたがる事くらいでしょうか。

乳母としてはあまり感心出来る事ではありませんでしたが、平次が拒まないどころか連れて歩くのを楽しんでいるようなので、今は澁々ながらも黙認しています。

「毛利の姫君はお変わりありませんか？」

丁度、午後のお茶の仕度をしていた乳母が、手紙を読み終えた和葉に尋ねました。

毛利王国から帰ってから、蘭と和葉は頻繁に手紙のやりとりをしています。

今回の両国の縁談が偽りのものである事はまだ乳母にさえ話していませんが、平次が生まれた時から傍近くで仕えている聡い彼女は、その様子から何となく気付いているようでした。

「たまにはお会いになりたいでしょう？あちらの姫君に来ていただくのは無理にしても、姫様が毛利王国を訪ねる事はお出来になると思いますよ？」

乳母の言葉に、和葉は少し考えるように手元の手紙を見ました。

万が一の事を考えると手紙では深い話はなかなか出来ませんので、両国とは直接関係のない自分が会いに行くというのは、とてもいい案に思えます。

けれど、まずは今日の手紙での蘭からの依頼を平次に伝える事が先と、席を立ちました。

内容的にはそう急がなくてもいいのですが、返事は早いに越したことはありません。

今日は朝からの雨で、平次も外出する事無く居間で本に埋もれています。

新しく書庫に入った本があったとかで、お茶にすら気付いていないだろう平次の前に立つと、和葉は彼と本との間にすいっと手紙を差し出しました。

本に夢中になっている平次を振り向かせるには少々強引な手段を使わなければならない事を、すっかり学習しているのです。

「何や、いきなり」

予想通り不機嫌そうに眉を寄せる平次に、和葉は手紙の中の一文を指差しました。

手紙には『コナンが服部王国に遊びに行きたがっているが許可してもらえるだろうか』という内容が、蘭らしい丁寧な文章で書かれています。

「あのボウズか。承知したって返事しといてくれ。国賓やなくて、オレ個人の客として迎えるてな」

その返事に、和葉は自分も毛利王国にもう一度行きたいと伝えましたが、コナンはただ遊びに来るわけではないはずなので、彼が帰ってから改めて申し込もうという事になりました。

和葉がしたためた手紙は使者に託され、その日のうちに毛利王国へと向かいました。

そして8日後、2人の従者と共に、コナンが服部王国へと到着しました。

第2話『訪問者』

毛利王国からの小さな訪問者は、服部王国の王子である平次個人の客人であると前もって通達してありましたので、出迎えた侍従は直接、平次の住む棟へと彼らを案内しました。

「よう来られた。まずは旅装を解いてゆっくりされるとええ」

広間でコナン一行を迎えた平次は、案内してきた侍従に従者たちの滞在中のもてなしを命じました。

今回、コナンに与えられた従者は、身の回りの世話をする侍女たちと違って旅の間の護衛という性格の強いものですので、敵国に來たのならいざ知らず縁談も持ち上がっている友好国にあつては、常に付き従っている必要はありません。

コナンの滞在は特に期限を定めたものではありませんでしたので、コナンと従者との連絡がきちんと取れるように手配する事と、彼らにも息抜きの出来る場を与える事は、もてなす側に求められる配慮です。

一方で、従者自身が毛利王国から、もしくはその中の一部勢力からのスパイだという事も考えられますが、大国を構えている以上、服部王国としても備えは充分にしていますし、侍従もその事については心得ていますので、特に問題ではありません。

一礼した従者たちは、侍従の案内で広間を辞去しました。

「ご滞在中は、私がお世話申し上げます」

コナンの前に進み出たのは、平次の乳母でした。

乳母には和葉付きの侍女たちを指揮して監督するという重要な仕事がありますが、他の客人ならともかく、偽りの縁談の一方の当事者である蘭の代理として来たのだろうコナンの世話を任せるのに彼女以上の人材はありません。

「こちらのお部屋をご用意致しました」

コナンが案内されたのは、平次の居室から程近い部屋でした。

客間というよりは平次の私室の1つを客間として整えたという雰囲気でしたが、それは城の者にコナンはそこまで親しい友人だと示すためと使用人を介さずに会うための、両方の意味を持ったものでした。

「殿下から、お茶をご一緒にと言付かっておりますが……」

コナンが気持ち良く過ごせるようにと細々と気を配っている乳母が、彼の着替えを待って平次からの伝言を伝えました。

それに『ありがたくお受けします』と応えたコナンは、乳母に案内されて居間へと向かいました。

居間では、和葉付きの侍女がお茶の仕度を整えたところでした。

コナンと入れ替わりに侍女が下がり、乳母もまたその場を離れました。

「ソッチの様子はどうや？」

「王女様は元気にしてるよ。うまくいってるって」

「そんなら何よりやな」

主語のない会話ですが、ここにいる3人にはそれでちゃんと伝わりました。

「そんで『工藤』の方はどうなんや？」

「うん……」

言葉を濁すコナンの様子に、未だ工藤王国からは何も言ってきていないのだとわかりました。

和葉が、ため息を隠すようにお茶に口をつけました。

蘭からの手紙には、いつも必ず工藤王国の王子の話題がありました。それはさりげないものでしたが、そこから蘭の本当の気持ちを汲むには充分なものでしたので、和葉は自分の事のように心配しているのです。

「あのね、こんな事訊いていいのかわかんないんだけど……」

ほんの少しの沈黙の後、コナンが申し訳なさそうに話を変えました。

「お姫様のお国はどこなの？」

第3話『誰も知らない国』

コナンの問いに、和葉は困ったような笑みを浮かべて俯きました。この城の人間は、主人である平次の意思を汲んで表立って和葉の事を詮索しようとはしませんが、どこの国のどんな身分の人間かというのは、この時代にあってはとても重要な事です。

コナンは、毛利王国で和葉に出会って以来、彼女についての情報を集めようとしていました。

『服部王国の客人』とだけ紹介された和葉に対して、コナンは良い印象を持っていますし自分の判断に狂いはないと信じていますが、大切な蘭に何かあっては大変なので不安要素は出来るだけ排除したいのです。

けれど、いくら調べても、国すらわかりませんでした。

今回の訪問は蘭と平次の間の情報の橋渡しが重要な目的でしたが、服部王国の客人、それも王子の平次が外遊にまで同行させる姫だというのに和葉について何一つわからない事に苛立ったコナンが、自分の目と耳で直接調べたいと思ったのも大きな理由でした。

「お姫様とっても色白だから南の国の人じゃないかっていうのはわかるんだけど、だからって北の方の人にも見えないし……。ボクの知らないお国なら、いろいろお話して欲しいな」

コナンの問いは子供らしい好奇心に満ちたものに見えたが、その瞳には『服部王国の客人の姫って言うてるが、正体もわかんねえヤツはたとえ女だろうと俺の蘭には近づかせねえ』という気持ちが見え隠れしています。

それはある意味とても失礼な態度と言えますが、コナンはまだ幼い

子供ですから、もしそれに気付いた人がいても大抵は『姫を護る騎士のつもりなんだな』と微笑ましく思ってもらえるものでした。

けれど、平次は違いました。

以前、毛利王国で会った時から、コナンの子供らしからぬ態度や気の配り方に引っ掛かるものを感じていた彼には、今のコナンはただ大人ぶりただけのませた子供には見えなかったのです。

「和葉の事、そんなに気になるんか？」

「うん。だって、せっかくお友達になったんだもん、もっと色々知りたいよ」

「毛利の王女が、調べて来い言うたんか？」

「ううん、王女様はそんな事言わないよ。ボクが教えてあげようと思っ」

平次のストレートな問いに、コナンは子供らしい無邪気さで答えます。

「和葉は、あんまり自分の事しゃべりたがらんしなあ……」

そこで言葉を切って、平次はコナンに探るような視線を向けました。

「和葉はな、海から来たんや」

「海？」

「せや。この城から海に続く階段があつてな、そこで出会った。名前以外は、オレも知らん」

思いもよらない話に、コナンが思わず和葉へと向き直りました。

大国の王子が、身元もわからない女をよく調べもせずに傍に置いているなどと俄かには信じられませんが、どこか所在なさに俯いて

いる和葉の様子に、それが偽りではない事が窺われます。

「もしかして、記憶喪失とか？」

海で出会ったという事なら、何らかの事故で記憶を失っているという可能性もあります。

けれど、その問いに和葉は小さく首を振りました。

「お家の人が心配してるんじゃない？連絡しなくていいの？お国がわかれば、王子様を送ってくれるよ？」

コナンの言葉に、和葉は大きな窓の向こう、遠く広がる海を見やりました。

和葉の国はあの海の底にあります。陸に住む人間たちはその存在を知りません。

海の底に人魚の住む国がある事など、想像すらしないでしよう。

寂しげな和葉の様子に、コナンはそれ以上尋ねるのをやめました。

（やっぱり、けったいなガキや）

子供らしい大きな瞳に幼い子供には不似合いな思慮深い色を浮かべて考え込むコナンに、平次はやはり前と同じ感想を持ちました。

（少し、注意しといった方がええな）

特に悪いものを感じたわけではありませんが、平次は自分を納得させるためにもコナンの様子を見ていく事にしました。

第4話『誰も知らない国・2』

コナンがそれに気付いたのは、服部王国に来て2日目の晩の事でした。

晩餐も終わり就寝までの時間を持て余したコナンが、昼間平次が居間の小机に何冊もの本を積み上げていたのを思い出して、そこから何か借りようかと部屋を出て何気なく庭へと目をやった時、それに気付きました。

必要最小限の灯りしかない庭に、ぼんやりと浮かぶ白い影。それが夜着を纏った女性だという事は、すぐにわかりました。

（誰だ？）

城内は勿論、庭にも要所要所に不寝番の警護の者がいますからその人影に気付いていないわけはありませんが、咎めようとする気配はありませんので、城内の者だという事はわかります。

けれど、侍女が、自分たちの私室ならともかく、城の庭をお仕着せ以外の服で出歩くなどという事は絶対にありませんし、そんな真似をしたなら叱責を受けますから、彼女たちではありえません。

身分の高い姫ならなおさら、寝室以外では決してそのような姿を見せてはいけないと教えられているはずです。

では一体誰が？

コナンがそつと様子を窺っていると、燭台を手にもその人影に近づく姿がありました。

「海は堪能されましたか、姫様？」

微かに聞こえてきたのは、コナンの世話をしてくれている乳母の声でした。

彼女の持つ燭台の灯りで、夜着を纏った女性が和葉だとわかりました。

「お手がこんなに冷えて……。海でお遊びになるのをお止めはしません、殿下もご心配なさってますし、せめて私をお連れ下さいませ」

半ば諦めぎみの乳母の様子に、今夜のような事はよくあるのだと、そしてそれは平次も承知しているのだとわかりました。

ただわからないのは、何故和葉が、夜の庭や海など深窓の姫君は勿論、普通の女性でも怖がる所へ行くのかという事です。

平次が承知しているのですからコナンのような部外者が口を挟むべき事ではありませんが、どうしてもそれが気になって、次の晩にそっと後をつけてみる事にしました。

平次が暮らすこの棟では、主人があまり賭け事やパーティーといった夜遊びに興味がないためか、晚餐が終わるとゆったりとした雰囲気になります。

コナンは世話をしてくれている乳母に心配をかけないようにと『書庫に行ってくる』と伝えて、庭から海へと続く階段が良く見える場所へと向かいました。

外はすっかり日が落ちていましたが、通るとわかっている人影を探すのには不自由はありません。

さほど待つ事も無く、夜着を纏った和葉が庭から階段へと向かうのが見えました。

コナンは、なるべく和葉に気付かれないようにそうつと、その後を追いました。

幅広の階段には、城側の高い壁の所々に蝋燭を置くための低い小さな窪みがあつて、気持ちばかりの小さな灯りが足元を照らしています。

もう一方の壁は大人の腰よりも低く、遠くが見渡せるようになっていました。

（昼間見たら、綺麗だろうな）

日の光の下でなら海は美しく、ここからの景色は人々の目を楽しませるでしょうが、今はただ暗く恐ろしくさえあります。

けれど、和葉はそれを気にする事なく、階段を下りて行きます。どれくらい下りたでしょうか。

不意に視界を遮るものがなくなり、一面の海原が広がりました。空と同化したかのような漆黒の海は、けれど打ち寄せ碎ける波が満月の銀色の光を弾いてきらきらと輝いています。

階段は海の中まで続いているようで、和葉はそのまま下りていきます。

波が、和葉の爪先を、次いで足首を、そして膝までにも絡みつきました。

たとえ慣れていても、夜の海はそれだけでも危険です。

このままでは事故になりかねないとコナンが声を掛けようとした時、和葉の傍らでぱちゃんと波が散りました。

慌てて、コナンは壁の影に張り付きます。

そつと様子を窺うと、階段に腰掛けたのか胸元近くまでを波に預けた和葉が、波間から現れた人影と何かを話していました。

いえ、和葉は口がきけませんから、話を聞いて頷いたり首を振ったりしていただけでしたが。

満月が2人の顔を白く浮かび上がらせます。

顔立ちは似ていませんが、楽しい笑顔から姉妹のような親しさが感じ取れました。

彼女たちの会話は、ほんの短いものでした。

肩も露に波間から顔を覗かせていた女性が、和葉に小さく手を振って身体を翻しました。

それに連れて、銀色の波が立ちます。

最後に光の雫を散らしたのは、優雅な魚の尾びれでした。

（まさか……！？）

思わず叫びそうになって、コナンは慌てて口を押えました。

波に揺らめくレースのような尾びれ。

自分の記憶に刻み付けられた光景が突然蘇ります。

あの時、自分の命を救い、その代償として年齢を望んだ少女。

自らを『海の魔女』と告げたあの少女も、優雅にひらめく尾びれを持っていました。

（まさか……和葉姫は本当に『海』から、あの尾びれを持つ女の国から来たのか？）

突拍子もない発想でしたが、それなら納得のいく事が多々あります。

夜の海を怖がらない事もその1つですが、それ以外にも幾つも気になる事がありました。

城の中での限られていましたが、和葉は豪華なドレスや華奢な靴を鬱陶しがったり、肩や足を見せる事に抵抗がなかったりと、高貴な

身分の姫君とは思えない所があります。

その一方で、どんな大国の姫君と言っても過言ではないような気品も持っています。

平次はコナンに、それらは習慣の違いだろうと説明しましたが、和葉が陸の王国の姫ではなく海に住む姫だとしたら、その違いは納得出来ました。

（服部は、知ってるのか？）

一瞬、すぐにでもこの事を知らせるべきかと思いましたが、わずか3日しか滞在していないコナンですら気付いた事を、平次が気付かなかったとは思えません。

気付いているのに、何も問い質す事なく和葉を受け入れているのだと思い至りました。

和葉付きの侍女や乳母からは、和葉はどこか遠くの国の姫という認識しか感じ取れませんでしたから、恐らくは、城の者たちにはこの階段に近づかないようにとも命じているのでしょう。

それだけ、平次は和葉の事を気に入っているのだとわかりました。

（けど……）

コナンはずっと、尾びれを持つ『海の魔女』を探していました。

もし和葉が海に住む姫ではなかったとしても、きっと何か手がかりを知っているでしょう。

すぐにでも聞き出したいと思いましたが、どう切り出したらいいいかがわかりません。

和葉は、意地っ張りですがとても素直な気質を持っていますので、平次に気付かれないように話だけを訊くのは難しいと思われます。

（でもな……）

階段の影から自分を見下ろす人間がいる事に気付かないまま、コナ
ンは波と戯れている和葉の後姿を見つめていました。

第5話『誰も知らない国・3』

あの夜から、さらに3日ほどたちました。

コナンは、昼間は平次の案内で城下を見て回ったり、人気のない森へ遠乗りに出掛けたりして過ごしていましたが、夜になると書庫へ行くフリをしながら和葉の様子をそっと窺っていました。

和葉はその時々で階段に腰掛けてただ波に足を預けているだけだったり、まるで泳ぎ出そうとするかのように深くまで足を踏み入れたりしていました。尾びれを持つ女性はその夜以来、現れませんでした。

もしかして、あの夜の事は自分の願望が見せた錯覚だったのかとも思いましたが、やっと見つかった手がかりを諦める事など出来るわけはありません。

工藤王国の王子として蘭を迎えに行くためには、尾びれを持つ『海の魔女』に会わなくてはならないのです。

平次が今まで護り続けてきた秘密を無理やり日の下に引き出すような真似はしたくありませんでしたが、焦りを伴った限られた時間の中では良い案が浮かぶはずもなく、コナンは思い切って直接和葉に尋ねてみる事にしました。

その日も、和葉は海へと向かいました。

満月を幾日か過ぎた月は少しだけその姿を隠し始めていましたが、まだ充分な明るさをもって碎ける波を美しく照らしています。

「くんばんは」

階段に腰掛けて足首までを海に浸している和葉に、コナンはそっと

声を掛けました。

熱を持った痛む足を冷たい海水で癒していた和葉が、弾かれたように振り返ります。

和葉がこの城に来てから、昼間とはかく日が落ちてから人が訪れる事などなかったので、コナンが現れた事にひどく驚いたのです。そして同時に、今日は姉の園子が来る日ではなかった事に、和葉はそっと安堵の息をつきました。

「お姫様はお散歩？夜なのにどこに行くのかなと思って、ついて来ちゃった」

そう言って、コナンは和葉の傍らに腰を下ろしました。

「夜の海って、真っ暗だね。女の人ってこういう所は嫌いみたいだけど、お姫様は怖くないの？」

コナンの子供らしい問いに、和葉は大丈夫というように笑みを返しました。

和葉にとって海は故郷ですから、危険を感じる事はあっても怖いと思う事はありません。

それは、陸の人間が普段自分たちが生活しているこの世界で感じているものと同じものです。

「海って、広いね。この海の中に、お魚みたいなしっぽを持った綺麗な女の人たちがいるって言ったら、お姫様は信じる？」

コナンのその問いに、和葉の顔から笑みが消えました。

真珠のような白い肌からも血の気が引いて、月の光と相まってまるで青いベールを纏ったかのように見えました。

その様子に気付きながらも、コナンはあえて気付かないフリをして言葉を続けます。

「ボクね、本当は工藤王国の王子様が今どこにいるか知ってるんだ」
我ながら卑怯な手段だとは思いましたが、コナンはいつも蘭の事を心配している和葉の情に縋りました。

「王子様がお国に戻るためには、お魚のしっぽを持った『海の魔女』に会わないといけないんだって。でも、『海の魔女』がどこにいるかわからないから、もしかしたらもう帰れないかもしれないって思っ
て、毛利王国の王女様にもお手紙出さない事にしたって言ってた。それでも、王女様はずっと工藤王国の王子様の事待ってるでしょ？だからボクも一生懸命『海の魔女』を探してるんだ。だけど、全然わからない。お姫様は遠いお国の人だし、もし何か知ってる事があったら教えてほしいんだ」

真剣な眼差しで訴えるコナンからは、本当に蘭を心配している様子が和葉にもよく伝わってきました。
和葉が戸惑ったように顔を伏せます。

和葉も、蘭のためなら何でも協力したいと思いますが、『海の魔女』を知っていると云ってしまえば、それは和葉自身が海に住む人魚だと告白するようなものなのです。

陸の人間は、海に人魚の住む王国があるなどとは知りません。
人魚が陸の人間とかかわりを持った事は過去何度かありましたが、その事は陸の人間の間では昔語りのような御伽噺として幾つか伝わっているだけです。

そんな中、もし和葉がその御伽噺にある人魚だと知られてしまった

らどんな事になるか、想像するのはそう難しくありません。

陸の人間たちにとって、人魚は異質なものです。

異質なものに触れた時、大抵の人々は好奇の視線を投げ、些細な不満すらも異質なものに責任を転嫁し、悪者として排除していきます。受け入れられるのは、本当に稀な事なのです。

コナンもその事はよく承知していますので、それ以上は口にしませんでした。

本音を言えば、心の片隅には和葉を追い詰めてでも聞き出したいという気持ちがありました。それはあまりにも自分勝手に我侭な事だとわかっているのです。

「知らないならいいんだ。変な事訊いてごめんなさい」

顔を伏せたまま、ただ波に足を洗わせている和葉に頭を下げると、コナンは傍にはもう誰もいないと知らせるように、わざと子供のような足音を立てて階段を上りました。

その足音が少しずつ遠くなり、波の音に消されていくのをぼんやりと感じながら、和葉は尾びれを失った自分の爪先をじっと見つめました。

蘭のためにコナンに協力したい気持ちがあるのは嘘ではありません。けれど、両親も姉たちも故郷も全てを捨ててこの恋に生命を掛けたのに、想いを告げる事も出来ないまま自分が人魚だと平次に知られて拒絶されるのは、あまりに辛すぎます。

（ゴメンな、蘭ちゃん……）

東の国の友人に、和葉は胸の中で深く詫びました。

(すまねえな、蘭)

階段を上りながら、コナンもまた胸の内で詫びの言葉を紡ぎました。

『海の魔女』の手がかりはすぐそこにあります。

けれど、それは容易く手に入るものではありません。

いえ、無理強いしたなら手に入るのですが、その結果和葉を嘆かせる事になったなら、きっと蘭も悲しみます。

それはコナンも望みません。

(一体、どうしたらいいんだよ?)

考えに沈みこんだまま庭へと戻ったコナンに、不意に低い声が掛けられました。

「おい『工藤』」

「ん？」

「『工藤』」

「うるせえ！今考え事を……」

そこまで言って、コナンははっとしたように振り返りました。

振り返った先には、階段脇の石壁に凭れて腕を組んで立つ平次の姿がありました。

「オマエが『工藤』やったんか」

「……服部」

驚きで、コナンはいつものように子供らしく『王子様』と呼ぶ事すら忘れてしまいました。

平次は、どこか冷たさすら感じられるほどの真剣な眼差しで、コナンを見下ろしています。

その瞳に誤魔化しはきかない事を感じ取って、コナンは咄嗟に被ろうとした子供の仮面を捨て去りました。

「いつから気付いてた？」

「確信したんは今夜やけどな、毛利王国で会った時から気にはなってた」

「……完璧にバケてたつもりなんだけどな」

コナンが大きなため息をつきました。

工藤王国の王子である新一が子供の姿でコナンと名乗って毛利王国に滞在しているのは、両親以外には誰一人知りませんでしたあの一度も疑われた事はなかったと言うのに、わずか数日しか過ごしていない服部王国で気付かれるとは思ってもいませんでした。

「で、俺をどうするつもりだ？」

コナンが新一だという事実とは、使い方次第で服部王国が工藤王国に對して持った最大の切り札になります。

自分の不注意で自国の不利益になる情報を与えてしまった事に、コナンはぎりっと唇を噛み締めました。

「別に、どうしようとも思わん。今のままが都合がええなら、それに合わせたるわ。けどな……」

その様子に、何も心配はいらないとひらひらと手を振った平次が、コナンに視線を合わせるように屈みこみました。
強い光を秘めた瞳が、コナンの瞳を捉えます。

「余計なコトはすんなや？この城で、オレの目と耳が届かん所はないで？」

『余計な事はするな』

それは間違いなく、ここ数日のコナンの行動に対する警告でした。

「……ああ、わかった」

いつそのこと全てを話して、和葉から情報を引き出す協力を依頼したい衝動に駆られました。コナンはそれを押えて頷きました。

第6話『囚われの人魚』

平次がコナンの本当の身分を知ってから、『合わせてやる』という言葉通りに彼の態度も城での待遇も何も変わりませんでした。その上、2人きりになるとコナンを工藤王国の王子である新一として扱ってくれるようになりました。

コナンにとって、これはとても有難い事でした。

新一に戻る手段がまだわからない以上、今しばらくはコナンでいる必要がありますので自分の身分を周りに知られるわけにはいきませんが、それが心の大きな負担となっているのも事実ですから、偽る事なく話せる相手を得られたのは本当に嬉しい事でした。

とはいえ、和葉の事もありましたので、自分が何故こんな姿になったのかは話せずにいましたが。

騒ぎが起きたのは、コナンが服部王国に滞在して10日目の早朝でした。

ばたばたと慌しく動く人の気配と音に目を覚ましたコナンは、ただならない雰囲気以身支度もそこそこに部屋を出ました。

「騒がしく致しまして、申し訳ありません」

与えられた部屋の前で様子を窺っているコナンに気付いて、乳母が深々と頭を下げました。

太陽はまだ水平線上にあり、下働きの者以外は本来ならまだ休んでいる頃ですから、平次の乳母でありコナンや和葉の世話を任せられるほどの立場の彼女が起きている時間ではありません。

その彼女が、お仕着せはきっちりと着こなしているものの、髪を結う時間を惜しんだのか簡単なお下げにしたまま、慌てる侍女たちを

宥めながら指図をしています。

これは容易ならざる事態が起きている証拠でした。

「何があったの？」

「何でも、漁師が人魚を捕まえたとか申しまして……」

乳母の言葉に、コナンの顔から子供の表情が消えました。

「王子様はどちらに？」

「地下の水門に……」

「案内して！」

「いえ、それは……」

「大変な事になるかもしれないんだ！早く！」

子供を、それも他国からの客人をそのような場所に案内するのは躊躇われましたが、コナンの切羽詰った必死の様子と王族のような命じなれた声に、乳母は思わず頷いていました。

「こちらへ……」

乳母の先導で、コナンは地下の水門へと向かいました。

服部王国のように海に面して構えられた城には、地下に水門があるのはよくある事で、有事の際には万が一のための脱出口として、そして普段は城に魚や貝を納める漁師たちの船着場として使用されています。

その水門に、近衛兵を従えた平次と本宮から参じた侍従の姿がありました。

非常時でなければ決して姿を見せるはずのない王子の臨席に、門番

の兵士と料理番の下働きの少年が直立不動の状態です。
コナンは、案内してくれた乳母に礼を言って、平次の傍に駆け寄りました。

「何があつたんだ？」

コナンを押し止めようとした近衛兵を片手を上げて制した平次に、コナンが声を潜めて訊ねました。

「これから話聞くトコや」

それに低く返した平次が、門番の兵士に挟まれるようにして膝をついている漁師たちに向き直りました。

「もう一度、話してくれ」

「へえ……」

平次は、王族にしては珍しく城下の者たちとも親しく交流を持っています。が、それでも漁師たちにとっては王子は雲の上の存在です。その王子を前に口ごもる漁師たちに、平次は『咎めるワケやあらへんから、心配すんな』と、話を促しました。
やがて、おずおずと一番年嵩な漁師が進み出ました。

「あの……ワシらいつもお城に魚届けとるモンやねんけど……」

漁師の話はこうでした。

そろそろ秋も深くなったので脂の乗った大物を狙おうと、城の沖合に昨日のうちに幾つか網を仕掛けておいた。

今朝、日が昇る前に仲間たちと船を出して仕掛けを上げてみたら、

狙っていた魚は一匹も掛かっていなかったが、尻尾のある人間が網にかかってぐったりしていた。

これは大変だと、網に絡めたまま慌てて城の門番に届けに来た。もしかしたら、これは何か災いの前触れかもしれないから怖い。

訥々と話す漁師の言葉に嘘は感じられません。

黙って話を聞き終えた平次は、網を掛けた時間や場所を改めて問い、他にこの事を知っている者がいない事を確認すると、漁師たちに労いの言葉を掛けました。

「ご苦労やったな。網が1つダメになったんやろ？その代金は次に魚持って来た時に支払うよう、料理番には言うておく」

漁師にとって網は大切な仕事道具ですし、良い網を作るためには良い材料を調達する必要がありますので結構なお金が掛かりますから、平次の言葉に漁師たちは口々に感謝を述べました。

「ただし、この事は他言無用や。絶対に誰にも話すな。何かわかればオレから民には伝えるから、家族にも言うな。守れなかった時には、それなりの罰を下す。ええな？」

自国の王子の命令に、漁師たちは小さくなって絶対に話さないと誓いました。

それを確認して、平次は漁師たちを開放するよう門番に命じました。漁師たちが各々の船に乗り込み水門を出るのを待って、門番が上げていた格子を下ろしました。

「オマエらも、この事については他言無用や。城内の者にも徹底させろ。ええな？」

平次は改めて命じると、水門脇に集まっていた門番以外の使用人たちを解散させました。

残ったのは、平次とコナンと侍従、そして2人の門番と5人の近衛兵だけです。

「人魚はどこにおるんや？」

平次の問いに、門番の1人が水路の端を指差しました。

「陸に上げたら死んでまうかもしれませんから、網に掛かったままロープの端っこを船を着ける杭に繋いどります」

門番の指差す先には、両腕と尻尾を網に絡め取られた人魚が、ぐつたりと漂っていました。

恐らくは逃れようともがいたのでしょう、白い肌には幾筋もの疵がありました。

「あれは……っ」

叫びそうになって、コナンはぐっと言葉を飲み込みました。

波にゆらゆらと髪を揺らしているのは、あの夜和葉と会っていた人魚です。

「知っとるんか？」

「いや……」

訝しむような平次の問いに、コナンは言葉を濁しました。

暫く待ちましたが、人魚は目を覚ます様子がありません。

ただ待っているよりは書物をあたるなど出来る事をした方がいいと、

平次は門番に様子見を命じると、侍従や近衛兵を促して水門を後にしました。

第7話『囚われの人魚・2』

地下を出ると、平次はその足で書庫へと向かいました。

いつもの朝食の時間にはまだ随分と間がありましたので、コナンは平次が人魚について調べを進めておこうとしているのだと思って、その後を追いました。

平次が一緒ならば、普段は決して見る事の出来ない資料や文書が見られるかもしれません。

工藤王国にも毛利王国にも『海の魔女』の手掛かりになるものはありませんでしたので、もしかしたらと僅かな望みを掛けたのです。けれど、人払いを命じて書庫を締め切った平次は、中央の大きな机に適当に数冊の本を積み、あたかも調べているように何冊かを開くと、そのまま手を付ける事なくソファに身体を沈めました。

換気と明り取りのために作られた高窓からは朝の光が差し込み、書庫を柔らかく照らしています。

コナンが、焦れたように書架に向かいました。

「何のんびりしてんだよ。資料探すんだろ？」

「資料？」

書架に表示された分類記号に忙しなく視線を走らせているコナンを他所に、平次は動こうとはしませんでした。

「人魚の資料だよ！それ調べるためにここに来たんだろ？」

「そんなモンないわ」

「……へ？」

苛立ったように振り向いたコナンが、一瞬呆けたように固まりまし

た。

「人魚についてはな、オレも書庫を引っくり返す勢いで調べたんやけど、御伽噺が幾つかあっただけで、何もわからなかったわ。せやから、今更調べるだけ時間の無駄や」

「……じゃあ、さっき水門で『書物にあたる』って言ってたのはウソかよ」

「『調べる』に関してはそうやな。せやけど、ああでも言わんと、あの場が収まらんやろ？」

平次の応えに、コナンは非難しようとした言葉をぐっと飲み込みました。

よくわからないものに対する警戒は、憶測を伴って容易に恐怖へと変換しますので、いくら緘口令を敷いたところで、人は誰かに話す事でその恐怖から逃れようとしています。

けれど、信頼出来る人物から調査し発表すると言われれば、それを抑える事も可能です。

そして、平次は自国の民からその信頼を得られる王子でした。

大きく息をついて気持ちを落ち着けたコナンが、平次の隣の椅子を動かして彼と向き合うように腰を落ち着けました。

書庫の机は広く、話し合いには向かないのです。

「いつから、人魚の事調べてたんだ？」

「結構前や。ちょっと興味があつてな」

「……和葉姫が関係してるからか？」

「何でそこで和葉の名前が出てくんのや？」

コナンの問いに、平次は僅かに眉を顰めました。

それに構わず、コナンが問いを続けます。

「ここに来て3日目の晩に、俺は和葉姫が海に続くあの階段で人魚と会ってるのを見た。さっき地下の水門で見たあの人魚とだ。オメーも、それを知ってたんだろ？知ってるから、調べた。和葉姫が人魚かもしれないと思って。違うか？」

「人魚は魚の尻尾を持つとって、海で暮らしとるモンやろ？御伽噺にもそう書いてあったわ。けどな、和葉はちゃんと足があるし、この城で暮らしとる。どこをどう見たら、和葉が人魚に見えるんや？」
「じゃあ、何で俺を『工藤王国の王子』と認めた？本来オメーと同じ年のハズの俺が、何でこんなガキの姿をしてる？『ガキに戻った人間』をすんなりと受け入れたオメーが、『足を持った人魚』の可能性を否定するハズがねえだろ？」

「工藤」

畳み掛けるように問いを発するコナンを、平次が低く抑えた声で静止しました。

その強い調子に、コナンが口を閉ざします。

「工藤、オマエは何で、そんなに人魚に拘っとんのや？確かに人魚は珍しい生きモンやけどな、それはただオレらの知識にない言うだけの事やろ？」

「それは……」

コナンが口籠ります。

「まあ、民が不安がるやろから、あの人魚には悪いけど2〜3日引き止めてから、適当な理由つけて海に帰すわ」

「ちょっと待ってくれ！」

「何や？まさかオマエも『悪い前兆』やなんて根拠のない事言い出

すつもりか？」

「いや、そうじゃねえけど……」

不機嫌そうに片目を眇める平次に、コナンは言葉を濁しました。

この城内にいる限り、平次に隠れてあの人魚に会う事は不可能ですから、あの人魚から『海の魔女』の事を訊くためには、コナンは全てを平次に話さなくてはなりません。

平次は恐らく、その突拍子もない話を信じてくれるでしょうが、それは同時に、和葉が隠し続け、平次が確かめようとしなかった事実を、無理やり2人の前に突きつける事にもなります。

そして、それは一つ間違えば次期国王である平次への民の信頼を損ない、服部王国に内乱の種を植え付ける事にもなりかねません。

コナンは、年齢を代償に命を助けて貰う事を自ら選んだのです。その選択のツケを2人に支払わせる事など、出来るわけはありませんでした。

「……和葉姫には、何て言うつもりだ？」

「何も。アイツの耳には入れんようにカタつけるわ」

平次の応えは、和葉とあの人魚が関係あるのだと認めたようにも受け取れました。

書庫に沈黙が落ちます。

それを破ったのは、来訪者を告げるベルの音でした。

第8話『囚われの人魚・3』

和葉が目を覚ました時、日はすっかり昇りきり、城は普段の雰囲気を取り戻しておりました。

それは、あくまでも『表面上は』との注釈付きではありませんが。

まだ少し残ったままの眠気を覚ますように小さく欠伸をして、和葉はゆっくりと起き上がり、寝台の横に垂れている房付きの組紐を引きました。

この紐は控えの間のベルに繋がっていて、人を呼ぶ時に使われます。海の王国では馴染みのないものでしたので、和葉は最初そのようにして人を呼ぶ事に戸惑いましたが、ドレスの着替え1つ取っても誰かの手助けが必要ですし、それがここでの決まりごとだと乳母に諭されて、やっと習慣になったのです。

「お目覚めですか、姫様？」

乳母が、いつものように世話係の侍女を従えて和葉の寝室を訪れました。

和葉の部屋は、コナンと同じように平次の私室の一角にあります。乳母は最初、高貴な身分の姫の部屋ならば、もっと奥のそれに相応しい場所を用意するべきだと主張したのですが、和葉が海から離れた部屋を嫌がった事もあり、平次が取次ぎがなければ顔を見る事も出来ないような所に閉じ込めてはつまらないと、この部屋を用意させたのです。

「御仕度致しましょう」

水門での出来事後、改めて身支度を整えたのでしよう。

髪をいつものようにぴっちり結び上げ、お仕着せを隙無く着こなした乳母の指示で、侍女たちが朝の仕度に取り掛かりました。

その手順は、いつもと変わりありません。

けれど、和葉には、ドレスを着せ掛けたり髪を結び上げたりしている侍女たちが、皆どこと無く上の空のような気がしました。

いつもと変わらないのに、どこか落ち着かないような、ざわめいた雰囲気があるように思えます。

（何かあったんかな？）

乳母なら何か知っているかもしれないと問うような視線を投げましたが、気付かなかったのか、それとも敢えて気付かないフリをしたのか、乳母は『そろそろお食事の時間ですよ』と和葉を食堂へと促しました。

（やっぱり、何かあったんかな？）

食事の席では、平次と客人のコナンが和葉にはよくわからない書物の事で楽しい会話を交わしていましたし、給仕している使用人の態度もいつもと何も変わりません。

食事が終わるとすぐに平次とコナンは書庫に閉じ籠ってしまいました。だが、それもあまり珍しい事ではありません。

1人で置いていかれて退屈している和葉に、乳母が香りの良いお茶を入れてくれるのも、いつもと同じです。

なのに、どこかざわわとした落ち着かない空気が感じられて、和葉はその雰囲気から逃れるように海へと向かいました。

（何かあったんやろ？）

華奢な靴を脱ぎ、ドレスを濡らさないように気遣いながら爪先で波と戯れている和葉に、大人の掌ほどの小さな魚が次々と近寄って来ました。

沖合いで群で生きている、岩場には決して近寄らないはずの魚たちです。

海は穏やかに凪いでいましたし、潮が急に変化したようにも感じられませんので、これは異常な行動でした。

（どうしたん？）

和葉の音にならない問いを感じ取ったのか、魚たちもまた音にならない言葉で口々に話し掛けます。

その光景は、人間たちには多分、魚たちがばしゃばしゃと跳ね回っているのしか見えなかったでしょう。

けれど、和葉の耳にはそれは言葉としてしっかりと伝わりました。

（姉さまが……？）

沖合いに住む魚たちは、和葉の姉の園子が漁師たちの張った網に絡め取られ、城の地下にある水門の奥に繋がれるまでの全てを見ていました。

その話に、和葉の白い頬が、すうつと蒼ざめました。

魚たちはまだ何か言っていました。落ち着いて聞く事など出来ません。

脱ぎ捨てた靴もそのままに、和葉は階段を駆け上りました。

第9話『囚われの人魚・4』

駆け上がった勢いのままに、和葉は真っ直ぐに自分に与えられている部屋へと向かいました。

石造りの硬くて冷たい廊下は、歩く度に痛む和葉の足に更に鋭い痛みを与えましたが、気にもなりません。

足の痛みよりも、姉姫の園子が人間たちに囚われ、人の目に晒されている事の方が耐えられなかったのです。

あの広大な海を統べる王の娘にとって、これほど屈辱的な事はそうはないのですから。

部屋に飛び込んだ和葉は、寝室の鏡の前に置いてある化粧箱から短剣を取り出しました。

姉姫の園子が海の魔女から貰ってくれた、あの短剣です。

和葉が人魚に戻るための魔力を持った短剣で人間の世界の網を切れるのか不安はありましたが、彼女が手にする事の出来る刃物はこれしかないのです。

（地下の水門……）

短剣を包んでいる絹のハンカチをもどかしげに解く手がぶつかって、螺鈿細工の化粧箱が硬質な音を立てて床に落ちましたが、それに構う事無く、和葉は城の奥へと走りました。

地下の水門は、以前平次に城の中を案内してもらった時に行きましたので、和葉にも場所はわかっています。

本当なら、人目が少なくなる夜を待った方がいいのですが、今の和葉にはそこまで思い至れるほどの冷静さはありませんでした。

裸足のまま、ドレスの裾が乱れるのも気にせず廊下を走る和葉に

使用人たちは目を丸くしましたが、彼女が裸足を好む事も、時折平次を探して城の中のあちろちらに顔を出している事も知っていましたので、さほど奇異にも感じられずにすみしました。

「姫様、そんなに急いでどちらへ？ 殿下なら、まだ書庫にいらっしやいますよ？」

和葉はあまり走る事に慣れていません。

城の奥、地下水門への扉に続く廊下で壁に手について息を弾ませている和葉に、乳母が声を掛けました。

乳母の手にはティーセットを載せた銀の盆がありましたので、書庫に閉じ籠っている平次たちに届けられるものと思われれます。

「殿下に御用事でしたら、私からお伝え致しますよ？」

乳母の言葉に首を振って、和葉はまた奥へと走り出しました。

「姫様!？」

乳母が振り返った時、和葉は水門へ下りる階段の扉に手を掛けていました。

重厚な外観の扉は意外にもさほど重くはなく、和葉の力でも充分に開けられます。

その和葉の手に光るものを見つけて慌てて後を追った乳母の目の前で、扉は閉められました。

「姫様!!」

ティーセットを載せた盆を廊下に置いて乳母が扉を引きましたが、和葉の姿は見えません。

「……殿下に」

和葉が何をしようとしているのかはわかりませんが、自分には恐らく止める事は出来ない、乳母は助けを求めるように書庫へと走りました。

第10話『囚われの人魚・5』

服部王国の城の地下水門は、小さな港と言っても過言ではないほどに広いものでした。

普段は漁船が出入りするだけですが、有事に備えて小型の軍艦が配備されていますので、広さの他に深さも充分に取られています。

その水門には今、2人の門番以外に人影はありません。

和葉が下りた階段は水門からさほど遠くありませんでしたが、風と波の音に助けられて、門番には気付かれずにすみました。

（姉さまは……？）

門番に見つからないようにと柱の影から船着場を見回す和葉の目に、誰かが起こした小さな波が映りました。

人間には海からの波と区別出来ないほどの小さな違いでしたが、和葉にはそれが自然の起こしたものではない事がわかります。

人間たちが姉姫の園子をどのように扱っているのか本当の所はわかりませんが、魚たちの話では、網に囚われてはいるものの手酷い仕打ちを受けているわけではないようです。

それならば、あの園子の事ですから、ただおとなしく囚われの姫君を演じているとは思えません。

きっと、網から逃れようと暴れ、声高に不満を述べているでしょうから、あの波は園子が起こしたものと思われました。

園子がいるだろう場所は門番から少し離れた、けれど彼らからはよく見える所でしたので、このまま近づいたら網に手を掛ける前に止められてしまいます。

和葉は躊躇う事無く、海へと飛び込みました。

波は穏やかで海はよく澄んでいます。

地下ですからあまり明るいとは言えませんが、水門から差し込む陽射しが柔らかく海中を照らしていますので、周りを見るのには不自由しません。

（姉さま！）

水中に垂れたロープの先に、網に両手と尾を捕らえられもがいている園子の姿がありました。

「和葉ちゃん！」

自分に泳ぎ寄る和葉の姿に気付いて、園子が驚いたような声を上げました。

園子が捕らえられている網は、水面からゆうに数メートル下にあります。

陸の人間が潜れない深さではありませんが、ここは遊びで泳げる場所ではない事は園子にもわかりましたので、和葉の姿を見つけて慌てたのです。

「何やってんのよ？こんなトコ来て、愛しの王子様に人魚だってバレちゃったらどうすんの！？わたしの事なら心配いらないって！」

不自由な手を動かして園子が止めようとしませんが、和葉はそれを無視するように網に短剣を当てました。

刃先が園子に触れないように慎重に、短剣を引きます。

けれど、網には僅かに傷がついただけで、短剣の扱いにも不慣れな和葉の手では、丈夫に出来ている漁師の網は中々切れません。

息が続かないのでしよう、苦しげに眉を寄せた和葉は一度二度と水面上に顔を上げて息を繋ぎました。

「和葉ちゃん！あんた、今は『人間』なんだよ？もう海の中で自由に動けないんだよ？お願いだから、早く上がって！」

必死で止めようとする園子に小さく首を振って拒否を示すと、和葉はまた網に短剣を当てました。

息はあまり長く続きませんが、海に潜る事は和葉にとって難しくはありません。

ただ、ドレスが邪魔でした。

幾重にも重なったレースや繊細な刺繍を施された華麗なドレスは、陸の世界にあつては姫たちを美しく飾っています。

けれど、自分1人では着る事はおろか脱ぐ事もままならないようなドレスは、海にあつてはただ邪魔なものでしかありません。

水を吸って重く身体に張り付くドレスが和葉の動きを妨げ、自由を奪っていきます。

中々切れない網に、和葉はもう一度息を継ぐために水面に上がろうとしましたが、思うように身体が動きません。

和葉の手から、短剣が滑り落ちました。

「和葉ちゃん！！」

園子が、悲鳴のような声を上げました。

第11話『海の王の娘』

激しく鳴らされるベルとそれを打ち消すような勢いで叩かれているノックの音が、静かな書庫の空気を突然震わせました。

その尋常でない様子に、書庫に閉じ籠っていた平次が弾かれたようにソファから立ち上がり、締め切っていた扉を開けました。

「殿下っ!!」

まるで転がるようにして飛び込んできた乳母が、走って乱れた髪もそのままに平次の腕に縋りつきました。

本来なら、たとえ身分の高い貴族といえど与えられた役目以外では輕輕しく王族の身体に触れる事など許されませんし、乳母は自分の身分をよく弁えておりましたので決してこのような行動を起こしたりはしません。

その乳母の滅多にない取り乱しように、平次の表情がずっと引き締まりました。

「何があったんや？」

「姫様……姫様が……」

「和葉がどうした!？」

上がった息を何とかなだめようとしているのでしょうか、乳母が両手で胸を押えて崩れるように膝をつきました。

「姫様が地下の水門に……お手に光るものが……」

乳母がそこまで口にした瞬間、平次とコナンは書庫を飛び出しました。

地下の水門には今、人魚が捕らえられています。

その事は決して口外しないようにと命じてありますから城の者が話したとは思えませんが、和葉がどこからかその事を知って、捕らえられた人魚を助けようと水門に向かったのは間違いありません。

「まさか、彼女……」

本気で走る平次に引き離されないように限界の力で彼の背を追いながら、コナンが小さく呟きました。

人魚を助けるためには網を切らなければなりません、女の力では陸に引き上げる事はとても無理な事ですし、もし出来たとしても門番に止められてしまうでしょう。

唯一の方法は、捕らえられている人魚の元まで潜って網を切る事です。

それだとて、そう簡単に出来る事ではありません。

「医師を呼べ!!」

コナンと同じ危惧を抱いていたのか、平次がすれ違いざまに侍女に命じます。

そのまま勢いを殺す事無く、水門への階段を駆け下りました。

「和葉は!?!」

水門に満ちた音の全てを打ち消すように響いた声に、2人の門番が水面を指差しました。

良く澄んだ海の中、人魚が自分の身体が傷つくのも構わずに網から逃れようと身を振り、何事かを叫んでいます。

その視線の先に、まるで蝶のようにゆらゆらと波に広がるドレスが見えました。

「ここに詰めとるクセに動けんのかい！！」

異変に、それも和葉が海に入った事に気付きながらも、ただおろおろと見ていただけの門番に毒づく、平次は上着を脱ぎ捨て海に飛び込みました。

冬の近い海の水が平次の肌を冷たく刺し、一気に体温を奪っていきますが、構わずに潜ります。

平次が気を失った和葉を捉えて水面に顔を出したのは、見守っていたコナンが息苦しさを感じる間もないほどにすぐの事でした。

第12話『海の王の娘・2』

「ご無礼致します！」

自国の王子が海に飛び込んだ事で我に返ったのか、門番たちが平次の腕から和葉を受け取りました。

コナンが平次の脱ぎ捨てた上着を床に敷きます。

「ここに寝かせて！それと、乾いた布たくさん！厨房に言ってお湯沸かしてもらって！」

コナンの命じられた声に、門番たちは彼が子供だという事を気にする間もなく従いました。

「どうや？」

「今んとこ問題なさそうだ」

海から上がった平次の問いに、和葉の傍らに膝をついて様子を確認していたコナンが短く応えました。

平次が和葉の様子を確認しようと手を伸ばしましたが、触れる事無くただその傍らに膝をつきました。

海水に濡れたままの自分の冷えた手では、かえって和葉の負担になってしまうからです。

「身体が冷え切ってる」

少しでも寒さを凌げるようにと、自分の着ていた小さな上着を毛布代わりに和葉に掛けたコナンが、僅かに眉を寄せました。

和葉は、呼吸こそ弱々しいものの鼓動はしっかりしていましたので今すぐに危険な状態になるとは思えませんが、海水に冷やされ弱った身体には些細な病すら命取りとなりかねません。一刻も早く医師の手当てが必要でした。

「医師は……」

焦れたように平次が顔を上げた時、助手を引き連れた医師が侍女たちに先導されるようにして階段を駆け下りてきました。

「殿下！」

髪や服から水を滴らせている平次に驚いて声を上げた医師に、平次は和葉の手当てを命じました。

初老の医師は簡単に和葉の容態を確認すると、助手や侍女に細々とした指示を与え、慌しく地下水門を後にしました。

「オメーも早く着替えろ。風邪ひくぜ？」

「いや、コッチが先や」

コナンが柔らかな乾いた布を渡しながらそう勧めましたが、平次は簡単に髪を拭くと門番たちに人魚の網を切るよう命じました。

門番たちが、それぞれ頑丈そうな造りの大振りの短剣を手に海に飛び込みます。

和葉の手には余った丈夫な網でしたが、さすがに短剣を持った大人の男の力には敵わず、すぐに園子を開放しました。

「く」苦劳やったな」

海から上がった門番たちに労いの言葉を掛けると、平次は交代を命

じて彼らを水門から去らせました。

「あんたが王子様？」

門番の足音が消えるのと同時に掛けられた若い女の声に、平次とコナンが振り返りました。

いつの間に顔を出したのか、網から開放されたばかりの人魚の園子が、怒りを秘めた鋭い視線を平次に向けています。

「和葉ちゃんは？」

「生きとる。今は医師がついとるし、心配いらんやろ」

棘を含んだ声での問いに平次が静かに答えを返すと、園子の周りからほんの少しだけ怒りが消えました。

「わたしは海の王の娘の園子。あんたは？」

「服部王国の王子、平次や」

「平次……ね。で、そっちのガキンチョは？」

『ガキンチョ』と言われたコナンが嫌そうに顔を顰めました。今の姿では否定は出来ません。

「工藤王国の王妃様の遠縁のコナン」

今までに何回と無く繰り返した自己紹介をしたコナンが、床に両手をついて身を乗り出しました。

「訊きたい事が……」

「話す事なんてないわよ！」

コナンの問いを強い調子で遮って、園子が平次に視線を戻しました。

「丁度いいわ。これ、和葉ちゃんに返しておいて」

そう言って園子が差し出したのは、海の魔女の志保から貰ったあの短剣でした。

「それと、伝言をお願い」

「伝言？」

「そう。『さっさとそれ使いなさい』って」

それだけ言うと、園子はすいっと岸から離れました。

「ちよお待ち！」

「話す事なんてないって言ったでしょ？早くあれ開けてよ！それとも、海の王の怒りをかって国を沈めたいの！？」

平次が引き止めようとしたが、まだ怒りの消えない園子には取り付く島ありません。

仕方なく、平次は水門を上げるためのベルを鳴らしました。

水門が、ゆっくりと上がっていきます。

「オレからも伝言や。和葉の事は心配いらん。オレの客人として責任持って預かっとる」

背を向けたままの園子に届いたかどうか分かりませんが、平次から託された伝言は、彼が和葉の事を人魚だと知っている다고告げていました。

水門が半分ほど上がりました。

優雅な尾びれが起こした小さな波だけを残して、園子は海の中に消えました。

第13話『海の王の娘・3』

平次の私室の一角にある和葉の部屋では、医師や侍女たちが慌しく、けれど息を潜めるように静かに、各々の役目を果たすべく動き回っていました。

乾いた温かな空気を作り出すために、暖炉の前に付きっ切りで炎の番をしている者。

着替えやシーツを抱えて、保管庫と部屋を何度も往復する者。

手足についた幾つもの傷を手当てする者。

皆が和葉の世話に掛かりきりになっていました。

「ねえ、お姫様の様子はどうか？」

地下水門から戻ったコナンが、丁度部屋から出て来た侍女に尋ねました。

薪を入れる大きな籠を抱えた侍女は、少しだけ足を止めて『まだ眠っておられます』と言うと、忙しそうに奥へと走って行きます。

それを見送って、コナンはそうっと部屋の中に入りました。

寝台の周りには、医師や乳母を始めとした何人もの助手や侍女たちが控えていましたが、酷く切迫したような雰囲気は感じられない事に、コナンはほっと安堵の息をつきました。

和葉にもしもの事があれば、折角掴んだ『海の魔女』への手掛かりを失ってしまうのです。

よかったと胸を撫で下ろして、コナンは漸く自分の身勝手さに気付きました。

医師も乳母も侍女たちも皆、和葉の事を案じています。

平次も、口にこそ出しませんが、ただの客人以上に和葉の事を気に入って大切にしていますから、もしもの事があったら一番哀しむのは彼でしょう。

なのに、コナンは和葉自身ではなく、彼女の持っているだろう手掛かりを失う事を心配していたのです。

「情けねえな……」

自嘲するように小さく呟いて、コナンは侍女たちの邪魔にならないようにと部屋の隅に移動しました。

「……ん？」

部屋が見渡せて一番邪魔にならないだろう窓際へと向かったコナンの足元に、海のように青いサファイアの指輪が落ちていました。

不思議に思っただけを振り返ると、カーテンや化粧台の陰に幾つものネックレスやイヤリングが、そしてその傍には螺鈿細工の化粧箱も落ちています。

いくら慌てているとはいえ、侍女の誰かが落としたのなら、丁寧に片付けるまではいかなくてもきちんと拾い集めて化粧台に戻しておくはずです。

それがされていないという事は、和葉が落とし、それに気付かないほどに何かに心を奪われていたと考えられました。

和葉がそこまで思いつめる事。

それは、地下水門に囚われていた人魚の事です。

「あの短剣を隠してあったのか……」

去り際に、人魚の園子が伝言と共に平次に渡した短剣。

園子の言葉から、あの短剣は人魚の国のものだとわかりました。

「さっさと使えって……」

どんなに華奢だといっても、短剣は人を殺める事も出来る立派な武器です。

園子がどんな意味を込めてあの言葉を言ったのかはわかりませんが、和葉に何かを決断させるものだという事だけは感じ取れました。

それが平次や和葉にとって良くない事でなければいい。

そう思いながら化粧箱を拾い上げると、美しい絹の張られた中から小さな紙片が滑り落ちました。

「何だ……?」

何気なくその紙片を広げたコナンが驚いたように大きく目を見開き、次いで少しの罪悪感を口元に浮かべると、丁寧に紙片を折り畳んで懷にしまいました。

この紙片に書かれた文字は唯一人の人に宛てられたもので、他の人の目に触れてはならないものです。

勿論、コナンが持っていていいものではありませんが、化粧箱に戻して侍女の目に触れてしまうよりはまだましです。

和葉が目覚めたら、彼女が知らない事実と一緒にそっと返そう。

そう心に決めて、コナンは未だ目覚める気配のない和葉の様子をそっと窺いました。

第14話『海の王の娘・4』

「お湯加減はいかがですか？」

色の美しい石や精緻な彫刻で飾られた広い湯殿に、遠慮がちな侍女の声が響きました。

小さな扉で仕切られた控えの間から掛けられたその声に、返事はありません。

「お背をお流し致しますか？」

「いや……」

再び掛けられた声に、漸く短い応えがありました。

「お召し物は仕度致しました。他に御用はございませんか？」

「もうええで。乳母の方、手伝うたり」

「……承知致しました」

躊躇うような間を置いて控えの間から侍女の気配が消えると、平次は大きく息をついて張り詰めていた気を緩めました。

平次が水を吸って肌に張り付いた服もそのままに地下水門から戻った時、和葉付きとなった乳母から平次付きの侍女たちの纏め役を託された年嵩の侍女は、常に落ち着いた言動を誇っている彼女にしては珍しく慌てたような声を上げて、半ば無理やりに彼を湯殿へと押し込んだのです。

平次としてはすぐにでも和葉の元に行きたかったのですが、今ここで自分が体調を崩してしまっただけは、思いもよらなかった事態に動揺している侍女たちを落ち着かせる事も、弱っているだろう和葉を護る事も出来なくなりますので、冷えた身体を温めるべく素直に湯に

浸かりました。

「……海の王国……か」

湯に浸かった自分の腕を見下ろして、平次がため息混じりに呟きました。

地下の水門で海に沈んでいく和葉の姿を見つけた時、平次は今まで感じた事のないすうっと身体の芯が冷えていくような恐怖を感じました。

それを押しやるように海に飛び込みましたが、海の中にいる和葉の姿に、伸ばしかけた手を一瞬引いてしまったのです。

あの時、平次の目に飛び込んできた光景。

水門から差し込む陽光が仄かに海中を照らし、その揺らめく光が和葉の青みを帯びた白い肌をより透明に引き立てていました。

豪奢なドレスは確かに和葉に良く似合い美しく見せていますが、海の中にいる彼女はきつと何も飾らずともより美しく見えるだろう事に、恐らくはあの人魚のように虹色に輝く尾と繊細なレースのような尾びれの方がより似合うだろう事に、少なからぬ衝撃を受けたのです。

その事に、平次は嫌でもお互いの住む世界の違いを感じ取らずにはいられませんでした。

あの人魚は、海の王の娘だと名乗っていました。

顔立ちはさほど似てはいませんが、彼女の様子から和葉とは姉妹だと思われます。

海の王の娘の和葉が何故人間と同じ『足』を持ち、陸に来たのか平

次にはわかりません。

けれど、あの人魚から託された伝言は、和葉に海へと戻るように促しているように感じられました。

「引き止めるんは無理かしらんな……」

いつの間にか、まるで土に水が染み込むように自然に和葉の存在が自分の中にあつた事に、平次は今更ながらに気がつきました。

それを不快に思うどころか、嬉しいとさえ思っている事にも。

そして、これが初めて感じる恋というものかもしれないとも思いました。

けれど……。

何かを断ち切るように一度頭までを湯に沈めて、平次は湯殿を後にしました。

和葉が目を覚ましたという知らせが届いたのは、それからすぐの事でした。

第15話『海の魔女と海の姫』

「あら、いらっしやい。姫に再度お運び頂けるなんて、身に余る光栄だわ」

不機嫌さを隠そうともしないで現れた園子に海の魔女の志保が恭しく礼をしましたが、その声には楽しい響きがありました。

海の魔女の志保には、園子がなぜここに来たのか見当がついているのでしよう。

「ああもう！本当にハラが立つたら！」

志保に勧められるままに珊瑚の椅子に座った園子が、苛立たしげに尾びれを振りました。

「人間に捕まったんですって？」

「うん。和葉ちゃんところ行った帰りにね、網に引っ掛かっちゃって……。ドジ踏んだわ」

「無事に帰って来れたんだし、良かったじゃない？」

「まあね。でも、網であちこち擦り傷だらけだし……」

園子がふうつとため息をつきました。

確かに、園子の身体には腕と言わず尾と言わず、幾つもの擦り傷が出来ています。

さほど酷いものではありませんからすぐに治るでしょうが、中には血の滲んでいるものもありました。

「鮫に血の匂いを嗅ぎ付けられてもいけないから、手当てしてあげ

るわ。もっとも、姫には素敵な騎士がついているから心配いらないでしょうけどね」

「ええ！真さんにかかれば鮫なんて！」

志保の言葉にキラキラと瞳を輝かせながら両手を組んで恋する乙女のポーズを取った園子は、瞬き一つでまた不機嫌そうに眉を寄せました。

「でも、やっぱり痛いし、手当てして貰える？」

「いいわよ。ちょっと待っててね」

クスクスと笑いながら、志保は棚から傷薬を取り出しました。

「それで、あなたは何が不満なの？」

「不満って言うか、心配なんだけどね……」

「彼女の事なら心配いらないわ」

園子の腕に薬を塗りながら、志保はあっさりと断言しました。

『すぐになおる』などというアヤしいネーミングの薬ですが効果は抜群で、痛みは勿論、傷さえも見る間に消えていきます。

その様子を興味深そうに見ていた園子が、常々疑問に思っていた事を口にしました。

「ねえ、志保って、どこまで知ってるの？」

「どこまでって？」

「わたしが相談に来るの知ってたみたいに短剣くれたり、和葉ちゃんの事心配いらないうって言ったり、何だか志保って先の事まで全部知ってるみたい」

「そうね……知ってるとも言えるし、知らないとも言えるわね」

園子の問いに意味深な笑みを返すと、志保はテーブルの上で貝の受け皿に収まって虹色に輝く大きな珠を指差しました。

「あの珠はね、この世界の色々な情報を映し出してくれるの。こんな風にね」

志保が珠に手をかざすと、壁に嵌め込まれた大きな鏡に海の王の城が映し出されました。

「勿論、全てというわけにはいかないけど、海には陸からの水も流れ込んで来るから、水の見えた事なら陸の様子も見られるわ」

その言葉と共に、鏡の中の景色が変わりました。

「これは『服部王国』の城。あなたも知ってるでしょう？この和葉姫を助けたのが、愛しの王子様ね。それから、こっちは『毛利王国』の城。姫君は舟遊びかしら？無邪気で可愛いわね」

次々に変わる景色に、園子は『これってもしかなくても『覗き』じゃない？』と思いましたが、賢明にも口には出しませんでした。

「唯一の欠点は陸の情報がリアルタイムに拾えないって事だけど、こうやって情報を集めて分析すれば、ある程度は先が読めるものよ」
あっさりと楽しげに言い切る志保に、園子はさっきの疑問は気が付かなかった事にしようと心に決めました。

「……わたし、和葉ちゃんより、こっちのお姫様の方が良く知ってる気がするのよね」

ぼんやりと鏡を見つめていた園子が、小さく呟きました。

鏡には、侍女たちと舟遊びに興じる蘭の姿が映し出されています。

「あなたは海の王の娘で和葉姫の姉姫でしょう？」

「そうなんだけどさ……」

海の王の娘と毛利王国の姫の間に交流などないのですが、それでもなぜか良く知っているような気がして、園子は言葉を濁しました。

「もしかしたら、あなたとあの姫とお友達の世界があるのかもしれないわね」

志保の言葉に、鏡を見て考え込んでいた園子が振り返りました。

「この世界には、まだまだ知らない事がたくさんあるのよ。知らなくともいい事もたくさんね。大丈夫、心配しなくてもみんなハッピーエンドを迎えられるわ」

どこか自信に満ちた笑みを浮かべている志保に、園子は漸く彼女らしい明るい笑みを見せました。

第16話『真珠の涙』

和葉が目覚めた時、一番最初に目に飛び込んできたのは、心配そうな乳母の顔でした。

「姫様！……ああ、ようございました。どこか痛む所はございませんか？お部屋をもっと暖めましょうか？ああ、それよりも、何か召し上がりますか？何か精のつく温かいものを作らせましょう。そうそう、殿下にもお知らせしないと」

少し疲れの見える顔に安堵の笑みを浮かべた乳母は、矢継ぎ早に問い掛けながらも和葉の応えを待つ事無く、慌しく部屋を後にしました。

その後姿をぼんやりと見送っていた和葉に、遠慮がちな幼い声が掛けられました。

「お姫様、大丈夫？」

声の主を探すようにゆっくりと視線を戻すと、寝台の傍でコナンが心配そうに和葉の様子を窺っていました。

「どこか痛い所ない？そうだ、喉渴いてない？お水飲む？」

幼い姿で懸命に気遣ってくれるコナンに、和葉は淡く微笑んで大丈夫だというように小さく首を振りました。

恐らくは網や岩で作ったのだろう幾つもの小さな傷は、確かに疼くような鈍い痛みを訴えていましたが、気になる程のものではありません。

それよりも、姉の園子の事の方が気がかりでした。

「ボクね、お姫様が海に落ちたって聞いて、凄くびっくりした。だって、海って漁師さんたちでも時々溺れちゃったりするんでしょ？だから、もしお姫様が溺れちゃったらどうしようって……。でも、王子様は凄いね！門番の人たちなんて慌てるだけで何にも出来なかったのに、何の躊躇いもなく冷たい海に飛び込んで、お姫様を助けたんだよ！」

沈んでいる和葉の気持ちを慰めようと、コナンが子供らしい熱心さで、その時の様子を語ります。

けれど、自分を助けたのが平次だと知って、和葉から僅かな笑みさえ消えました。

平次に助けられたという事は、和葉があの人魚を助けようとしていた事を、ひいては自分が人魚だと彼に知られてしまったという事です。

いえ、網に捕らえられた姉姫の園子を助けようと海に飛び込んだ時から、平次に隠し通す事が出来るとは和葉も思っではいみせんでしたが、こんな風に心の準備も整わないままに知られたくはなかったのです。

「ボクもだけど、王子様がね、お姫様の事すっごく心配してた。だから、早く元気になって」

コナンの温かな励ましの言葉はとても嬉しいものでしたが、同時に今の和葉にはとても辛いものでした。

それでも、心配してくれるコナンに感謝を込めた笑みを見せようとしたが、まるで凍り付いてしまったかのように唇さえ上手く動かせず、和葉はそっと目を伏せました。

「あのね……」

その様子をどう受け取ったのか、何かを逡巡するするように暫く視線を宙に彷徨わせていたコナンが意を決して口を開いた時、静かな、それでいて力強い足音が近づいて来ました。

耳に馴染んだその足音に、和葉の身体に緊張が走りました。

「具合はどうや？」

掛けられた労わりの言葉も優しい声音も、今までならとても嬉しいものでした。

けれど、今はきつとその後に拒絶と嫌悪の感情が続くだろう事に、和葉は哀しみに震えそうになる唇を噛み締めました。

人魚は人間にとっては異質な生き物です。

今までは『異国の姫君』として遇してくれていましたが、人魚だと知られてしまえば異端者として排除されるだろう事は容易に想像がついたのです。

まるで断罪を待つ罪人つみびとのように俯いていた和葉は、続いた言葉に弾かれたように顔を上げました。

「あの人魚なら、海に帰ったで」

『あの人魚』とは、間違いなく姉姫の園子の事です。

『海に帰った』という事は、平次が園子を網から開放し、海へと続く水門を開いたのでしょうか。

姉姫の園子が無事に海に帰ったなら、それはとても嬉しい事です、何故人間である平次が人魚を開放したのかがわからず、和葉は彼に問い掛けるような瞳を向けました。

「元々、開放するつもりやったからな」

和葉の瞳での問いにそれだけ返すと、平次は懷から短剣を取り出しました。

「あの人魚から、和葉に渡すように頼まれた。伝言も預かっ取る」

平次から手渡されたのは、姉姫の園子が和葉のために海の魔女の志保から貰って来てくれたあの短剣でした。

「『さっさとそれ使いなさい』それが伝言や」

『さっさとそれ使いなさい』

平次に託された姉姫からの伝言に、和葉の手の中の短剣がその重みを増したように感じられました。

第17話『真珠の涙・2』

城が落ち着きを取り戻した時、陽は既に傾き空は茜色に染まっていた。

「手掛かりは見つかったけど……」

『姫様はまだお疲れですから』と、乳母に和葉の部屋からの退室を促されて居間に移ったコナンは、侍女が用意してくれた軽食に手を付ける事も忘れたかのように、窓の外、夕日を浴びて黄金色に輝く遠く広がる海を見つめていました。

『工藤王国の王子』である自分を取り戻すために、コナンはずっと『海の魔女』に繋がる手掛かりを探していました。

そして、この『服部王国』で漸くその手掛かりを見つける事が出来たのです。

それは迂闊に問い質してはいけないものではありませんでしたが、折を見て話を訊く事も出来るだろうと、コナンは内心とても期待していました。

けれど……。

「話を訊くのは、無理かもしれないねえ……」

海から自分の小さな両手に視線を移して、コナンは苦いため息を零しました。

「何、暗なっとなるんや?」

「服部……」

突然掛けられた声にコナンがはっと顔を上げると、父王の呼び出しを受けて本宮に行っていた平次がいつの間にか戻って来ていました。

「早かったな」

「大した話やなかったからな」

「大した話じゃないって、今朝からの事で呼ばれたんだろ？」

ほぼ全ての王家がそうであるように、平次も幼い頃から両親の住む本宮とは別棟を与えられ、そこでの一切の事を任されています。

ですから、普段なら平次が住む棟での出来事に国王が口を出す事など滅多にありません。

その証拠に、平次が和葉を客人として城に迎え入れた事を侍従たちを通じて知らされても、咎めるような事も、自分たちに引き合わせるよう命じる事ありませんでした。

けれど、今朝からの出来事はさすがに『服部王国』の国王として見過ごすわけにはいかず、平次を呼び出したのでしよう。

『工藤王国』の王子であるコナンにも、それはわかりました。

「で、どうするって？」

「別に、ただ『ヘタうつなや』って言われただけや。オレも、それなりに親から後継ぎとして信頼されとるんやで？」

気遣わしげに問うコナンにあっさり返すと、平次は付き従って来た侍女を下がらせて、彼と向かい合うようにソファに腰を落ち着けました。

「なあ、工藤」

「何だ？」

何気ない話題転換のような軽い調子とは裏腹に、平次がコナンに真

剣な眼差しを向けます。

それに何を感じたのか、コナンも無意識のうちに本来の自分である『工藤王国の王子の新一』として、その視線を受け止めました。

「オマエ、さっき地下水門で、人魚に何を訊こうととったんや？」
「何って……」

平次のこの問いはコナンにも予測出来たものでしたが、どう答えたらいいいのかまだ結論は出ていません。
口籠るコナンを追い詰めるように、平次は問いを続けます。

「オマエは人魚の何を知っとるんや？」
「何も知らねえよ」

「なら、何を探ろうととったんや？」

「探ってるワケじゃねえ」

「夜中に和葉追いかけたり、書庫漁ったりとったやろ？ 探っとらんとは言わせんで？」

「探ってたワケじゃねえ！ 探してたんだよ！」

自分の中で整理しきれていないものを突かれた事に苛立って、コナンが思わず声を荒げテーブルに拳を叩きつけました。

ドンツと低く鈍い音がして、茶器が不揃いな悲鳴を上げます。

その音と拳の痛みに、コナンがはっと我に返りました。

「人魚を探しとったんか……。それで和葉の事、気にしとったんやな？」

「……ああ、そうだよ」

誤魔化す事も否定する事も出来ず、コナンは平次に求められるままに全てを語りました。

「……自分でも信じられねえけどよ、全部事実だぜ？」

全てを打ち明けた事で気が抜けたのでしよう、コナンは疲れたようにぐったりとソファに沈み込みました。

「オマエがここにこうしておるんやから事実なんやろうけど、けつたいな話やな」

「アツサリ信じるオメーの方が信じらんねえけどな」

何一つ否定する事なく受け入れた平次に、コナンが意地悪げな笑みを向けます。

一瞬睨み合った二人は、次の瞬間には同時に笑い出しました。

まだまだ心配な事も気掛かりな事もありましたが、笑った事で平次もコナンも気持ちが幾分か落ち着きを取り戻しました。

「とりあえず、今日はゆっくりしようや。疲れた頭で考えたかて、ロクな案は浮かばんやろ？」

「そうだな。和葉姫もまだ疲れてるだろうし……」

早朝からの慌しい出来事に、自分たちは勿論、侍女たちを始めとした使用人たちも皆疲れています。

余計な混乱を避けるために、彼らに休息を取らせる事も必要でした。

「ハラ減つとるやろ？晩メシ急がせるわ」

いつもの晚餐の時間にはまだ間がありましたが、急いで仕度するよう命じるために平次が隣室に控えている侍女を呼ぼうとした時、控えの間で何やら騒がしい気配がしました。

「何や？」

その気配に、和らいでいた居間の空気がぴんと張り詰めます。
様子を窺う間もなく、乱れた慌しい足音に続いて、礼儀も作法も無
視したように乱暴に居間の扉が開けられました。

第18話『真珠の涙・3』

寝室の大きな窓から見える夕日の色に染まった海を見やって、和葉は悲しげに顔を曇らせると小さなため息を零しました。

少し休みたいたからと、心配してずっと傍に付いてくれた乳母も下がらせた今、部屋には和葉しかいません。

独りなら、もう無理に笑わなくてもいいのです。

枕元に置いていた短剣を手に寝台を降りると、和葉は部屋を満たす潮騒に誘われるように、窓から外へと足を踏み出しました。

窓の外は手入れされた庭ではなく、自然のままの岩場が続いています。

その硬くごつごつとした岩肌が柔らかな素足に傷をつけるのも構わずに、和葉は足を進めました。

切り立った岩場には、海へと下りる道などありません。

仕方なく、和葉は海に一番近い張り出した崖へと向かいました。

夕方の風に、和葉の長い髪がまるで波に遊ばれているかのように靡きます。

強い風が吹いたなら、そのまま海へと落ちるかもしれません。

怖くないといえば嘘になりますが、それでも少しでも海の近くにいたくて、和葉は風を孕んで広がる裾もそのままに、夜の色へと変わっていく海を見つめました。

あの海の底に、和葉の故郷である海の王国があります。

（姉さまが無事なら、それでええけど……）

地下水門に囚われていた姉姫の園子は解放したと、平次から教えられました。

今の和葉には確認する術はありませんが、平次がこんな事で嘘をつくような人間ではない事は良く知っていますし、姉姫から彼に託された伝言と短剣がそれが本当だと告げていましたので、園子に関してはもう心配いらないと安心していきます。

けれど、それは同時に和葉がこの城での居場所を失った事を意味していました。

（もう、ここには居られへん……）

地下水門での出来事は、明日には城中に広まる事でしよう。

海で拾われた何処の誰ともわからない娘を、この城の人たちは何も訊かずに受け入れ親身になって世話をしてくれましたが、和葉が人魚だと知ったらきつと、今までのようには接してはくれません。もしかしたら、忌むべき存在として殺そうとすらするかもしれません。

人間にとって、人魚はあまりにも異質なものののですから。

だからと言って、和葉には行く当てなどありません。

この城を出て生きていく術など知りませんし、もう、人魚に戻って海の王国に帰る事も出来ないのです。

和葉に残されたのは、ただ、泡となって消える日を待つ事だけでした。

（せやけど……）

全てを捨てて人間になる事を望んだ時から、その時が来るかもしれないと覚悟はしていました。

けれど、それは恋が叶わなかった時の事。

平次が他の誰かを愛したのなら哀しくてもその運命を受け入れます

が、忌むべき存在として断罪されるなど、海の王の娘としての和葉の誇りが許しません。

『さっさとそれ使いなさい』

姉姫の園子からの伝言が、和葉に決断を迫っています。

華奢な短剣が、不意にその重みを増したような気がしました。

第19話『真珠の涙・4』

「殿下っ!!」

お仕着せの裾を乱しながら居間に飛び込んで来たのは、年若い侍女でした。

控えの間にいた年嵩の侍女が、まだ王子である平次と直接話を出来る身分ではないと若い侍女の行動を窘め引き止めようとします。

自分の先輩にあたる侍女たちに両側から腕を押えられた彼女は、控えの間に引き戻そうとする力に抵抗しながら平次に向かって叫びました。

「姫様はこちらにおいでですかっ!?!」

その言葉に、まるで水を打ったかのように居間が静まりました。

「姫様はこちらにおいでですか?」

ここまで走ってきたのでしょう、荒い息を整えながら年若い侍女が繰り返します。

それに応えたのは、コナンでした。

「ううん、来てないよ。何かあったの?」

「姫様が……お部屋でお休みになっていたはずの姫様がいらっしやらないのです!」

侍女の言葉が終わらないうちに、平次が居間を飛び出しました。慌ててコナンがその後を追います。

和葉の寝室は、海に面した窓の他には居間へと続く扉しかありませんので、そこを通って外に出たなら控えの間にいる侍女が気付かないはずはありません。

ましてや、一番近くで和葉に仕えている乳母は経験もさることながら気配りにも長けた人ですから、こんな時に気を抜いたりするはずはありません。

それに、他にも城には数多くの使用人もおりますので、誰の目にも留まらずに姿を消すなどあるはずはないのです。

「何があった!？」

ただおろおろするばかりの侍女たちを突き飛ばす勢いで和葉の部屋へと押し入った平次の一喝に、寝室の前で呆然と立ち竦んでいた乳母が弾かれたように振り返りました。

「殿下……」

「何があったんや？」

「姫様が……あの……姫様が少しお休みになりたいと……それで……」

「目え離れた隙にいなくなった言うんか？」

中々要領を得ない話にイラついた平次が結論だけを突きつけると、乳母はただ頷きました。

「あの……」

「服部」

乳母が口を開こうとした時、部屋の入り口で不安そうに様子を窺っている侍女たちと何事か話していたコナンが平次を呼びました。

「何や？」

「そこにいる侍女たちから話を聞いたんだが、和葉姫は部屋から出ていない。少し休みたいからと乳母殿も下がらせて一人で寝室にいたらしいが、控えの間には乳母殿の他に2人の侍女が控えていたし、丁度仕事が忙しくなる時間帯だから廊下にいた使用人も多かった。誰にも気付かれる事無く出歩く事はまず不可能だ」

「外……か」

「ああ」

コナンの言葉を受けて、平次は寝室の大きく開け放たれた窓に駆け寄りました。

床近くまである大きな窓の外はごつごつとした狭い岩場で、天気が良く風んでいる時でも時折風が巻き上がりますので、とてもではありませんが女性が散歩を楽しむような所ではありません。

ましてや、夕闇が近づき物の形もはっきりとはわからなくなりそうな頃では、高貴な姫なら一人で海を眺める事すら怖がる事でしょう。いくら夜の海を恐れる事のない和葉でも、すぐそこには切り立った崖もあるこんな岩場に好んで出るとは思えません。

この城の警備を任されているよく訓練された兵士たちですら、昼間に1度見回るだけなのです。

けれど、全ての状況が和葉がこの岩場に出た事を示していました。

「おい！服部！」

コナンが制止する間もなく岩場へと降りた平次は、不安定な足元など気にも止めずに一番海に近い張り出した崖へと走り出しました。

第20話『真珠の涙・5』

海に張り出した崖の先端、あと1歩踏み出したなら落ちてしまいそうな所に和葉の姿を見付けて、平次の心臓がどくんと跳ねました。止む事無く吹き続けている風が、柔らかなゆったりとした夜着と長い髪を弄びながら、和葉を遥か下にある海へと誘っているように見えたのです。

「和葉っ!!」

今にも崖から飛び立ってしまいそうな和葉を引き止めるように、平次が叫びます。

その声に驚いたように振り返った和葉を、突然の強い風が襲いました。

崖を駆け上がった風は、まるで海に引き込もうとするかのように夜着の裾を引き、和葉の背を押します。

その強い力に抗えずに足を踏み外しそうになった和葉を間一髪で引き寄せると、平次は半ば引き摺るように彼女を崖から引き離しました。

「ボケっとすんなや!この下には浅い岩場もあるんや!いくらオマエが人魚でも、落ちたら助からんで!!」

荒い語調ではありましたが、平次の声には安堵の色がありました。この崖は、まだ戦が絶えなかった頃に幾人もの姫君がその身を投げ、誰一人として命を永らえた事もなく、未だに亡骸すら上がった事のない場所なのです。

たとえば和葉が人魚で波が味方してくれたとしても、ここから落ちたなら打ち寄せる波を砕く鋭い牙を持った岩に襲われて、決して無事

では済まなかったでしょう。

「戻るで。皆心配しとる」

平次が促すように腕を引きましたが、和葉はその手を振り払って後ずさりしました。

「和葉！」

引き戻そうと手を伸ばした平次を押し止めるように、和葉が右手を胸元に上げます。

その手には、あの短剣が握られていました。

「服部！」

「黙っとれ！」

遅れて駆けつけたコナンがその様子に思わず声を上げましたが、平次の鋭い制止の声に縫い止められたように立ち竦みました。

「戻るで、和葉」

再び延ばされた手から逃れるように、和葉はまた後ずさります。

自分が人魚だと、人間とは異質な存在だと、平次にももう知られてしまっただろうとは覚悟していましたが、彼の口からはっきりと和葉が『人魚』だと知っているかと告げられては、もうここにいる事は出来ません。

今の和葉に残されているのは、異端者として捕えられるか海の王の娘としての誇りを護るかの2つに1つです。

「和葉」

平次との距離は、ほんの数歩です。

ここで身を翻して走ったとしても、崖に辿り着く前に捕まってしまうでしょう。

だからと言って、罪人として扱われるなど、和葉の誇りが許しません。

小さく息を飲み込んで、和葉は手首を返して刃を自らの胸に向けました。

「この、アホ!!」

平次が、和葉の手首を掴んで捻り上げました。

手首を掴まれた力の強さと痛みに、和葉の顔が歪みます。

冷たく光る刃は和葉の白い肌を浅く傷つけ、一筋の血が夜着の襟元のレースに染み込みました。

「自分を殺すくらいなら、オレを殺せ! この短剣はオマエを殺すためやなくて、オマエを生かすためのモンやろ? せやったら、その通りに使え!」

短剣を握ったままの和葉の手を、平次は自分に刃先を向けるようにして押えました。

そのまま引き寄せようとする力に逆らうように、和葉の手から力が抜けて、短剣が滑り落ちました。

和葉の血の気の引いた青白い頬を、波の雫のような涙が伝います。

あの嵐の日に初めて見た時から、和葉は平次に恋をしていました。その恋のために、国も家族も友達も声すらも捨てて人間の世界に來た事を、悔いてはいません。

ただ一言『愛している』と告げられたなら、泡となって消えてもいいとさえ思っているのです。

平次の命を奪い、この恋を自ら砕いてまで、海に帰って生き長らえようなどとは微塵も思っていないません。

けれど、和葉の唇からは微かな音すら零れてはくれません。

声を失ってもう半年以上が過ぎましたが、今ほどそれが辛いと思った事はありませんでした。

手首を掴む力は緩められて、もう痛みなどありません。

けれど、心は引き千切られるように痛みます。

はらはらと和葉の頬を伝っていた涙が、いつしか1つ、また1つと、美しい結晶となって岩場に散っています。

それは人間の世界では見た事もないような、涙のベールを纏ったように薄青く輝く真珠でした。

「オマエはオレの客人や。城のモンは誰もオマエを嫌っとらんし、オレもオマエを縛りつけようとは思っとらん。オマエは今まで通りに、自由なお姫様やっとなればええんや」

平次が、ゆっくりと言い聞かせるように語ります。

それは、今はまだ城にいてもいいという許可でしたが、もしかしたら審判の日が少し延びただけの事かもしれないません。

それでも、あと少しだけでもこの恋を持っていられる事に、1つでも多くの思い出をこの恋に添えられる事に、和葉は感謝しました。

涙はまだ和葉の頬を濡らしていましたが、もう真珠にはなりませんでした。

「とにかく、部屋に戻るで。足も傷だらけやろ。まずは手当てや」

裸足のままの和葉に、岩場を歩かせるわけにはいきません。
軽々と和葉を抱き上げると、平次は崖に背を向けました。

「コナン、オマエも戻れ。日が沈んだら、足元も見えなくなるで」
「うん。すぐに行くよ」

平次の声に子供らしく返すと、コナンは岩場に落ちた短剣を拾い上げました。

その傍には、幾つもの真珠が散っています。

「人魚の涙って、真珠になるのか……」

青いベールを纏った真珠を1つ1つ拾いながら、コナンが呟きました。

コナンの小さな掌には、10粒程の真珠が載せられています。

「あ……」

コナンの手から、真珠が1粒零れ落ちました。

真珠は岩を跳ね、夕暮れの光を浴びながら海へと落ちて行きます。

太陽の光がその力を失い、月と星とが天空の座を支配する夜がすぐそこまで迫っていました。

第21話『真珠の涙・6』

和葉の手当てと世話を乳母に任せて居間に戻った平次は、軽い夕食を済ませると侍女たちを全て下がらせて大きな窓を開け放ちました。冬の近い冷たい風が、部屋の温かい空気を追い払うように吹き込みます。

「イヤな天気やな……」

窓の向こう、遠く広がる空と海を見ながら、平次がため息混じりに呟きました。

良く晴れた空には星と月が輝いていますが、海は暗くごうごうと不気味な音を響かせています。

「これ、渡しとく」

コナンが差し出したのは、和葉が持っていたあの短剣でした。その短剣を受け取って、平次はまたため息を零しました。

園子と名乗ったあの人魚は、和葉にこの短剣を使うようにと促していました。

あの崖で、和葉は自らに刃を向けましたが、それがあの人魚の言った意味ではない事はわかります。

それならば、どう使うものだったのか。

三度ため息を落として、平次は庭へと降りました。

「どこ行くんのだ？」

「散歩」

後を追ってきたコナンに適当に返すと、平次は海へと続く階段へと向かいました。

別に、何処に行きたいという強い意志があったわけではありません。ただ、不意に和葉と初めて会ったあの場所に行ってみたいと思ったのです。

足元を照らす僅かな灯りしかない暗い階段を危なげなく下りていく平次の後を追って、コナンもゆつくりと階段を下りました。

「……ここにな、和葉がおったんや」

ぽつりと呟いて、平次は海の中へと続く階段を見下ろしました。隣に立ったコナンも、その視線を追うように海へと目を向けます。

あの朝、何気なく散歩をしていて、ここにいた和葉を見つけました。海で事故にあって流された哀れな娘を見捨てる事など出来ず、身元がわかるまではと客人として城に迎え入れましたが、和葉が伝説にしか残っていない人魚かもしれないと気付いたのは、それからすぐの事でした。

それでも、和葉と過ごす時間は今までになく楽しいものでしたので、彼女が帰りがたがる素振りを見せないのを言い訳にして詳しく身元を探るような事はしませんでした。

平次が和葉への恋心を自覚してからさほど時はたっていないかもしれませんが、もしかしたら、最初に会った時から彼女に恋をしていたのかもしれない。

「海と陸は、やっぱり違いすぎるやんなあ……」

平次がどこか諦めたように呟いた時、階段のすぐ近くで波が割れ、

1人の人魚が姿を現しました。

「あんたたち、和葉ちゃんに何をしたの？」

怒りを含んだ鋭い声を投げつけてきたのは、園子と名乗ったあの人魚でした。

「魚たちがこれをお届けしてくれたの」

そう言って、園子が右手を差し出しました。

滑らかな白い掌に載せられているのは、あの崖で和葉が流した真珠の涙の1粒でした。

「客人として扱うって言ってたよね？それなのにこんな涙流させるなんて、一体和葉ちゃんに何をしたの！？普通の涙ならともかく、真珠の涙の1粒には1年の命がこもってるのよ！あんたたち、一体何をやって和葉ちゃんに命を削るような泣き方させたの！？」

園子の詰問に、平次もコナンも何一つ答えられません。

自分たちの言葉や態度の何が和葉をそこまで追い詰めたのかはわかりませんが、今までに色々な兆候はあった筈なのにあんなに哀しい泣き方をするまで彼女が苦しんでいた事に気付かなかったのは、確かに自分たちの落ち度なのだと理解しているのです。

「その短剣、まだ使ってなかったのね」

園子の言葉に、平次は手にしていた短剣を彼女に差し出しました。

「これは何のためのモンや？どうやって使ったらええ？」

「それは、和葉ちゃんが海の王国に帰るために創られたものよ。で

もね、あんたたちやわたしが決められるものじゃないの。和葉ちゃんが気持ちを決めて使わないと意味がないのよ」

平次にきつい視線を投げた園子は、ふと顔を曇らせてため息をつきました。

「わたしはね、和葉ちゃんが幸せになるんなら、海だろうが陸だろうがどこでもいいと思ってたのよ。たとえ死ぬような事になったとしても、和葉ちゃんがそれで納得してるならいいって。だからこそ、海の魔女へ相談するようにも薦めたし、彼女からその短剣も貰ってきたわ。なのに……」

眉を寄せてきゅっと唇を噛み締めた園子に、コナンが何かを包んだ白いハンカチをそっと差し出しました。

「これ……」

「なに？」

園子が差し出されたハンカチを受け取って開くと、そこには10粒ほどの真珠へと形を変えた和葉の涙がありました。

「……パパがね、酷く怒ってるの。国を捨てて勝手に出て行った娘だけど、真珠の涙を流すほどの仕打ちを受けているなら放ってはおけないって。あの音、聞こえるでしょ？ アネキたちが宥めてるけど、いつパパがこの土地を沈めるって言い出すかわかんないわ」

園子が、遠く沖を見やります。

不気味にごうごうと鳴り続ける海は、その全てを治める王の怒りの声そのものでした。

第22話『真珠の涙・7』

長い沈黙が落ちました。

平次もコナンも園子も、何をどう話したらいいのかわからないまま、ただ遠くごうごうと不気味に鳴り続ける海を見つめていました。

「……園子て言うたか？海の姫に訊きたい」

漸く平次が重い口を開いた時、遠く人声が聞えてきました。

園子が、ぱちゃんと海の中に身を隠します。

階段の上では、ゆらゆらと灯りがゆれていました。

「何や!？」

平次が声を張り上げるようにして問い掛けると、灯りが大きく揺らぎました。

けれど、降りてくる気配はありません。

「あの……」

波の音にかき消されそうなか細い女の声が、階段の上から落ちてきました。

日が落ちてからこの階段に近づく事は主である平次からきつく禁じられていますが、それでも暗い海は女には恐ろしいもの、ましてや不気味な海鳴りがしている今は足が竦んで動けないのでしよう。

「何があった!？そっからで構わん!」

王族に向かって上から声を掛けるなど、決してあってはならない事です。

けれど階段を降りる事も出来ずに迷っている侍女に、平次は応えを促しました。

「あの、乳母様が殿下を探しておいでです。今は姫様のお傍を離れるわけには参りませんので、失礼ながら殿下にご足労いただきたいと……」

「わかった！すぐに行く！」

恐ろしさに震える声で精一杯に役目を果たそうとする侍女に答えを返すと、平次はすぐに戻るから人魚を引き止めておいてくれとコナに頼んで、城への階段を駆け上がりました。

「和葉んトコやな？」

「はい」

階段の上で心細そうに控えていた侍女が暗い足元を照らすように灯りを掲げて先導しようとしたが、平次は必要ないとばかりに足早に城へと向かいました。

早朝からの出来事に疲れているだろう使用人たちに、平次は早く仕事を終わらせて休むようにと命じていましたので、まだ夜も早い時間ではありましたが城は人影も少なく半ば眠りについてるように見えました。和葉の部屋の周りだけがざわざわと落ち着きのない空気に包まれていました。

「殿下！」

部屋の入り口でまるで門番のように控えていた侍女が、平次の姿に

氣付いて駆け寄って来ました。

「何があったんや？」

「とにかく中へ。姫様にご乱心のご様子なのです」

予め取り決めをしてあったのでしよう、侍女がトントントンと3度のノックを2度繰り返すと、ちゃんと鍵の開く音がして扉が開けられました。

不安そうに控えている侍女たちを残して奥の部屋へと入った平次が見たものは、必死の面持ちで窓を護るように立つ侍女たちと、両手で耳を押えて乳母に抱き留められるように蹲っている和葉の姿でした。

「殿下！ 姫様が、また外にお出になられようとして……」

助けを求めるように見上げてくる乳母にわかったと言うように頷いて、平次は和葉の傍らに膝を付きました。

窓の外、ごうごうと響いてくる音は、人間の耳にはただの不気味な海鳴りとししか聞えませんが、園子と同じく和葉にはあれは父王の怒りの声だとわかるのでしよう。

許しも得ずに国を出たのに見捨てゐる事無く愛してくれている父王の心は和葉にとっては何となく嬉しいもののはずですが、その怒りが勝手な振る舞いをした自分にはなくこの国に向けられている事が申し訳なくて、けれど声を失っている今、その怒りを解く術も見つけられずただただ自分を責める事しか出来なくて混乱してしまっているのだと、平次には読み取れました。

「和葉、下に園子て人魚が来とる」

平次の口から告げられた姉姫の名前に、蹲っていた和葉が弾かれたように顔を上げました。

「オマエに言うておきたい事もあるしな、来い」

和葉の腕を引いて抱き上げると、平次は乳母たちに部屋で控えているように命じて海へと続く階段へと向かいました。

第23話『真珠の涙・8』

「もう大丈夫だよ」

平次の姿が階段から消えるのを確認して、コナンは海の中に隠れている園子に呼びかけました。

すうっと静かに波が割れて、心配そうに顔を曇らせた園子が半ば身を乗り上げるようにして海の中の階段に腰掛けます。

「ぱちゃん、と園子が尻尾で海水を跳ね上げました。」

「わたし、余計な事しちゃったのかな？ 会えないでいれば、恋なんていつか思い出になって他の幸せを探せたかもしれないのに……」

その言葉に、コナンの胸がちりっと痛みました。

波にのまれ死を覚悟したあの時、ただただ生きて蘭の元に帰りたくて、何も考えずに目の前に現れた海の魔女に縋りました。

生きて国に帰りつき、身分を偽りながらも蘭に再会出来た時、もうこれで『新一』ではなく『コナン』として生きていくのだと自分に言い聞かせましたが、どうしても彼女を諦める事は出来ませんでした。

そして、蘭が何の連絡も寄越さない『新一』を今も待っていると知っていたながら、元の姿に戻るアテもないままに彼女を騙し続けているのです。

もし新一が死んだと知らされたら、蘭はそれはそれは哀しむでしょうが、聡明で優しい彼女はいつか穏やかな幸福を得られるでしょう。その機会を奪っているのは、他でもないコナンと名乗っている新一自身でした。

沖では、未だごうごうと不気味な海鳴りが続いています。
園子がまた、ぱちゃんと海水を跳ね上げました。

「待たせたな」

すぐ傍から降って来た声に、コナンと園子が驚いたように振り返ります。

いつの間に戻ったのか、コナンのすぐ後ろには和葉を抱いた平次がいました。

「服部……」

コナンと園子が、跳ね上がった鼓動を静めるように揃って大きな息をつきました。

物思いに耽っていたせいでもあります、気配も足音も感じ取れなかったのです。

「和葉姫、連れてきたのか」

「ああ、ちよお話したい事があってな」

何かを心に決めたのでしょう、コナンより数段後ろ、弾ける波にも濡れる事のない場所に和葉を下ろすと、平次は園子に向き直りました。

その瞬間、和葉が海への階段を駆け下りました。

「和葉ちゃん！ダメっ！」

園子が叫ぶのと、平次が和葉の腕を掴むのが同時でした。

「おとなしゅうしとれ！」

平次に腕を引かれ、波に足をとられそうになりながらも、和葉は遠い海にいる父王に怒りを収めてくれるように叫びました。

何度も何度も、それこそ血を吐くような思いで叫びましたが、和葉の唇からはただ一言の音さえ零れてはくれません。

見かねたように、園子が声を張り上げました。

「和葉ちゃん！あんたもう人魚じゃないんだよ！？海に入っても、絶対にお城には行けないんだよ！？」

それでも止めようとしないう和葉に、園子はさっき平次から返された短剣を突きつけました。

「それとも、この短剣使うの！？」

月の光を浴びて白く輝く刃に、和葉の身体からふっと力が抜けました。

「この短剣、使うかどうかは和葉ちゃん次第だよ」

園子が、短剣の柄を和葉に差し出します。

平次が掴んでいた腕を放してくれましたが、和葉は差し出された短剣に手を伸ばそうとはしませんでした。

「パパはわたしたちみんな平等に愛してくれているけど、和葉ちゃん末っ子だしまだ決まった人もいないから、余計に心配してるの。だから、あんなに怒ってる。でもね、和葉ちゃんの気持ちが決まってるなら、パパはわたしやアネキたちで説得してあげるわ。パパだって、ちゃんとわかってくれるはずよ」

短剣を和葉の足元に置くと、園子は少し哀しそうな笑みを浮かべました。

「ねえ……」

そうっと声を上げたのは、コナンでした。

「あのね、ボクさっきお姫様のお部屋でこれ拾ったの。お姫様は、これが伝えたくてこの国に来たんでしょ？」

そう言うと、コナンは懐から取り出した小さな紙片を和葉の冷たくなった手に握らせました。

「何が言いたいんや、和葉？」

平次が静かに促しますが、まだ拙い文字で小さな紙片に綴った想いを伝える勇氣は、今の和葉には持てませんでした。

「まあ、ええわ」

ふうっと息をついて、平次は改めて園子に向き直りました。

「オレの声は、海の王に届くか？」

「届くはずよ。もし届かなかったら、わたしがパパに伝えるわ」

海の王の娘らしい誇りのある態度を示す園子に、平次は敬意を表するように一礼しました。

「ホンマは海の王国のしきたり通りに進めたりたかったんやけどな、そんな悠長な事は言ってられへんみたいやから、陸の流儀を通させ

てもらうで？」

「さっきわたしに訊きたかったのって、その事？」

「せや。陸ではな、本来なら最初に国王の親書持たせた使者を立てるんやけど、さすがに海ん中には行けんからそこは省略すんで？面倒な社交辞令や口上もすつ飛ばすわ」

そこまで言うと、平次は沖に向かって真剣な眼差しを向けました。

「海の王、聞いておられるか？貴国の末姫を、服部の後継ぎの正妃として迎えたい。海からの恩恵を受けている国として、姫には王に對するのと同じだけの敬意を払い、遇する事を約束する。姫が貴国へ戻る手立てはあると姉姫より聞き及んでおるゆえ、もし王と姫がこの申し出を拒まれるならば、姫はすぐにでもお手元にお返しする」

平次の声が届いたのか、あの不気味な海鳴りが僅かに小さくなりました。

「国や家が絡むと本人の承諾なん後回しになるんはしゃあないんやけどな」

「確かにね」

海の王の娘である園子には人間の世界でいう『国』はわかりませんが、結婚に際して想い人の両親や兄弟たちに先に認めてもらわなければならぬ事があるという話は度々耳にしています。

平次の呟きに苦笑するように返すと、園子は真意を確認するように彼の瞳を覗き込みました。

「本気よね？そのままパパに伝えていいのよね？」

「掛け値なしの本気や」

園子の問いに短く答えると、平次は階段に置かれた短剣を取り上げて和葉に握らせました。

「和葉、オマエは海の国へ帰りたいんか？せやったら、あの姫が言うようにこの短剣を使い。もしこのままこの国で暮らす気があるんなら、毛利との約束が終わるまで待っててくれ。選ぶんは、オマエや」

突然の事に心が追いつかないでいる和葉に、園子がじれったそうに尻尾で水面を叩きました。

「和葉ちゃん、返事！」

それでも動かない和葉の手を、コナンが両手でそつと握りました。

「お姫様、今ならこれ渡せるでしょ？」

コナンに促されて平次に手を差し出そうとした和葉が、まるで夢から覚めたようにはっと目を見開いてその手を引きました。

和葉の蒼白い頬に、さつと朱が上ります。

今、和葉の華奢な手に握られているのは、コナンから渡されたあの紙片です。

平次に宛てられたその紙片を渡すなら今がその時なのでしょうが、和葉は両手で隠すようにその紙片を握り締めたまま、ここが階段だという事も忘れて戸惑ったように後退りました。

「この、アホ！」

足を踏み外して海に落ちそうになった和葉を、平次が寸での所で抱きとめます。

和葉の手から真珠色に輝く短剣が滑り、小さな音を立てて海の中の階段に落ちました。

「コケる前にまず返事せえや」

呆れたような平次の声にも、和葉は頬を染めて俯いたままです。けれど、それが全ての答えになっていました。

その様子を見て、園子が楽しげな笑い声を上げました。

「パパの事は任せて！アネキたちと総がかりで説得してみせるわ！海の姫として相応しい、陸の王国の姫なんか絶対負けない嫁入り仕度してあげる！」

短剣を拾い上げると、園子は『この短剣は預かっておくから』と言い残して、楽しげな心のままに綺麗な弧を描くように跳ねて波間に消えました。

「……けどよ、本当にいいのか？」

小さくはなったけれどまだ止んではない海鳴りを追うように沖に目を向けたコナンが、子供らしからぬ重たい声を落としました。

「何がや？」

「服部王国は西の大国だ。その後継者の妃が、どこの王家の姫でもない娘だとなったら、他国に付け入る隙を与える事になりかねねえんじゃねえか？海の王国の姫君とはいっても、陸の人間はその王国の存在すら知らねえんだ。信じさせるのは困難だぜ？その前に、国王や重臣たちや民を納得させられるのか？」

「そんなコトか」

コナンの懸念を、平次は笑い飛ばしました。

王の妃というのは確かに、他国に対する血筋上での優越性や同盟関係を見せ付ける役割も持っているものですから、後継者たる王子の妃選びにはどの国も慎重になっています。

それなのに、国王はもとより重臣たちをも無視して妃を選べば、貴族たちや民から必ず不満が出るでしょう。

海の王国では聞いた事のない話でしたが、和葉にもコナンの言いたい事は何となくわかりました。

「事後承諾なるけど、オヤジやオカンとは別に何も言わんやろ。民にしてもな、服部の気風はそんなん気にもせんし、オレも妃くらいで何やかんや言われんくらい信頼は受けとるわ。まあ、重臣たちん中には煩いんもおるやろし、ぐだぐだ言うてくる国もあるやろけどな、そんなん実力で黙らせればええだけや。オレもそうおとなしい方やないから、売られたケンカはきっちり買うたる。勿論、手加減なしでな」

「……東にまで戦火を広げるなよ」

滅多に見せる事のない獰猛そうな笑みを浮かべる平次に、コナンもまた挑戦的な笑みを返しました。

その2人の間の空気に怯えたように、和葉の頬が青ざめました。

「心配いらんて。この服部にケンカ売れるんは、毛利と工藤くらいや」

「確かにな」

一転して明るく笑うと、平次は不安そうに見上げてくる和葉をまるで荷物でも運ぶかのようにあっさりと抱き上げて、階段を上ります。コナンがその後に続きました。

「身体が冷えたやろ？ 温かい茶でも飲もうや」

「賛成」

恋が実るかもしれないという喜びと新たに芽生えた不安と、2つの感情に挟まれて戸惑う和葉に、平次はもう一度『心配いらん』と笑いました。

第24話『虹色の鐘の音』

あの夜から、1週間が過ぎました。

ごうごうと低く唸るような海鳴りは毎に弱くなり、今朝にはすっかり治まっていました。

「お姫様、寒くない？もうお城に戻ろうよ。風邪引いちゃうよ？」

海へと続く階段で波と戯れている和葉の後ろから、幼い声が掛けられました。

振り向くと、小さな身体には大きすぎるマントを抱えたコナンが、ふわふわの毛皮の向こうから顔を覗かせていました。

冬にはまだ少し間がありますが、海からの風はまるで氷を撫でてきたかのような冷たさを持っています。

それなのに薄い部屋着だけで外に出た和葉を心配して、コナンは温かなマントを持って追い掛けて来てくれたのです。

その優しい心遣いがありがとうと笑みを返してマントを受け取ると、和葉は集まっていた小さな魚たちにまた後でねと言うように小さく手を振って、コナンを促すように階段の上を指差しました。

「姫様！まあ、お怪我が治ったと思ったらまた裸足でお出かけになって！さ、おみ足をお出し下さいませ！」

城に戻った和葉を待っていたのは、乳母のお小言でした。

岩場に傷つけられた足はもうすっかり治り、薄く残っている痕も殆ど消えかけています。

和葉はもう大丈夫だと身振りで伝えましたが、乳母は幼い子供を叱る母親のように腰に手を当てて難しい顔を見ると、彼女を椅子に座らせました。

「コナン様もご心配下さったんですよ？ 殿下がお留守で退屈なのはわかりますが、医師殿からお許しが出るまではお部屋でお遊びになって下さいませ」

お小言を続けながら、乳母は足を痛めた和葉のために作られた、柔らかな布を何枚も重ねて綿を敷いた踵の低い靴を彼女に履かせました。

この1週間というものの、平次は父王の呼び出しを受けて1日の大半を本宮で過ごしています。

コナンという客人が滞在中だとわかった上での呼び出しですから、何か国政に係わる重大な出来事でも起きたのではないかと心配していました。漏れ聞こえて来る噂話ではどうやら毛利王国の姫君との縁談に関して半年も経ったのに進展がないのなら、他国から何人も公式な使者が自国の王の親書を携えて縁談を持ちかけているという事でした。

国の事を考えるなら、服部と毛利との間で縁談を纏め、国王として後継ぎである平次に毛利の姫を正妃とするように、蘭には服部王国へ嫁ぐようにと命じれば済む事でした。

けれど、出来る事ならこの平和な時代にあっては政略とは関係なく本人たちの望むようにしてやりたいという親心から、両国の王は縁談を持ちかけはしましたが、口を挟む事無く見守っていたのです。ですから、今までは他国からの申し出も国王が全てやりわりと断っていたのですが、使者たちがそれで納得するわけもなく、また煮え切らない息子の態度にも業を煮やして、連日の呼び出しになったようでした。

『蘭ちゃん、大丈夫やろか？』

乳母が下がるのを待って、和葉がコナンに尋ねました。

文字を覚えた和葉のために、城の色々な所に紙とペンが用意されています。

まだ滑らかにとはいきませんが、あの紙片に綴った文字からは見違えるほどに上達した女性らしい柔らかな文字は、コナンには和葉の不安が移ったかのように弱弱しく見えました。

「大丈夫だよ、きっと。だって、東の大国の毛利王国のただ一人のお姫様をお妃様に下さいなんて言える国は、服部王国と工藤王国しかないもん。服部王国の王子様との縁談が消えない限り、毛利王国のお姫様に求婚するような国は出てこないよ」

『せやったら、ええんやけど……』

まだ子供とはいえ、蘭が信頼を置いているコナンの答えに少しだけ安心した和葉は、ここ数日考えていた事を訊いてみる事にしました。

『なあ、コナンくん』

「なに？」

『コナンくん、前に工藤王国の王子様の居るところ知つとるて言うてたやんな？ お国に帰るには『海の魔女』に会わなならんて』

「……うん」

『コナンくん、アタシに訊きたい事あるんやろ？ ずっとそんな顔しとったよ？』

「でも……」

『蘭ちゃんのためやろ？ もうアタシが人魚やて知られてしもたんやし、何でも訊いてくれてええよ？』

そこまで書いて、和葉は小さな絵筆に含ませたインクで文字を塗り潰しました。

和葉が人魚だと言う事は、今はまだ平次とコナンしか知りません。乳母を含め使用人たちは、たとえ居間であろうと許可なく入って来る事はありませんが、文字はいつ誰に見られるかもわかりませんので、見られては困る大事な事を書いた時にはすぐにインクで塗り潰してしまおうように、日頃から平次に言われているのです。

「あのね……」

暫く考え込んでいたコナンが口を開いた時、誰かが窓を叩く音がしました。振り返って見ると、そこには1羽の大きな鴬が合図をするように羽を広げていました。

「鴬……？」

海の傍に棲む鴬がこの近くにすることは珍しくありませんが、人間が暮らしている城にまで降りてくる事はありません。

コナンが不思議に思っただけで見ていると、鴬は一声鳴いて沖の仲間の下へと飛び立っていきました。

「何だろうね？」

首を傾げているコナンの前に、和葉が新しい紙を差し出しました。

『姉さまからのお使いやよ。日が沈んだら、いつもの所に皆で来て欲しい』

コナンが読んだ事を確認して、和葉はまた筆で文字を塗り潰しました。

第25話『虹色の鐘の音・2』

平次が本宮から戻ったのは、日も傾きかけた夕刻の事でした。

よほど疲れたのでしょうか、まるで倒れこむようにソファに身体を投げ出した平次に、コナンが熱いお茶を差し出しました。

お茶の仕度は本来なら使用人の仕事で間違っても客人のする事ではありませんが、平次の今の苦労は全て蘭のためでしたので、コナンからのせめてもの感謝の気持ちでした。

一言礼を言って、平次は熱いお茶を口に運びました。

「大変そうだな」

「誰のせいやねん」

「その辺は感謝してるって」

蘭が今、他国からの雑音に悩まされずにいられるのも、平次が防波堤になってくれているおかげです。

それは充分にわかっていますし感謝していますので、コナンは『工藤王国の王子』の顔で素直に頭を下げました。

和葉は、あの後すぐに戻って来た乳母に自室へと連れて行かれてしまいましたので、ここには平次とコナンしかいませんから子供のフリをしなくてもいいのです。

「そう言えば、オマエ『人魚』探しとったよな？」

「ああ、その事だけど……」

平次の問いに、コナンは昼間の出来事を話しました。

『鵜と話が出来る』など普通なら信じられませんかし笑われるでしょうが、和葉がそんな嘘をつくはずありませんし、彼女だけではなく平次やコナンにも来て欲しいという事は、きっと何か大切な用事

があるのだと思われました。

隣室に控えている侍女を呼んですぐに夕食の支度をするように命じると、平次はその席で和葉とコナンを散歩に誘いました。

和葉が足に怪我をしたあの夜以来、侍女たちはまた何かあってはいけないと今までに増して気を配っていますから、日が落ちてから庭に出れば心配して傍を離れようとはしないでしょう。

けれど、平次が誘っての事なら、侍女たちも主人の意を汲んで付き添う事を控えます。

コナンや和葉が言い出した事なら引き止めるだろう乳母も、諦めたように『冷たい夜風はお身体に障りますのに』とため息をつくだけでした。

夕食が終わった時、日はすっかり沈んでいました。

夜の海は、まるで夜空と沖で繋がっているかのように暗く、碎ける波だけが銀色に輝いています。

その波が静かに割れて、園子が顔を出しました。

「お待ちせ。みんなお揃いね」

海へと続く階段に和葉たちの姿を見つけると、園子は面白そうな笑みを見せました。

「随分とお疲れのようね、王子様？」

「まあ、色々あってな。それより、姫も疲れとるんとかうか？ 覇気が足りんで？」

「まあ、色々あってね。でも、パパは説得したわよ。パパはまだまだ娘を陸の人間に嫁がせるのは不満みたいだけど、その辺はアネキたちが宥めてるわ」

そう言うと、園子は大きなため息をついて海の中の階段に寝そべる

ように身体を投げ出しました。

「海の王は海の上に姿を現してはいけないうて掟があるから、パパの気持ちもわからなくはないんだけどさ、だからって様子をみる事すら出来なくなるわけじゃないのに、もう本当わたしたち娘の事になると頑固なんだから」

呆れたような口ぶりですが、そんな父王を園子がとても慕って頼りにしている事がわかりました。

「ねえ、お姫様」

本当にこの1週間というものの父王の説得に苦勞していたのでしょう、放っておけばどこまでも続いてしまいそうな園子の話を、コナンが遮りました。

「何？」

「ボクたちを呼ばれたのは、何かご用事があるんでしょ？」

「あ、そうそう、忘れる所だった」

コナンの問い掛けに、園子が慌てて腰に下げていた海草で編んだ袋から小さな箱と虹色に輝く2つの巻貝を取り出しました。

「これをね、届けに来たのよ。はい、これは王子様とガキンチョの分。海の王国とこの国との橋渡しはわたしがする事になったから、何か用があったらこれに向ってわたしの名前を呼んでから海に入れて。次の夜にここに来るわ。ガキンチョはこの国の人じゃないけど、和葉ちゃんのお友達として特別ね。でも、あんまり頻繁に使わないでよ？」

「おおきに」

「ありがとう」

貝を受け取って礼を言う平次とコナンに、大したことじゃないわよとひらひらと手を振ると、園子は和葉を手招きました。

「それから、和葉ちゃんにはこれ。海の魔女から預かって来たんだけど、和葉ちゃんへのお祝いだって」

園子が差し出したのは、紅色の珊瑚で作られた小箱でした。

受け取った和葉がそっと蓋を開けると、中には薄蒼いベールを纏った真珠が1粒入っていました。

「それ、和葉ちゃんの涙が元になってるのよ。滅多に手に入らない人魚の涙を貰えたからって、古い記録を探して作ってくれたの。その真珠を左手で握って心の中で自分が一番望む事を強く願ってから飲み込むとね、死者を生き返らせるとか誰かを殺すとか他人の生命に関する事以外なら、どんな願いでも叶うんですって。勿論、和葉ちゃんが彼女に支払った声はそのまま、元と同じ声を取り戻す事だって出来るって言ってたわ」

和葉の声は、足を得る代償として海の魔女の志保に支払ったものです。

もう決して取り戻せないと思っていたその声を再び得られる事に、和葉の瞳が輝きました。

声を取り戻せば、平次に自分の声で気持ちを伝える事が出来るのです。

けれど、その喜びはすぐに雲ってしまいました。

「どうしたの？」

すぐにでもその真珠を使うだろうと思っていた園子が、急に顔を曇らせた和葉の様子に不思議そうに首を傾げました。

和葉が迷ったようにコナンを見ると、次いで平次を見上げました。その瞳を受け止めて、平次が園子の傍らに跪きました。

「和葉への祝いの品、オレからも礼を言う。よろしく伝えてくれ」
「わかったわ」

「それから、これは質問や。この真珠は、和葉以外の人間が使うても効果はあるんか？」

「和葉ちゃんが、心からその人に使ってもらいたいって思えばOKよ」

「そんなら、依頼したならもう1つ作ってもらう事は可能か？」

「何考えてるのか知らないけど、それはちよつと強欲じゃない？」

「無礼は承知の上やし、謝礼も払う」

不機嫌そうに眉を顰める園子に、平次は深々と頭を下げました。

その真剣な様子に何かを感じたのか、園子はきつくなっていた視線を緩めました。

「……それはどうかしらね。今も言ったけど、その元になってるのは人魚の涙よ。海の魔女の志保には色々お世話になってるお礼に半分渡したから多分まだ残ってるだろうけど、彼女ってば珍しいものが手に入ったからって研究に夢中だし、元々自分の興味のない事はしたがない人だから、多分無理でしょうね」

「……無理言うてスマンかったな」

「いいわよ、別に。本当は和葉ちゃんが言いたかったらしいし」

平次の隣に膝をついて不安そうに自分を見つめている和葉に笑いかけると、園子は2人の後ろで物問いたげに立っているコナンに手を振りました。

「そのガキンチョ！わたしに何か訊きたい事があるみたいだけど、
パパが呼んでるからまた今度ね！」

「あ……」

園子の言葉通り、遠くから小さな海鳴りが聞え始めています。

引き止めようとしたコナンの声を打ち消すように波を跳ね上げて、

園子は海の中に姿を消しました。

第26話『虹色の鐘の音・3』

お茶の仕度をしていた乳母が下がるのを確認して、和葉はほっと息をつきました。

城に戻ってすぐに平次は人払いを命じたので、居間には和葉と平次とコナンの3人しかいません。

袖に隠すようにして持っていた珊瑚の小箱をテーブルに置くと、和葉はそうつと蓋を開きました。

紅色の珊瑚の小箱の中に収まっている、どんな願いでも叶えるという薄蒼いパールを纏った真珠。

これを使えば、和葉が失った声を取り戻す事が出来ます。

平次に恋をして海の魔女を訪ねた時、和葉は人間と同じ足を得られるなら声を失ってもかまわないと思いました。

運良く平次に拾われ城に住む事も許されて傍近くで暮らす事も出来ましたので、足を得る代償として声を支払った事は決して大きすぎるものではありませんでした。

けれど、声を失ったがゆえの辛さや切なさも知りました。

自分の声で話す事が出来ればどんなにいいかと哀しくなった事も、何度となくあります。

ですから、もしこの真珠を使って声を取り戻せるなら、それは和葉にとってとても嬉しい事です。

ただ、姉姫の言葉が和葉に真珠を使うことを躊躇わせていました。

この真珠は、和葉が心から願って贈れば、その人の望みを叶える事が出来ます。

それは、工藤王国の王子の帰りをずっと待ち続けている蘭の願いも叶えられると言う事です。

「和葉、それはオマエの為に作られたモンや。せやから、自分の為に使え。それが、作ってくれた人にとっても嬉しい事のハズやで？」

真珠を見つめたままお茶に手を伸ばそうともせずに考え込んでいる和葉に、平次が話し掛けました。

「毛利王国の姫の事を気にかけてるんやろけどな、工藤王国の王子が帰って来るための手掛かりは、オマエの姉姫から貰う事も出来るやろ。幸い、コナンは王子の居場所を知っとるしな。後は工藤王国の王子が自分でやるべき事や。オマエが得るハズの幸運を奪う権利は、誰にもないで？」

平次の言葉に、コナンも複雑な表情で頷きました。

本心を言えば、和葉の優しさに縋ってでも真珠を手に入れたいと思いましたが、今の状況は『工藤王国の王子である新一』自らが選んだ事ですから、そんな身勝手な事は言えません。

それに、『海の魔女』の手掛かりはすぐそこにあるのですから、毛利王国の姫に『工藤王国の王子』として会うための努力は、コナンがするべきものでした。

「オマエ、ホンマは喋れたんやな。オマエがどんな声でどんな風に話すんか、聞いてみたいわ」

和葉を促すように、平次が真珠を彼女の手に乗せました。

薄蒼いパールを纏った小さな真珠が、和葉の白い掌の上で部屋の明かりを柔らかく反射します。

この機会を逃したらもう二度と声を取り戻す事は出来ないかもしれないかもしれませんが、それは最初から覚悟していた事です。

平次は、和葉が喋れない事も人魚である事もわかった上で、妃として迎えたいと言ってくれました。

叶う事はないかもしれないと諦めかけた恋が、叶おうとしているのです。

それは、和葉にとっては充分すぎる幸福でした。

心を落ち着けるように深く息をついて、和葉はペンを取りました。

『蘭ちゃんに渡したいんやけど、コナン君、届けてくれる?』

「え?……でも…」

『もう一度喋れるようになったら嬉しいけど、やっぱり蘭ちゃんが心配やし……』

「でも、これはお姫様にとって作ってくれたんだよ?」

『志保さんも姉さまもわかってくれるハズやし、アタシはもう充分に幸福やから、蘭ちゃんにも早く幸福になって貰いたいんよ』

「それは、自分の声と引き換えても惜しくないくらいにか?」

平次の問いに、和葉はずっと伏せていた顔を上げて彼を見つめると、またペンを走らせました。

『口も利けないオンナを妃にやなんて、平次には本当に申し訳ないと思うけど、あの時に蘭ちゃんはあと1年しか待てないて言うてたやん? このまま待ったたらちゃんと帰って来てくれるてわかってるんならええけど、あと半年しか残ってないのに間に合うかどうかわからんやろ?』

「それは『工藤王国の王子』が努力するべき事やろ?」

『そうかもしれへんけど、この真珠で願いを叶える事が出来るんやったら、蘭ちゃんの願いを叶えてあげたい』

そこで一旦ペンを止めた和葉が、恥ずかしげに小さな文字で続けま

した。

『それに、平次が文字を覚えてくれたから、話したい事はちゃんと伝えられるから……』

ペンを置くと、和葉は朱に染まった頬もそのままに、あの夜以来ドレスの下でずっと身につけていたペンダントを取り出しました。

美しい薔薇模様のペンダントヘッドはロケットになっていて、多くの人は恋人や家族の細密画や大切な人の形見を入れてひっそりと身につけています。

和葉は、そのペンダントヘッドに大切にしまっていた小さく折り畳んだ紙片を、そっと平次に差し出しました。

幾重にも折り目のついた紙にまだ覚えてたの拙い文字で綴られた、幼いけれど素直な愛の言葉。

ほんの短い文に込められた和葉の気持ちが真っ直ぐに心に届いて、平次の瞳に優しい色が広がりました。

「毛利のお姫様に譲って、後悔しない？」

おずおずと問い掛けるコナンに、和葉ははっきりと頷きました。

「せやったら、オレからも一筆添えたるわ。コナン、オマエちゃんと説明出来るな？」

毛利王国の姫である蘭の願いは、工藤王国の王子である新一が帰って来る事です。

姿形や名前は違っていますが、コナンは新一ですから、その願いはある意味では既に叶っています。

ですから、蘭が望むように、そしてコナンが望むように願いを叶え

る為には、ただ帰国を願うだけでは不足がありました。

平次からコナンへの問いには、それらを蘭に納得させて本当に望む通りの結果を得られるように出来るだろうと言う、強い念押しが含まれていました。

それは、もし望んだような結果が得られなければ、蘭だけではなく和葉の心をも傷つける事になってしまうからです。

「大丈夫、ちゃんと出来るよ」

子供のような口調で、けれど工藤王国の王子の顔で、コナンはしっかりと頷きました。

コナンが和葉から預かった真珠を携えて毛利王国への帰途についてのは、それから3日後の事でした。

第27話『虹色の鐘の音・4』

コナンが帰国して1月が経とうとする頃、工藤王国から各国に向けて王の親書を携えた使者が立てられました。

使者は勿論、服部王国にも訪問しましたが、特に重要な国と位置付けているのを示すように、工藤王国の重臣の中でも最も位の高い人物が向けられました。

金糸銀糸で縫い取りのされた豪華な衣装を纏い幾人もの従者を引き連れた使者が携えてきた親書は、外遊していた工藤王国の王子の帰国の知らせとそれを祝う宴への参列を請うもので、服部王国に対しては特に王子と客人として滞在中の姫を賓客として迎えたい旨が記されていました。

「これでやっと肩の荷が降りるわ」

父王からの伝言と共に渡された親書を読んで、平次は大きくため息をつきました。

コナンが帰国してからというもの、平次は彼のこの3年間の不在を矛盾無く説明するための証拠作りや工藤王国の王子としての帰国の段取りや手配をするために腐心し、極秘に協力してきたのです。

『蘭ちゃんの方はどうするん？』

蘭と平次の縁談は、本人たちの意思は別にしてまだ対外的には破談となっていないません。

親書に書かれた難しい言葉は和葉にはまだよく読めませんが、毛利王国との関係については何も書かれていませので、蘭と平次が揃って出席して親しげに会話でもしたなら、他国からの参列者たちに

この縁談が順調に進んでいるのだと印象付けてしまおうでしょう。そうやってからの破談では不快な噂が流れかねませんし、姫である蘭には疵ともなってしまうかもしれません。

不安そうな和葉の問いは当然のものでしたが、平次は心配いらないと笑って見せました。

「その辺は工藤と打ち合わせとる。この宴には大抵の国が参列するやろから、面倒事は纏めて片付けたるわ。まずはオヤジからやな」

そう言うと、平次は本宮へと和葉を連れて行きました。

聡明で知られている王と王妃は息子の様子から何かを読み取っていたのでしよう、深く説明を求める事もなく毛利王国との縁談の破棄を了承しました。

そればかりではなく、『海の王国』などという物語のような話を軽んじるような事もなく、また陸の王国では何の後ろ盾もない和葉を妃として迎え入れる事も快く受け入れてくれました。

それは、重臣たちも同様でした。

会議の席で国王と王子から説明を受けた時には異を唱える者もおりましたが、それもほんの僅かの間だけで、平次が和葉を連れて工藤王国に向かって出立する頃にはその声はすっかり消えていました。

内陸に位置する工藤王国へは、馬車での旅になります。

従者や侍女を幾人も従え多くの祝いの品や荷物を載せた馬車を連ねた陣容は、西の大国として相応しい重厚な中にも華やかさを持ったものでしたが、その気質のように身軽く順調に進んでいきます。

和葉の不安を一掃してしまうような服部王国の人たちの懐の深さに感謝する間もない程の、あまりにもめまぐるしい展開に呆然としているうちに、工藤王国への到着の日を迎えていました。

「工藤んトコの宴で毛利との事も全部カタつけるからな、恐らくオマエが話題の中心になるやろ。せやけど、オレか工藤か毛利の姫が必ず傍でフォローするから、心配いらん。オマエは陸のどの王国も足元にも及ばんような大国の姫なんや、今度の宴でオマエが頭下げなならん相手は工藤の国王夫妻くらいやから、他の連中が挨拶してきても膝を折る必要なんないし、何言ってこようと笑って受け流しとればええ」

平次の助言に緊張した面持ちで頷いて、和葉は馬車の窓から工藤王国の城を見遣りました。

陸の王国のしきたりはきちんと覚えてはいますが、それでも和葉にとっては服部王国や毛利王国以外の多くの国の王族や貴族たちが集う宴に出席するのは不安です。

「毛利の姫にくっついとれ。教養高いて評判な姫やからな、わからん事があつたら彼女の真似しとればええ」

和葉の緊張を解くように軽く笑うと、平次は緩めていた襟を直しました。

王宮の門番が、服部王国からの客人の到着を高らかに告げました。

第28話『虹色の鐘の音・5』

服部王国よりも北に近い内陸にある工藤王国は、もう冬が来ていました。

「雪が珍しいんか？」

王宮の中でも最も奥に近い、国賓として迎えた貴人の中でも最も重要な方が滞在するための部屋のテラスで飽かずに景色を眺めている和葉に、平次が声を掛けました。

王宮から見える山々はうっすらと雪化粧をしていて、吹き降りて来る風は氷のような冷たさを含んでいます。

時折、その風に乗って雪の欠片が王宮まで届いていました。

北の海には氷も雪もありましたが、和葉はまだ見た事がありませんでしたので、初めて見る雪に興味深そうにそうっと手を伸ばしてはその欠片を追っていました。

「見てるのは構わんけどな、何か羽織れ」

海に暮らす人魚の和葉は、水に濡れる事を厭いません。

いえ、水は和葉にとっては慣れ親しんだもので、遮るものではないのです。

ですから、和葉は雨の時でもそのまま外出してしまいますし、寒さもあまり気にしません。

けれど、海の世界ならそれでも良かったのですが、陸では雨に濡れたままでは病気になってしまいます。

乳母に根気良く諭されて雨に当たる事はなくなった和葉でしたが、未だに寒さはあまり気にしないばかりか、息が白くなる様子を楽しんでるふしがありました。

和葉にしてみれば高い襟や長い袖の厚手の織物で作られたドレスで充分だと思うのですが、それでも平次に促されて柔らかな毛皮の縁取りのされた暖かなマントを羽織りました。

「殿下、工藤王国の王子殿下からお手紙でございます」

和葉に付き従ってきた乳母が、銀の盆に白い封筒を載せて平次に差し出しました。

青い封蝋に押された印は、確かに工藤王国の王家のものでした。さっと目を通した平次は、すぐに返事をしたためて乳母に渡しました。

「工藤が毛利の姫とコッチに来る言うところから、部屋に戻つとれ」

すぐ傍で待っていたのでしよう、平次が和葉を呼び戻した時、乳母が恭しく扉を開けました。

「元氣そうやないか」

「ああ、おかげさまでな」

型通りの挨拶の後、和葉からマントを預かった乳母と工藤王国の王子に従ってきた侍女を下がらせると、平次と新一は長年の友人のようになに砕けた口調で話し始めました。

その様子に、和葉は不思議そうに首を傾げました。

平次と楽しげに話している工藤王国の王子の顔に、見覚えがある気がしたのです。

「今はオメーの顔見に来たワケじゃねえしな」

話が一段落すると、新一はそう言って平次の後ろに隠れるようにし

ている和葉に向かって深々と頭を下げました。

「お初にお目にかかります、和葉姫。工藤王国の王子、新一です。以後、お見知りおきを」

王子としての最上級の礼に戸惑いながらも、和葉も優雅に膝を降りました。

「ああ、コナンと似てるでしょう？母方の遠縁なんですけど、何故か兄弟みたいに似てるんですよ」

和葉の不思議そうな様子に、新一はそう答えました。

コナンと新一にはもっと近いものを感じた和葉でしたが、平次が何も言いませんでしたので、深く考える事はやめました。

和葉自身も、何も語る事無く受け入れてもらったのです。

「和葉ちゃん！」

工藤王国の王宮内だからと新一の後ろに控えていた蘭が、感極まったように和葉に抱きつきました。

「和葉ちゃん、ありがとう」

コナンに真珠を託して暫くすると、和葉と平次の元に蘭からの厚い手紙が届きました。

そこには、ずっと待ち続けた工藤王国の王子の帰還と、その報せを受けた事への喜びと、平次の今までの協力に対する感謝と、あの真珠を譲ってくれた和葉に対する謝罪と感謝が綴られていました。

その手紙を読んだ時、文字からも伝わる蘭の嬉しそうな様子に、和葉もとても嬉しくなりました。

「本当にありがとう」

あの手紙だけでは足りないと思ったのでしよう、蘭は感謝の言葉を繰り返します。

和葉から贈られた真珠と手紙、それに添えられた平次の手紙やコナンの話を聞いても、蘭は最初のうちは半信半疑でした。

けれど、一縷の望みをかけて真珠に願うと、それまで一度たりと連絡のなかった新一から帰国の準備をしているとの報せが届き、一月としないうちに再会が叶ったのです。

蘭にも、真珠の効力は間違いのないものだわかりました。

そして、1つだけどうしても気掛かりな事が出来ました。

それは、本当ならばあの真珠を使って和葉が失った声を取り戻す事が出来たのだという事でした。

コナンからは、和葉は自分が話せるようになる事よりも蘭の願いが叶う事を望んでくれたのだと聞かされましたが、それはとても有難い事であると同時に、とても申し訳ない事だったからです。

何度も何度も感謝の言葉を繰り返す蘭に、和葉はもう充分だというように笑って見せました。

第29話『虹色の鐘の音・6』

大広間は無数の灯りが点され、色とりどりの芳しい花がまるで春に迷い込んだかのように華やかに飾られています。

その大広間に、侍従たちに案内されて各国の使者や王族たちが集っていました。

今夜の宴は工藤王国の王子の帰国を祝うためのものですが、国を代表して来た方たちの集まりですから、ある意味重要な外交の場でもあります。

その話題の中心は、工藤・毛利・服部という3大国の世継ぎたちと和葉でした。

特に和葉は、侍従長が服部王国や毛利王国の世継ぎに対するのと同じような最大級の敬意を持って丁重にもてなしている姫だというのは名前以外何もわかりませんので、広間のあちらこちらでは様々な噂が囁かれております。

中には、和葉が昨日の謁見の場にも現れず祝いの品すら持参しなかった事に触れて、服部王国が毛利王国の姫を妃として迎える事で工藤王国との折り合いが悪くなるのを避けるために、人質代わりの愛妾として差し出すつもりなのだろうと言う者すらいました。

服部王国には王族に連なる姫はおりませんので、今は既に飲み込まれ臣下となったかつての属国の姫を、王子がこの公式の場に行きさせる事で箔をつけさせようとしているのだらうと。

大きな戦が終わって随分たちますが、今でも同盟の証にと自国の姫を相手国の王族に嫁がせたり、場合によっては忠誠を表すために妾として献上するという習慣は、特に小国には残っていますので、こんな噂が出るのは仕方ない事でした。

それだけ、宴の前の謁見と祝いの品の披露は、自国の国力や親しさを表す大切な場なのです。

「壁に向かって話しとるアホや思て、無視しとればええ。視線もくれてやる必要ないわ」

「そうよ。鬱陶しいけどね、それも陛下たちがいらっしやるまでだから」

「アイツらのその後の豹変振りを楽しみにしとり」

直接和葉に話し掛けて探りを入れようとする者には平次と蘭が手馴れた風にさまざまに交わしていきませんが、漏れ聞えてくる噂や遠巻きに投げかけられる好奇の色を含んだ冷たい視線は避けようがありません。

まるで鋭い棘を持った茨の蔓に絡め取られたかのような痛みと居心地の悪さに思わず俯きそうになる和葉に、平次と蘭が雑談に紛れ込ませるようにしてそつと囁きました。

「朝になったら馬車を出してもらって、みんなで雪を見に行こうよ。すつごく綺麗な場所があるのよ」

「そらええな。工藤に案内させたら」

「雪玉遊びとかソリ遊びとかも出来るのよ。誰も来ない場所だから、思いつきはしゃげるの」

「毛利の姫言うたら、教養高く淑やかで当代一の美姫やて噂やったんに、とんだお転婆姫やな」

「あら、服部のお世継ぎは大変聡明で、お若いのに既に王としての威厳をお持ちだって噂なのに、こんな親しみやすい方だったなんて知ったら他国の姫君たちがびっくりするわよ」

平次と蘭が、和葉の気持ちを和ませようと楽しい計画を話してくれます。

その気遣いが嬉しくて、和葉が2人に恥かしくないようにこの場をつとめようと挫けそうになる心を抑えてすつと背筋を伸ばした時、

侍従長が高らかに国王の到来を告げました。

今まで話に花を咲かせていた招待客たちが一斉に居住まいを正して、広間の奥にある扉を見つめます。

工藤王国の国王が、王妃と王子を伴ってゆったりと玉座の前に立ちました。

「今日はよく集まって下さった」

王が豊かに広がる穏やかな声で広間に集まった各国の使者に礼を述べ、後継ぎである王子が挨拶と共に改めて礼を告げると、賢王と名高い国王は玉座を降り平次と和葉の前に進みました。

「良く来て下さった。服部王国には一方ならぬお力添えを頂き、感謝の言葉もない」

「このたびはおめでとうございます。微力ながらお力になれた事、嬉しく思っております」

工藤王国の国王が、服部王国の国王の名代である平次に特別に礼を尽くすのは儀礼上も当然の事でしたので、参列者たちは身分に応じた場所でその遣り取りを見守っています。

「ことに、貴国にご滞在中の海の姫には、それこそ言葉に尽くせない程のご協力を頂いた。心から感謝の言葉を述べたい。姫がいらっしゃらなければ、わが国は唯一人の王子を失っていたかもしれないのだ」

そう言葉を続けた王はそこで和葉に向き直ると、まるで臣下の者が王に対する時のように恭しく膝をつきました。

後ろに控えていた王妃と王子も、王に倣って膝をつきます。

大国の王が膝をつくなどというありえない光景に、広間にどよめき

が広がりました。

工藤王国の王を跪かせるほどの身分を持った者など、この世界にあるはずがないのです。

「姫のご厚意に報いるためならば、我が工藤王国はどのような努力をおしひませぬ。この工藤王国が続く限り、姫と姫のお国に永遠の感謝と忠誠を捧げましょう」

深々と頭を下げた王に、和葉も心からの感謝を込めて優雅に膝を折りました。

「本来ならここで我が国の王子とのダンスをお願いしたい所だが、姫は既に服部王国の王子殿下の元へのお輿入れが決まっているとの事ですし、ここには我が国へお輿入れ頂く毛利王国の姫もいらっしゃるので、失礼ながら殿下にもご参加願って最初のダンスを4人で披露して頂けないだろうか？」

王の言葉に、広間にまた小さなざわめきが起こりました。

確かに、毛利王国の姫は以前は工藤王国との間に縁談があった事はここにいる皆が知っている事でしたが、今は服部王国との縁談が進んでいたはずです。

その上、服部王国では毛利王国の姫との縁談の前にも、それが滞っている噂され始めてからも、王子が妃を迎えるという話はなかったはずなのです。

ましてや、大国が未来の王妃として迎えるほどの姫を誰も知らなかったなどと、あるはずがありませんでした。

「いずれ改めてお知らせになるのだろうが、この席で我が国の慶事と共に貴国の慶事をも祝える事を感謝するよ。貴国にとって最高の縁組だと、お祝い申し上げる」

「私からも、毛利王国の姫君のお輿入れが決まりました事、お祝い申し上げます」

今までの慣習からすればありえない事の連続に、参列者たちは皆一様に言葉もなく成り行きを見守っています。

不思議な静けさに包まれた広間で、この宴での計画を立てた当事者である平次と新一が、それぞれ和葉と蘭の手を取って中央に進み出るのに合わせて、緩やかな舞曲が流れ始めました。

この宴に招待された各国の使者や王族たちが、全ての事は3大国の間で納得の上に決められた事であり、和葉についても服部と工藤の両国が後ろ盾となる姫なのだと理解出来たのは、儀式の終わりと宴の始まりを告げる最初のダンスが終わった時でした。

第30話『虹色の鐘の音・7』

宴が終わったのは、夜もすっかりと更けた頃でした。

服部・工藤・毛利の3大国以外の国にとってはそれこそ青天の霹靂で思いがけない事の連続でしたが、それでもさすがに国を代表して参列している方たちだけあって、その心のうちはともかく祝いの場を損ねて大国の不興を買う事のないようにと動揺や戸惑いを巧みに隠しておりましたので、表面上はとても穏やかにその幕を閉じました。

「お疲れさん」

「オマエもな」

宴の翌日、まだ昼前の国賓として迎えた高貴な方への訪問には少し早い時間に、新一が蘭を伴って平次の元を訪れました。

本来なら礼を失するようなあまり褒められた事ではないのですが、これもまた計画の内です。

「今日は雪遊びに行こうと思ってたのに、この様子じゃダメよね」

大きな窓の向こう、灰白色の空から舞い降りてくる雪を眺めながら、蘭が少し残念そうに呟きました。

夜半から降り始めた雪は次第に強くなり朝には王宮を一面の雪景色に変えていましたが、まだまだ降り止む様子はありませんので、とてもではありませんが高貴な姫君が城を出て遊びに行く事など許されません。

「昨夜は疲れちゃったし、カードでもしよう？」

城の庭で侍女たちに作らせた雪兎を眺めたりするくらいなら出来ませんが、それでは人払いまでしてここに集まった意味がありませんので、仕方ないというように一つ息をついて、蘭は和葉を暖かな暖炉の傍へと誘いました。

綺麗な絵や様々な数字の描かれたカードは、賭け事に使われたり占いをしたり絵を組み合わせて物語りを作ったりと色々な遊びの出来るとても楽しいものです。

和葉はまだ絵合わせくらいしかカードの遊びを知りませんが、王家の持ち物らしい精緻な絵が描かれたカードは眺めているだけでも楽しいもので、蘭の心遣いと共に昨夜から張り詰めていた気持ちを解してくれました。

「まだ暫くは何だかんだと煩いだろうけど、これで取り敢えずは一段落だな」

蘭と和葉が暖炉の前で柔らかなクッションに包まれるようにしてカードに興じているのを見遣りながら、新一が暖かなお茶の入ったカップをまるで乾杯するように掲げました。

それに応じるようにカップを掲げた平次が、少し皮肉気な笑みを返します。

「ちょお力技やったしな。まあ、それなりに反発やらあるやろけど、昨夜のアレ見ときながらケンカ吹っかけて来るようなアホはおらんやろ」

「さすがに演出過剰かなとは思ったけどよ、親父が和葉姫に言った事は本心だし、身分と権力は使いようだろ？」

同じような笑みを浮かべた新一が、お茶の香りを楽しむようにゆったりとソファに身体を預けました。

「後は、陛下が仰った『海の姫』に突っ込んで来るヤツがおるかやな」

「その辺は、あの狸が上手くやるさ。それに、オメーの方が大変なんじゃない？」

「オマエんトコが狸やったら、オレのオヤジは狐やで？」

「新一も服部君も、いくら親子でも、陛下に対して失礼よ」

カードをしながら聞くとともになしに平次と新一の会話を聞いていた蘭が、あまりの言い様に苦笑交じりに2人をたしなめます。それに、平次と新一が楽しげに笑いました。

「オメーんトコも似たようなモンだろ？毛利王国は王妃でもってる国だなんて言われてるけどよ、中々どうして、あの王も喰えない人だと思っぜ？」

「確かに。毛利の方も心配いらんやろ」

「今の王は親父たちだし、面倒事は任せて逃げ切ろうぜ？」

新一と蘭がまだ早い時間から平次の元を訪れたのは、昨夜の宴のために集まった各国の使者たちが服部王国と工藤王国の後ろ盾を持った和葉に近づこうとしたり、情報を引き出そうとするだろうと予測しての事でした。

この国の王子である新一が国賓である平次の元を訪問していれば、工藤王国の王子への謁見の申し込みも服部王国の国王の名代へのご機嫌伺いも、全て正当な理由で断る事が出来るからです。

そうなれば、各国の使者たちも王に謁見を願うしかありません。

悪戯っ子のように笑う平次と新一に蘭も小さな笑い声を上げましたが、ただ一人、まだ国同士の関係などを良くわかっていない和葉だけが不思議そうに首を傾げました。

「和葉ちゃんは心配しなくていいわ。国がどうのつてなると色々知りたがるのは仕方ない事だけど、和葉ちゃんがどこのお国の姫でも、あたしの大切な友達で恩人だって事は変わらないんだから」

蘭はまだ、和葉が人魚だとは知りません。

昨夜の宴での王の『海の姫』という言葉が気になっているでしょうに、それでも何も訊ねようとはせず友達だと言ってくれた蘭に、和葉は思わず抱きつきました。

第31話『虹色の鐘の音・8』

工藤王国から帰国すると、俄かに和葉の周りが慌しくなりました。国王に帰国の報告をしたあと平次はそのまま本宮に残っていました。が、帰国前に予め指示がされていたのでしょうか、乳母を筆頭とした和葉付きの侍女たちばかりでなく本宮から派遣されてきた侍従たちまでが忙しく立ち働いていました。

「どれも素晴らしいお品でございますね。殿下のお見立てがこんなにお見事だなんて、存じませんでした」

和葉の前に広げられた織りも刺繍も見事な布を手に、乳母がほうつと息をつきました。

花嫁を包むのに相応しい光沢の美しい純白の布、輝く海と波を映したような鮮やかなブルーのグラデーションが見事な布、芳しい大輪の花のような艶やかな布、そしてまるで天使の羽の様に柔らかく軽いレースに色とりどりの羽や花や宝石などで、部屋は春の庭園に迷い込んだかのような華やかさです。

その全てが、和葉のために本宮に集められたものの中から平次が選んだものでした。

「ご婚礼まで1ヶ月だなんて、姫様のお国にもご無理申し上げてるんでしょけれど……」

仕立て屋や細工師たちとの細かい打ち合わせを終えた乳母が、疲れた身体をソファに預けている和葉を気遣わしげに見遣りました。

王族の婚礼の仕度は、それこそ衣装を仕立てるだけでも本来何ヶ月とかかるものなのです。

ですから、他国からのいらぬ詮索を避けるためにも先手を取りたい

という思惑から婚礼を急ぎたい服部王国の都合で準備を進める事に、大切な娘である姫を嫁がせる事になる和葉の父王が不満を持っているのではないかと案じられるのです。

特別な財産を持たない親でも嫁ぐ娘のためには精一杯の仕度を整えてやりたいと思うものですから、乳母の心配ももつともなものでした。

まるで母のようにあれこれと氣遣う乳母に、和葉は心配要らないと笑みを浮かべました。

海の王国でも確かに、婚礼となれば花嫁のために美しい飾りを作ったり宴を催してお披露目をしたりしますし、それが王族ともなれば盛大な仕度になりますが、人間の世界ほどに難しい事はないのです。

「姫様もお仕度でお疲れでございましょう？今日はもう予定もございませんし、少し息抜きをなさいませ」

部屋を片付けていた侍女たちが下がると、乳母は和葉にゆったりとした部屋着を勧めました。

衣装や宝飾品を誂えるために帰国してからずっと部屋に閉じ込められて人形のようにされるがままだった和葉ですが、明日からはさらに式典の作法なども学ばねばならないのです。

身体を締め付けるようなドレスや踵の高い華奢な靴にももう随分と慣れていましたが、和葉にとってはやっぱり窮屈なものでしたので、乳母の手を借りて着替えると疲れを逃がすようにほうっと大きく息をつきました。

平次が本宮から戻って来たのは、帰国してから7日目の夕刻でした。

「明日、親父がオマエの姉姫に挨拶する事になったら、オマエも同席してくれ」

平次からそう告げられたのは、久しぶりに一緒に夕食をとった後でした。

国王との面会ならば、姉姫の園子は父王の名代として来る事になりますから、事実上の輿入れとなります。

嬉しさの反面、和葉には姉姫の園子が人間の前にその姿を現す事に不安もありました。

園子も父王とよく考えての事でしょうし、平次のする事ならば心配はいらないと思いましたが、人魚が大勢の陸の人間の前に姿を現したという話は聞いた事もなかったのです。

和葉のその不安は、杞憂に終わりました。

満月がその光で海を美しく照らし始める頃、普段は漁師たちの船が繫留されている城に程近い小さな港では、王の命令で昼のうちに全ての船が浜に上げられ、遠くから訪れる貴人を迎えるために港は勿論の事、沖へも兵をやって人の出入りを厳しく制限していました。服部王国の国王夫妻と王子の平次、そして海の王の娘である和葉以外にこの場にいる事を許されたのは、少し離れた所に控えている数人の近衛兵と国の重鎮たちと網元などの町の有力者たちだけです。

「お出ましのようやな」

平次が小さく呟いた時、不思議な程に風もなく凪いだ海に白い波が立ちました。

それは次第に数を増し、きらきらと光を弾きながら大きくなって、港へと近づいて来ます。

最初に現れたのは、5頭のイルカでした。

何かを護るように隊列を組んだイルカたちの中央に、一際美しい真っ白なイルカが珊瑚と真珠で作られた宝冠を戴いた園子をその背に乗せて波に乗るようにふわりと浮かびました。

「お初にお目にかかります。海の王の名代として参りました園子と申します」

満月に園子の虹色の尾がきらきらと輝き、海を渡る風のように澄んだ声がまるで音楽のように響きます。

その美しくも不思議な光景に、その場にいた皆がうっとり見蕩れました。

「ようおいで下さった」

国王が港の栈橋へと歩み寄り、海の王の名代である園子に最大級の敬意を持って膝を折りました。

陸の王国同士ならばこの後に長い時間のうちに様式化された形式的な遣り取りが続くのですが、陸と海という違う世界にある国の間には共通する作法などありません。

これが他の国だったなら、自国の唯一の王子が妃を迎えるというのに形式通りに進まないとは他国に侮られる事になると不満を持つ者も出たのでしょうか、服部王国は幸いにも国王も重鎮たちも民もみなあるべきままに柔軟に受け入れる度量と気質を備えていましたので、この常ならぬ訪問も好意的に受け取られました。

「海の王国の者が陸の人間と縁を結ぶのは初めての事ゆえ、王も気を揉んでおります。多くは望みません。嫁ぐ妹姫が幸せである事だけを望みます」

「海の恵みを頂く身として、王には常に最大の敬意を抱いている。その王が我が国にお許しになった姫を哀しませる事など決してないとお約束する。ご心配なさらぬよう、お伝え頂きたい」

「それを聞いて安心しました。妹姫が幸せである限り、海は貴国の味方であり続ける事を誓いましょう」

園子が真珠で飾られた手で海面に触れました。

それが合図だったのでしよう、様々な大きさや色の真珠や珊瑚を載せた大きな貝を捧げ持った人魚たちが、イルカに護られるようにして姿を現しました。

赤子の揺り籠にもなりそうな大きな貝は50程もあるでしようか、そのどれもに陸の人間はたとえ国王といえども見た事のないような見事な宝玉が、溢れんばかりに載せられていました。

「陸の作法には不案内ゆえ礼を失しているかもしれませんが、お納め下さい」

「これは見事な。海の王の偉大さと姫への深い愛情が、改めて感じられます」

王の指示で底の浅い船が何艘か人魚たちに近づき、貝を受け取りました。

「海の王国はあまり陸との繋がりを持ちません。ですから、これ以降お目にかかる事もないでしょう。至らぬ所もあるでしょうが、妹姫をよろしく頼みます」

海の王国からの訪問は、月が動く間もない程短いものでしたが、参列した全ての人の心に強く残りました。

人魚たちは1人2人と海に帰って行きます。

最後に残った園子が、イルカから降りて栈橋へと泳ぎ寄りました。王の後ろに控えていた和葉が、栈橋の先端から海を覗き込むように膝を付きました。

姉姫の園子とはこれきり会えなくなるわけではありませんが、平次との婚礼が済めばもうどんなに望もうと決して海の王国には帰れない

くなるのです。

不安と寂しさから瞳にうっすらと涙を滲ませる和葉の額を、園子はその白い指でちゃんと突付けました。

「和葉ちゃん、幸せにね。しっかりやりなさい。それと、王子様！」

王の名代から和葉の姉姫へと戻ってにつこりと笑いかけた園子が、平次を呼びました。

「海の魔女から、あなたにとって」

そう言って園子が平次に差し出したのは、小さな赤い珊瑚の小箱でした。

「『あなたのために特別に作ったのよ』って伝言を預かってきたの。意味はわかるわね？」

「勿論や。おおきに」

その伝言だけで小箱の中身に気付いたのでしょうか、平次と園子はお互いにだけわかるような悪戯っぽい笑みを交わしました。

「和葉ちゃんは気にしないでいいわ。王子様へのプレゼントだから」

1人意味のわからない和葉にもう一度笑いかけると、園子はイルカたちと一緒に銀色の波を残して海へと帰って行きました。

第32話『虹色の鐘の音・9』

服部王国は世継ぎの王子の結婚式という、国王の戴冠式以来の大きな慶事に沸き立っていました。

商家や裕福な家では祝いの酒や食事が道行く人々に振舞われ、大道芸人たちがその見事な芸を城下のそこで披露して滅多にないこの祝賀を盛り上げています。

自国の王子が正妃として迎えるのは海の姫だという事は既に皆の知るところとなっていました。が、不満を持つ者は殆どおりません。

むしろ、海からの恵みを受けている服部王国にとっては喜ばしい事だと好意的に受け入れられ、そこで海の王を称える声が上がっています。

冬の気配も深くなり色鮮やかな花も少ない季節だというのに、家々に飾られた色とりどりの布や華やかに装った娘たちで服部王国はまるで一足飛びに春を迎えたようでした。

一方、王国の中でも最も格式の高い王家直属の司祭が管理する神殿は、静かな緊張感に包まれていました。

工藤王国での祝いの宴から帰国する参列者たちを追うかのように立てられた服部王国からの使者に、工藤王国と毛利王国を除く国々は混乱した情報を整理する間もなく、再び大国の祝いの場合へと出向いています。

それを狙っての事とはいえ、王族の結婚式とそれに伴う様々な式典を僅か1ヶ月で準備するというのは今までに考えられない事でしたから、何か不手際があってはならないと、特に滅多に外国からの賓客を迎える事のない司祭たちは気を張り詰めていました。

神聖な場所に相応しい、上品ながらも美しく装飾された大窓から射しこむ柔らかな冬の日が、神殿を優しく照らしています。

その陽射しを全身に浴びながら、参列者たちの見守る中、司祭長が厳かに右手を上げました。

それを合図に左右にある大扉が開き、淡い若草色の修道服に身を包んだ巫女に先導されて、司祭長の左手側から王子である平次が、そして右手側からその妃となる姫君の和葉が、ゆっくりと祭壇に歩み寄ります。

銀糸をふんだんに使って刺繍された純白の絹に照りも巻きも見事な真珠を散りばめたドレスを纏い、ふわりとした淡雪のようなベールに包まれた花嫁は申し分のない程に美しく、参列者の間からほうつと感嘆のため息が零れました。

「こちらにお手を」

司祭長に促されて、古代文字で神の言葉が記された教典に和葉が右手を、平次が左手を乗せました。

その2人の手の上に自らの左手を翳し、司祭長が神への祈りの言葉を捧げます。

国の重鎮たちや各国からの賓客たちの見守る中、儀式は厳かに進行していきました。

「こちらにご署名下さい」

神への祈りと祝福の言葉に続いて、司祭長は後ろに控えていた巫女から1枚の紙を受け取り、2人の前に差し出しました。

この神殿の紋章が入った証明書への署名があって初めて、この婚姻が有効なものであると認められるのです。

恭しく渡されたペンで平次と和葉がそれぞれ署名をすると、司祭長はその証明書を2人の前に掲げました。

「最後にお言葉を頂きます。殿下、神の御前にて、この婚姻に嘘偽

りなく同意する事を誓えますか？」

「誓います」

司祭長の言葉に、平次の迷いのない凜とした声が神殿に響きました。

「姫、神の御前にて、この婚姻に嘘偽りなく同意する事を誓えますか？」

婚姻の儀式に於いて、その当事者である花婿と花嫁が言葉を発するのはこの時だけなのですが、和葉は声を失っています。

誓いの言葉すら告げられない事に心が痛みましたが、精一杯の気持ちを込めて和葉は音のない声で言葉を紡ぎました。

「ち…いま……す」

微かに零れた音にはっと顔を上げ、和葉は戸惑ったように喉に手を当てました。

初めての恋に人間の足を得る代償として海の魔女に支払った声は、あの真珠を蘭に譲ってしまった今、2度と取り戻す事は出来ない筈です。

けれど、ほんの小さな声でしたが、確かに誓いの言葉が耳に届きました。

自分の望みがそう錯覚させたのか、それとも本当に誓いを声に乗せる事が出来たのか、混乱して震える和葉の小さな手を、大きな手が優しく包み込みました。

「もう一度、言うてみ」

縫るように自分を見つめる和葉に、平次はどこか楽しげな悪戯っ子のような笑みを浮かべて、誓いの言葉を促しました。

「……ちかいます」

ずっと封印されていたためかまだまだ弱弱しく掠れていましたが、美しく紅を乗せた形のいい唇から零れたのは間違いなく和葉の声でした。

「オマエの姉姫と海の魔女からの祝いや」

平次の言葉に、和葉の頬を波の雫のような涙が伝います。

あの夜、姉姫の園子が平次に託した小箱には、きつと蘭に譲ったものと同じ真珠が収められていたのでしょう。

姉姫の園子と海の魔女の志保からの祝いというのは本当の事でしょうが、和葉の声が戻る事を望んでくれたのは間違いなく平次です。

「あ……りが……と」

頼りない声は、涙に邪魔されて上手く言葉になりません。

それでも和葉は、勝手に国を飛び出した自分を見捨てずにいてくれる人たちに、何も語らない自分をそのままに受け入れてくれた人たちに、そして何よりも自分の恋心を受け止めてくれた平次に、心からの感謝を告げました。

「司祭長、これでええな？」

「は……はい」

王子の妃となる海の姫は、服部王国に嫁ぐために声を失っている。だから、最後に頂く言葉もただ頷く事でそれに代えると、司祭長は国王と打ち合わせていました。

それが、予期せずこうして言葉を頂けた事に一瞬まだ儀式の最中だ

と言うことを忘れてしまった司祭長でしたが、平次の声に我に返りました。

「祝福の鐘を！」

司祭長の指示を受けて、司祭たちが高樓に向いました。

婚姻が成立した事を知らせる鐘が、高らかに鳴り響きます。

澄んだ鐘の音は、人々の祝福の声を乗せて海にまで広がっていきま
す。

それが届いたのか、まるで祝福するかのように神殿から遠く望む海
にきらきらと波が弾け、美しい虹が掛かりました。

<了>

第32話 『虹色の鐘の音・9』（後書き）

『そして、王子様とお姫様はいつまでも幸せに暮しました。めでたしめでたし』

……という事で「人魚姫異伝」は完結です。

この後、王子様がお姫様を怒らせては、お城の周りにヒトデがびっしりとか、ウミウシがみっちりとか、クラゲがぎっしりとか、地味にダメーじ食らうお仕置きを海の王から受けたりする愉快な日々を過ごす事と思います（笑）。

そして月日が流れて……。

いいお天気で潮の具合も良くて大漁日和だというのに、1匹の魚どころか貝すら捕れない時。

漁師たちはお城を見上げて苦笑いしながらこう会話します。

「ああ、王様がお姫様を怒らせなさったようや」

お天気が思わしくなくて海も荒れているのに、浜辺で魚が捕れたり貝が豊漁だったりする時。

漁師たちはお城を見上げて笑いながらこう会話します。

「ああ、王様とお姫様は仲良うすごされとるらしい」

海の姫を妃に迎えた王子が王となった頃の、平和な服部王国でのお話。

こんな平和な時間が流れている事でしよう。

小さな修正はしましたが、今回も今までと同様に過去作からの投稿でしたので、既にご存知だった方もいらっしゃるかもしれません。次回もまた過去作からになります。こちらに投稿出来るものが見つかった時に利用させていただこうと思いますので、その時はまたよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8517k/>

人魚姫異伝

2010年10月11日04時20分発行